

---

# 魔術師と魔女の遺産

友野久遠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔術師と魔女の遺産

### 【Nコード】

N1430R

### 【作者名】

友野久遠

### 【あらすじ】

「ウィザードへ愛をこめて」シリーズ第4弾。  
不器用ながらラブラブの吹雪と美久のトラウマ・カップルに、強力なライバルが。

自称心霊治療師と、吹雪の対決にマスコミは騒然。一方で美久は吹雪の初恋の女性に心穏やかじゃない。「ウィザード」は今日もにぎやかです。

## 1、序章 〈妄想マーキング〉（前書き）

シリーズ第4弾始まります。これまでネットで細々と営業していた吹雪君が、ひよんなことからマスコミに追い回される羽目になるんですが、今回恋のライバルも登場する予定。どうぞよろしくお付き合いくださいませ。

## 1、序章 妄想マーケティング

それは1本の電話から始まった。

その電話が魔術師のお尻のポケットでコロコロと古風な呼び出し音を立てるまで、あたしたちはちょっと険悪な会話をしていただけだ。

「美久ちゃんが怒ってる……」

土曜の晩、酔客で大盛況のスナック喫茶・兼占い館「ウィザード」店内。

お気に入りのボックス席で、上目づかいにパソコンから視線を外したウィズが、おずおずとあたしに言った。

そうかそうか。 やつとあたしの怒りのオーラが届いたか。

とか見え見えなことは、さすがに言わない。

「怒ってるんじゃないわ」

「いや、怒ってる。 でも僕に文句言っても仕方ないから黙っててくれてるんだ」

そこまでわかってるんだったら、もうちょっとなんとかしようよ  
！！

そう、あたしは欲求不満だった。

まだ処女膜もくっついたままだというのに、乾いて乾いてしょうがなかった。

この2週間、手も握ってくれないコイツが悪いのだ。

忙しいのはわかる。 あなたのせいでもないのもわかるよ。

でも、せめてお休みのキスをするくらいのプライベートタイムは取れてもいいもんだと思う！

「ウィザード」の看板占い師、如月 吹雪。

今夜も彼の手は休むことなくパソコンを打ち続ける。

先月、サイトの占いを某雑誌が取り上げてから、急に忙しくなったのだ。

サイトにアクセスする合間にも、戸口で嬉しそうに待っている女の子たちに引っ張られ、占いルームに籠ってお仕事までしている。

それで数十分後にはきゃいきゃい困まれて戻って来て、お酒まで付き合わされる羽目になる。

真に悩める子羊の役に立ちたいという理想は、どこにすっ飛んで消えたのか。

「本当によく当たるわねえっ」

「自分のこともわかるの？」

「こわくなーい？」

悩みのかけらもなさそうな声で騒ぎ立てられて、彼もつんざりしてるんだ。

乙女らよ、あんたらが魔術師の能力や性格よりも、外見に興味があるのはわかる。

でもせめて彼が大嫌いと言っている香水くらい、つけずに来ることは出来ないわけ？

あたしの最愛の魔術師は、犬の鼻と神の目を持っている。

ついでに驚異的に整ったルックスも持っている。

あきれほどの優しさと、張り倒したくなるほどの禁欲と自己犠牲の精神も持っている。

もう一つ、自分を引き取ってくれた義母、このスナックの経営者

である喜和子ママに対する感謝と愛情も。　そう、あんたらミーハークライアントは、ママの店のお客だからないがしろにされずに済んでるだけなんだから。

ボックス席になかなか戻って来ない恋人を待ちながら、あたしは頭の中で妄想を育てる。

ウイズをあいつらからむしり取って、側に座らせて、これ見よがしに肩にすがって耳元で囁いて、あの連中の香料臭い厚化粧の顔から、嫉妬の炎を吹き出させてやりたい。

うちの王子様、顔にマーケティングするとかあたしの名前書いとくとか、できないもんかしら。

……なんてことは、あけすけに言ったりはしないんだけど。

「ごめんね美久ちゃん、知らん顔してて。

美久ちゃんが僕に何をしてほしいか、全部わかってるよ」

「ぜっ！　全部？」

「うん」

「全部って、どのくらい全部よ？」

「百のうち百全部だよ。　あれもこれもそれも」

それは困る。

確かにこの気持ちをウイズに解って欲しいとは思っていたけど、全部判って欲しくないぞ。

こつやって横顔を見ながら妄想してることを全部なんて、絶対に知られたくない。

例えば「ごめんね」なら、不意に抱き寄せられて、ごめんね、チユツとかしてほしかったり……。

「そういうことは人前でしちゃダメって、怜に怒られたんだ。デリカシーと常識をわきまえないと美久ちゃんが恥をかくって」

……平気で人の妄想を読むのは、デリカシーと常識の範疇か！

あたしの恋人は、こういう男だ。

俗にいう千里眼。

映像を見る形でなら、どこの、いつの、何の、誰の、記憶でも事実でも読んでしまう。

そのせいか、はたまたタダの天然なのか、微妙に常人と感性がズレている。

「名前なんか書かなくても大丈夫だよ。

ほら、この席にはほかに誰も座らせてないだろう。僕が喜和子ママに頼んだんだ。

じつはこの席、内緒で分煙装置をつけてもらってあるからさ。

あいつらの化粧品の悪臭から逃れなくなったら、ここに来てこっするとね」

あたしの顔は赤くなった。

ウィズはあたしの髪の毛に鼻を近づけて息を吸い込んだのだ。

こ、これもデリカシーの許容範囲なのか？

「いい匂い」

「な、なんでよ。シャンプーも化粧品も無香料よ」

ウイズが嫌いなものはつけない、という言葉は飲み込んだ。

「だからいい匂いなんだ。匂いと一緒に、美久ちゃんの色んな考えがどーっと入って来てね」

「は、は、鼻から入るのおっ？」

「香りがイメージになって画像になるんだ。って、なんで叩くのさ？」

「嗅ぐなあ！！」

「冗談じゃない、脳みそごと吸い込まれてる気分だ。

妄想、止まれ。あたしは何も考えまいと努力しながら、ウイズの体をポカポカ叩いて遠ざけた。

「なんでだよ？ 美久ちゃん、密着したいって思ってたじゃないか」

「密着はしたいけど、吸引されるのはいやっ！！」

その時だった。彼の携帯が鳴りだしたのは。

魔術師はポケットから出したそれを耳に当てるや、いきなり、

「魔窟の魔女が死にましたか？」

言ってから耳から遠ざけた。

間髪を入れず、とんでもなく大きな怒鳴り声がそこから溢れ出て来た。あんまりヴォリューム上げ過ぎて、まったく日本語に聞こえないほどだ。そうでなくても言語不明瞭なしゃべり方なのだから。

「おおおまえはしんじられないねえなんでそそそんなくちがきけるんだいどどこからききこんだんだかしらないけどおやがしんだっていうのにひとごとみたいにつめたいいいいいかたしかできないんだからおおおおまえにれんらくしろってべべべんごしさんのせせせんせがいわなかつたらおおおまえなかかかか……」

ウィズはあきれ果てた表情で、携帯を切ってしまった。

「魔女ってだれ？」

あたしが質問すると、

「魔女は魔女だよ。 あはは、ちがうよ美久ちゃんが想像してんのは魔法の絨毯！つて痛い！」

「読むな嗅ぐな吸い込むなあっ！」

その時は、軽くごまかされてしまったのだ。

でも、災いというものは、どう避けたところで来てしまうものなのだった。

## 2、突然の引っ越し

「独立しようと思うんだ」

喜和子ママとあたしの前で、ウイズこと如月吹雪が宣言した。

閉店後の「ウィザード」のカウンターテーブルで、遅い夕食を取りながらのことだった。

ママがお冷をコップについでくれる横で、あたしはスパゲティを口に運んでいた。

「ここを出て、新しい事務所を開くよ」

「そう……いつごろ？」

「明日」

あたしとママは手に持った物をそれぞれ取り落とし、カウンターの上で、流しそうめんが出来上がった。

時は春。

と言っても引越越しシーズンの3月はとくに過ぎ、新生活スタートの時期4月も終わって、ゴールデンウィークも終幕を迎えた5月中旬のことだ。

魔術師がついに辛抱たまらん状態になった原因は、このゴールデンウィーク中に殺到したクライアントの客層にあるとあたしは見た。

「もともとスナック喫茶と二本立てでやるには、ちょっと顧客が増えすぎてるんだ。

雑誌でホームページを取り上げると言われた時、断っておけばよかったんだけどね」

「まるで人気が出たのが悪いみたいに言うのね」

喜和子ママがテーブルを拭きながら頭を抱える。

もともとあまりメジャーになるのを、ウィズは喜んでないのだ。本当に困った人の助けになりたくて占いをやってるのに、そうでない客ばかり増えるからだ。

噂のイケメン占い師に、ただ会ってみたいだけの女の子とか、本当に当たるかどうか試してみたいだけのヤツらとかが殺到するのを嫌っている。

それでもスナックの客として飲み物の一つも注文してくれれば、断るわけにいかない。

いい加減な客を受け入れれば、いいかげんな噂が撒かれる。ナンパのついでに営業してるかのように取られたら、真面目な客は寄り付かなくなる。

だからウィズは占いの窓口を、ホームページ内に設けたメールだけに絞ろうとして、この独立を計画したのだ。

HPにアクセスさせてひとまず要件を書かせ、メールで済む客と直接会って「読む」客とを篩い分ける。同時に、飲んだ帰りに冷やかに寄って来る輩を完全にシャットアウトする。

普通の占い師なら、こんな不遜な商売をしていたら干乾しになってしまうが、彼の場合はもともと占による儲けを度外視している。

ウィズの収入の99%は、株取引によるものだ。そっちの資産は雪だるま式に増えている。

ボランティアで占い館をやっても、何ら生活に支障はないだろう。

魔術師が新事務所を構えたいと言い出したこと自体は、さほど無謀なことではない。

喜和子ママも、来るべき時を迎えたという表情だった。

ただし告知のタイミングが問題だ。

彼があたしと喜和子ママに独立を切り出した時、すでに新事務所は内装まで完了していたのだ。

「明日は荷物を搬入するから」

「吹雪さん、あなたねえ……」

「心配しなくても、全部業者さんがやってくれるよ。」

あ、ベッドルームも事務所の同じ階に移すから」

「ええ？ このマンションまで引き払うの？」

「ご飯食べに来るけどね」

ママは貧血を起こして目を回してしまった。

喜和子ママをベッドに運んだあとで、あたしのマンションに向かって二人で歩きながら話をした。

「絶対ウイズが悪いわよ。そりゃ、ここでも同居ってわけじゃなかったけど」

「反対はしないと思ったんだけどな」

さすがの非常識息子も、ちよつと落ち込んでいるみたいだ。ただし、何が悪かったのかはわかってないようだった。た

これは、ウイズの「心の歪み」じゃなくて、単なる「感覚のずれ」によるものだ。

魔術師はいちいち相手に許可を求めなくても、許してくれるかれないかが判る。

そのせいで、「知らないことを打ち明けられた時の相手の驚愕」を慮ることが苦手だ。

「ええええそーだったのか、なんで言ってくれなかったんだよ」

そういうショックを受けたことが、これまでの人生にないからだ。人に相談する必要性も滅多に感じないだろう。

「反対する気がなくても、一緒に考えるべき問題から外されると傷つくわ。」

親なら子供の独立は重要な問題よ。

ウィズは許可さえ取ればいいと思ってるから、そんなずれたことをするのね。」

前もって口に出すこと、言葉にすることで人を安心させることを覚えて欲しいわ。」

かなりきつい言い方と思ったが、この際はつきり言わせてもらった。

感覚のずれというのは学習できないことだから、約束として言葉に残した方がいいと思ったからだ。

「美久ちゃんも、事前に言って欲しかった？」

「当たり前でしょ。」

「そうか、ごめん。」

「ごめんじゃ済まない。あたしはわざわざウィズの家近くに越して来たのよ。」

こうして歩いて送ってもらうの、毎晩楽しみだったのに。」

「越した後も送るよ。」

「車じゃ無理でしょ、毎晩お酒飲むじゃない。」

白井さんやベレッタ刑事とも疎遠になっちゃうわ。

絶対ウィズは人づきあいしなくなる、あたしとも会いにくくなる。」

「美久ちゃんは反対なんだね。」

「そうよ。」

「ごめん。でも、もう決めたんだ。」

あたしはこの時、この身勝手な男が内心で何を考えているのか、さっぱりわからなかった。

いくら周りが腹を立てても、明日の話じゃどうにもならない。

魔術師は次の日、さっさと引越を決行してしまった。

その決断がいかに深遠な配慮のもとに行われたかなんて、その時のあたしにはわかるはずもなかった。

手伝いになんかいつてやるもんか、と思ったけど、移転先は見ておきたいというのが本音だ。

大学の講義が終わるまで、イライラしっぱなしだった。

言い遅れたがあたしこと篠山美久は、この春めでたく志望校に合格し、現在M大に通学中だ。

福祉学科、専攻は児童福祉。夢に一歩近づいたのだ。

非虐待児童のための仕事がしたい。

ウイズみたいにわけのわからない苦勞を背負って生きる子を減らしたい。

それがあたしの夢なのだ。

しぶしぶながらウイズにメールを入れると、もう荷物の搬入は終わっているという返事。

まだ片づけがあるとかで、迎えにも来てくれない。

「もう、冷たい。知らないんだから」

あたしは悔し紛れにちょっと昔の悪い癖を出してしまった。

嫌味に同級生の男の子に声をかけ、車に乗つけて貰えるように会話を誘導したのだ。

新事務所のあるマンション正面に、でーんと横付けして降ろして

貰った。

お見通しの魔術師が「見て」いたら、妬きもちのひとつも焼くだろう。

これくらいいいましい仕返しはさせてもらってもいいと思った。ところが、妬きもちの素は向こうの方が強力なものを用意していたのだった。

新しい占い館「ウイザード」は、意外やオフィス街のど真ん中に在った。

小さいけど新築のマンションの8階。

エレベーターで上がると、フロア入り口のドアがもう「ウイザード」仕様で驚いた。

映画の古城についてるような、重い木の扉だ。

これはつまり、ワンフロアまとめて買い取ったということだろう。

重厚なドアはそのイメージに反して自動ドアだった。

一步踏み込むと、ビルの中とは思えないような、欧風しかも古臭い内装にギョツとする。

事務所の室内は、家具の搬入が終わったところだった。

古風で立派な絨毯の上に、小物をいっぱい広げて、業者の女性スタッフが6人がかりでせっせと収納作業をしている。

ウイズはカウンターテーブルにちよつとお尻を乗つけてすがり、室内コーディネーターの女性と話し込んでいた。

相手の女性は、なんか随分張り切った物言いをしていた。

アラサー世代の元気なキャリアアウーマンタイプなんだけど、ウイズの前で構えまくってるのが判る。

まあ、珍しいことじゃないけどね。

ウィズと話すと、大抵の女性がテンション高くなるんだ。

「インド綿で照明を囲みましょうか、こつ何重かに。 もう少しムード出ますわ」

「灯り自体を暗く出来ないのかな」と、ウィズ。

「あまり落とすと、警察がうるさいですわよ。

出入り口をガラス張りにしろとか、受付に人を置けとか、もう言ってる来てるんじゃないですか？」

「言われてるよ」

ウィズは肩をすくめた。

「密室にすると、僕がクライアントに襲いかかるとしか思えないらしいね」

「如月さんの場合、逆じゃないんですか？

可愛いから女の子に襲われたりしそうですよね」

「するわけないじゃないか」

ちよつとちよつと、なんなのよその意味深な会話は。

そういうのは、気のある女が放つ罾の網なのよ、魔術師じゃないあたしにだってわかるんだから。

おまけにウィズは、あたしの顔を見るなり会話を唐突に中断した。

「じゃ、さっきの件、よろしく」

「オフレコで、ですね」

コーディネーターはわざと意識して、あたしの前で秘密めかしたことを言っただけを見た。

やられた、やきもち焼かせるよりも外敵を排除するべきだった。

第二の電話は、この時にかかって来た。

ウィズのコットンパンツのお尻で、またコロコロと古風なベルが響いたのだ。

あたしのせせこましい嫉妬の炎は、この一本の電話で吹き飛ばされてしまった。

ウィズの返事はまた意味不明だった。

「魔女が呪いを残しましたか？」

### 3、魔窟の魔女が集団で

「なんで！ 行きませんよ！」  
突然、ウイズが鋭く叫んだ。

「縁を切ったのは向こうだ。 シスターもそうおっしゃったじゃないですか。

もともと金の問題じゃないでしょう。 遺産遺産って偉そうに言わないで欲しいですよ。

そんなもん、こっちは少しも欲しくないです。

はい。 はい。 はい、それはないですけどね。

いえ、だから、弁護士がいるならその人がここに来ればいいじゃないですか」

ウイズは困惑した顔でカウンターから降り、しばらく相手の話を聞いていた。

「 ずいぶん虫のいい話に思えますけどね。」

ご本人がどうこうと言うんじゃないで、葬式に行くとかやなんですよ。 絶対魔女ばかり集まるじゃないですか。 取り殺されま  
すよ、ホントに。

はあ、分かりました。

シスターの顔を立てて行きますから、途中で救い出して下さいよ。

ホントお願いしますよ？」

携帯を切ったウイズは、ものすごく深い溜め息をついた。

「美久ちゃん、背広やネクタイ、探すの手伝って」

「ええと。クローゼットは、私室のほうね。もともとあった場所を言えば、多分、収納部隊が探してくれるんじゃないかしら。」

誰か亡くなったの？」

「うん。今夜お通夜で魔女が集合するってさ」

「魔女？」

「育ての親が死んだんだ。知ってるだろう、魔窟の女王様。」

で、多分、配下の魔女がうようよ来るだろ」

あたしは息を飲んだ。

ウイズの育ての親というと、ウイズを虐待した張本人じゃないか。喜和子ママの言うには、自分はホステスをやりながら、家出少女を拾って来てはただで下宿させる代わりに、非合法で売春を斡旋していた女だそうだ。その少女の1人が生んだ子供が、ウイズだ。魔女とはつまり、その家出少女たちだ。ウイズの母親は行方が分からなくなっているけど、他にもたくさん同居人がいたわけだ。もちろん今は少女でなく、オバサンになってるだろうけど。

魔窟の女王様が、数年前にある老人と入籍して、その老人がクリスチャンだったらしい。

女王様が死の床に着く前に、シスター松岡と神父さまが立ち会って、洗礼を施した。

で、今やクリスチャンとなったその女王様は、教会から葬儀を出すということになった。

そんなわけで今日葬儀の連絡をくれたのは、ウイズの恩師でもあるシスター松岡だったのだ。

通夜だの葬儀だのだけなら、自分で勝手に欠席を決め込むことができるが、今回そうはいかなかった。

女王が生前、ウィズに財産分与をすることを弁護士に相談していたからだ。

他にも該当者がいるのだが通夜の時しか出歩けないので、一緒に教会で弁護士と会って欲しいと言う。

「なんの冗談でそんな厄介なものをくれようって言うんだらう。

神父様も気の毒に。教会が似合う弔問客なんて、一人も来やしないぞ」

ウィズは黒いスーツと黒のネクタイをつけながら、愚痴っぽくこき下ろした。

「1千万も遺産を貰えるのにそんな言い方する人って、ウィズくらいだよな」

「ばかばかしい。1千万のどこが偉いのさ。

それで自分のやらかした罪がチャラになるんなら、僕は10人くらいにばらまくね！」

今夜の集まりは、カトリック的にはお通夜ではなく、告別式前夜祭、というそうだ。

5時を回ったころ、引越し業者はようやく片づけが終って引き上げて行った。

一応段ボールだけは撤去したけど、まだ雑然とした印象の部屋の中で、ウィズは腹立たしそうに着替えをしている。

あたしは心配になった。

「ね。あたしも一緒に行っちゃだめ？」

教会って、そういうところオープンだって聞いたわ。知らない人が混じっててもいいんじゃない？

すぐに着替えて来るから、連れてって？」

ウイズはあたしの顔を見て、覚悟したようにうなずいた。あたしがそう申し出ることは、すでに予想していたようだ。でも、自分から来いと言わなかったところを見ると、あまり歓迎はしていないらしい。

あたしはウイズがパニックを起こしたり、全開のあげく暴走したりしないかが心配だったのだ。

これまでずっと付き合いを避けていた人たちと会わねばならないのだから、ピリピリするのも無理もないけど、なんだか彼の様子は、屠殺場に向かう牛馬のようで見えていられない。

例えばあたしが、ミヤハシ父の葬儀に行けと言われたらどうするだろう？

黒いスーツに身を包むと、ウイズの外見は独特の雰囲気になる。人によっては妖艶と感じるらしい。うちの母はその怪しげな美貌を「セバスチャン」と表現した。

まあ、そういうった感じになるわけだ。

態度は冷静だったけど、ウイズが緊張しているのはよくわかった。あたしも体が硬くなるのを感じていた。

ウイズを、「コロ」と呼び、庭の犬小屋に押し込んで育てた人たち。

怒りと恐怖感が、あたしの胸の中にもある。

その人が天国へ行くことを、素直に喜ぶ気にはなれない。

こんな気持ちで葬儀に出ることの矛盾が、この戸惑いと緊張感を生んでいるのだと思う。

何か釈然としない気持ちを抱えたまま、あたしはウイズに車で送ってもらって、喪服に着替えるため一旦家に帰った。

教会の中に入る時に、ウィズはちょっと立ち止まって、あたしの手を取った。

その手が氷のように冷たいので、さらに不安になる。

何かあったらあたしが担いででも連れて帰ろうと、ひそかに決心した。

天井の高い荘厳な礼拝堂に、パイプオルガンの音色が洋画のワンシーンのように響いている。

カトリックの葬儀は初めてだったので、周りの雰囲気は仏式とあまりに違っていて拍子抜けした。少しも悲しみにくれるムードじゃないのだ。

明るい声で賛美歌を歌い、聖書の言葉をみんなで唱和し、思い出を語る身内の声をマイクで流す。

「神のもとに召されるのだから喜ばしいことだ。      というのが  
クリスチャンの基本姿勢なんだよ」

あたしの戸惑いをキャッチしたウィズが、小声で教えてくれた。

礼拝堂いっぱいの花に埋もれた老女の写真はごく普通のおばあちゃんに見えた。

田舎臭くなく、シャンとしてちょっと頑固そうな感じは受けたが、少なくとも魔女を束ねて甘い汁を吸いつくす女狐の類には見えない。

目に見えて怖いのは、一部の弔問客のほうだった。

ウィズの言う「魔女たち」は、後ろから見ても一目で見分けがついた。

服装はみんなと同じ黒づくめだけど、地味にも慎ましくも感じられない6人の女たち。

まず、髪の色が派手だ。まるで、田んぼの中にひとかたまりで咲くヒガンバナみたい。

おまけにそいつらだけが、やたらと後ろを振り返るのだ。

どうもウイズの顔を見て、お互いなにやら突っつき合っているようだ。

式典が始まってもお構いなしなので、感じが悪いことおびただし。

ウイズは賛美歌集に目を落としたまま、全く無視。でも普段神経質に動き回る指先が、あたしの手を握ったままで離さない。

献花の時間になった。

一人ずつが前へ出て、棺に花を手向ける。こういうところは仏式と変わりはない。

魔女たちがひとりひとり、あたしたちの席の横を通って前へ出て行く。

その時不意に、ウイズの手が熱くなった。

ワアン、と音がしそうなほど突然に、激しく熱を発したのだ。

この熱、あたしはよく知っている。ウイズが何かを「読んで」いるのだ。

彼が食い入るように見ていたのは、最後に歩いて行った、一番若手の魔女だった。

不健康なほど細身の体型は真っ赤な髪に少しもそぐわず、顔色は青ざめたような白だった。

式典が終った。

礼拝堂の外に出た途端、案の定、魔女たちが飛びついてきた。ところがなんと、途端にウィズはするりと抜け出して、シスターたちに挨拶しに行ってしまった。

長年の鍛錬のおかげか、逃げるのがものすごくうまい。

当然のことながら、代わりに囲まれたのはあたしだ。

「ちよつと、あんた。あの男の子、コロだろう？」

首のありかがわからないほど太った魔女が、鼻息も荒くあたしに話しかけて来た。

「ホントにコロかい？ えらいい男になっちまって、わかんなかったじゃないさ」

その隣でまくし立てたのは、モアイ像みたいにごつくて面長の魔女。

「痩せつぽちだったからねえ、昔は目ばかり大きくてさ」

あたしを無視してさつさと昔話をしようとするのは、唇の厚みが妙に目立つ、色黒の魔女だ。

それを皮切りに全員が口々に話し始める。

「ちよつと、返事ぐらいしなよ、あんたは何者なんだい？」

「このごろの若い子は、挨拶もしないねえ」

口を挟む暇もない弾丸トークを展開したくせに、いきなり人の事を叱り付ける。

しかもこつちが目を白黒させている間に、もうほかの事を話している。

「胸の大きな娘だねえ、コロは相変わらずだよ」

「好き者なんだから。昼間っから、お # & で、 : \* ・ してるんだろ」

え？

今、日本語でしたか？

「何とかお言いよ、上の口はもったいなくて使えないかい？」

「そりゃそうさ。」

ねえお嬢、コロの　　は　　\*で××こいのがいいんだろう

？」

魔女たちはゲラゲラ笑った。

あたし、何を言われたのかまるでわからず呆然としていた。

聞き取れなかったんじゃない。聞いたこともない言葉だったのだ。

でも、意味がわからなくても、直感的にわかった。何かいやらしいことを言っているのだ。

あたしはつい、にらみつける目つきになって、魔女たちを観察した。

ウイズじゃなくても逃げ出したくなる、この壁土のように濃い化粧。

「おや、怖い顔だねえ」

「だいたい判つたらしいね」

「お嬢ちゃん、知ってる？」

コロをオトコにしたのは、このオバサンなんだよ」

「そう、こいつだこいつ」

一同が指さしたのは、一番不細工な首なし女だった。

「へえへへ、あたしだけにおつかぶせんのはやめてくれよ。」

みんな似たり寄ったり、さんざん遊んだじゃないか」

「遊ばれたんだよう」

「よく言っつよ」

あたし、一瞬どう反応していいかわからず立ち尽くしたまま、荒  
息を体外に逃がそうとした。

#### 4、りんごはみかんに変わらない

「コロをオトコにしたのは、このオバサンなんだよ」

教会という場所にまったく似合わない、真つ黄色の頭の魔女軍団がそう言って笑い転げた時。

彼女らに囲まれたあたしの脳裏に、以前聞いた貴和子ママの声がよくあがった。

「引き取るうとして訪ねた施設で、吹雪さんが駆け寄ってきて言ったの。」

『僕はたぶん、お嫁さんはもらえないと思います。』

おじさんおばさん、それでもいいんですか？』って」

それを聞いた喜和子ママは、香水がきらいなのと合わせて、ウィズには性的トラウマがある、と思ったのだと言っていた。

そのトラウマを与えたのは、敷島をはじめとする「あやめプロジエクト」の連中だ、とあたしはこれまで思っていた。香水嫌いの原因がそれだったからだ。

なのに目の前の6人の魔女たちは、子供時代のウィズと性的関係を持ったと言うのだ！

それも苦汁の告白なんてものじゃなく、まるで思い出話のように。

(犯罪なのに……！ こいつらどういう神経してるの?)

あたしは黙ってその場を立ち去ろうとした。こんな品性下劣な話を、ウィズのいないところで耳に入れること自体、自分で許しがたい気がしたのだ。

魔女たちは、あたしの腕をつかんでまだ何か言おうとする。  
あたしはその手を振りほどいた。  
途端に魔女たちが殺気立つ。

「おおツ？なんだよ、ヤル気かい？」

「やな子だね、人の事バイキンみたいにさ」

「し、失礼なのはそっちじゃないですかッ」

言い返すと、突然割れ鐘のような大声が響き渡った。

これまでほとんどしゃべらずに相槌を打ってばかりだったひとりの魔女がしゃべったのだ。

歳の割に派手なソバージュの髪と、異様に厚い肩パットが気になる女だった。

「ななななにがひ、ひひひつれいだねじぶんがあああいさつもしないししないしで、こここつちはわざわざわざわざころにあう、あう、あつてやるっておも、おんも」

「わかんねーんだよ、ハナはしゃべるなっつってんだろ」

モアイが肩パットの頭を情け容赦なく叩く。

あきらかに吃音のあるこの仲間を見下しているその態度に、あたしはますます不快になった。

「悪いけど、話をする気になれません！

人間の誇りが無いのに人間のふりしてしゃべるんなら、インコの方がましよ！」

自分でもワケのわからない台詞が口をついて出た。

その時、うしろでプツと吹き出す気配があった。

「美久ちゃん、インコと比べるなよ。いくらなんでも失礼じゃないか」

「う、ウィズー！」

「怒られるよ……インコに」  
背後から急に声を掛けられて、あたしは飛び上がった。  
いつの間に後ろにいたんだろう？

「美久ちゃんも一緒に来て。 弁護士さんとの話、ちょっと長  
かかりそうだから」

ウイズはまたも魔女たちを無視して、あたしの手を引いて歩き出  
した。 途端に魔女たちが気色ばんで食いついて来る。

「こら、お待ちよ、コロだろう？」

「ホントに、よく見りゃコロだよ。」

なんで挨拶のひとつもしないかね、この子は

「そんな躰けはして貰ってないもので」

ウイズは言い放って、背中を向けようとした。

「なんだよ、久しぶりに会ったって言うのに、懐かしいとか近況  
を聞きたいとか思わないのかね？」

「あたしらのこと、覚えてないって言うんじゃないだろうね？」

口々に噛み付いてくる魔女を、ウイズは振り返った。

それから、軽く咳払いをした。

「会話なんてしたくもないし、わざわざ近況を聞く必要もないで  
すね。」

聞かなくてもわかりますよ、例えばしのぶさん

いきなり“首なし”を指差して、ウイズは半眼になった。

「3回結婚して、3回とも逃げられた。 子供が3人いたけど、  
きのう二人目が家を出てった。」

原因も言っただけじゃ、うちのホームページにアクセスする  
ことですね」

びつくりして固まっちゃった“首なし”から、魔術師は人差し指を差し替える。

「それから、ナギサさん」

指を差された“モアイ像”が軽く引いた顔になる。

「なんかあるたびに、エイズかもしれないって病院で検査してビクビクする前に避妊したらどうですか？ それとも、結婚相手も病気も欲しくないのに子供だけは欲しいんですかね」

“モアイ像”はぶぐぐと喉の奥で唸って目を剥いた。

「それから、アケミさん」

少し口調を変えて、ウイズが指差したのは、さっき見ていた、若い細身の魔女だ。

「悪いことは言わないから、警察に行きなさい。

あなたが殺したんじゃないでしょう？

今はそれがわかるけど、時間が経つと実証できなくなりますよ」

細身の魔女が氷結した。ひいつ、と悲鳴を飲み込む音が、礼拝堂の奥まで響き、周囲の弔問客が眉をひそめて振り返る。

アケミと呼ばれたその魔女は、その場にへたへたと座り込んだ。

そして突然、大声を上げて泣き叫び始めた。

ウイズは魔女たちを置き去りに、飛び上がるほど熱い手のひらであたしの手を引き、弁護士待つ応接室を目指して歩き始めた。

能力開放度数、推定89パーセント。

「ウイズ、あのアケミさんって何をしたの」

「何もしてない。あの人の家の玄関に死体が転がっている、それだけ」

「それだけって！ それだけじゃ済まないわ」

「そうなる」

ウイズは歩きながら大きなため息をつき、壁のくぼみに設置された真っ白なマリア像を見上げた。

そして悲痛な声でボソツと、

「……また美久ちゃんを巻き込んでしまう。　だけど、のけ者にすると怒るんだらうね」

「そうよ。　ついでに、自分のせいじゃないのならごめんねもお断り」

「わかってる」

全開に近付いてちよっぴりオレサマモードが入ったウイズは、さすがにさっぱりしていた。

あたしは歩きながら、そつと魔術師の横顔を盗み見た。

ウイズは、あたしがあの魔女と交わした会話の内容を読み取っていただろうか。

あたしが彼女らと話をすることは、映像的な予知が可能なので読んでいたかもしれない。　でも、会話の内容まで予測して、あたしをあの場に置き去りにしたんだらうか。

ウイズが彼女らに性的ダメージを受けていることを、彼女らがあたしに話す。

そのことをウイズは「読んで」いたのか？　あたしがそれを聞いてしまう事がわかっていて、一人であそこにいさせたのだらうか。

その可能性は充分ある。　あたしの魔術師は、とっても優しい意気地なしなのだ。

あたしと彼はまだ一線を越えていない。　今のうちになら、そういう生々しい傷を生活に持ち込まないで耳に入れることができるし、嫌なら傷の浅いうちに彼と別れることができる。

弱気な預言者は、時々自分でも気づかずに、こつやってあたしの

心を試すことがある。

「深入りしないで逃げてしまえと挑戦する。」

まばたきすると、涙をこらえている自分がいるのに気づいてしまった。

「美久ちゃん？」

あたしは立ち止まり、驚いた顔で振り返るウィズを、静かににらんだ。

「ウィズはお馬鹿さんね。好きだと言ったら、もう他のものは出てこないのが何でわかんないかな。」

皮をむいても、実を潰しても、種を蒔いてもリンゴはリンゴでしょ。

好きっていう種を撒いたら、好きっていう芽が出て、好きっていう花が咲いて、好きっていう木になるの！ 他のものが見たいなら、他の誰かのところで種を蒔けばいい。

台風が来て傷ついたとしても、りんごがみかんにならないのと一緒に、好きは嫌いにならないの」

言いながらあたしは一つの覚悟を決めようと努力をしていた。

あたしたちが、このまま一線を越えずに一生を送る可能性について考えていたのだ。

あたしが男性嫌悪症だったのと同じ、ウィズももしかしたら、一生セックスなんかしたくないと思っていたのかも知れないということ。

## 5、魔女の遺産は毒気を含む

初めて入った教会の応接室は、児童養護施設と供用らしく、入り口にかわいいポスターが貼ってあった。

地味で極端に小さい部屋の中は、6人掛けソファと帽子掛けだけで壁際までいっぱいだ。

案内してくれたシスター松岡がドアを開けた途端、

「こーちゃん！」

悲鳴かと思うような大声と共に、白い人影が飛び出して来た。

ワンピース姿の女性だ。

凄まじい勢いでウイズの胸元にドシンと飛び込む。ウイズがよろけてあたしの鼻に背中をぶつけた。

室内では、彼女が走り出した勢いでテーブルが倒れかけ、中にいる人々を慌てさせていたが、本人はそんなことはお構いなしだった。

「こーちゃん！ こーちゃん！ こーちゃん！」

コロと呼ばないのは、幼児語なのか舌足らずなのか。

その女は、ウイズの胸に額をごしごしこすりつけながら泣きじゃくった。

ああ、お化粧がべったり背広に！

さぞ嫌がつてるだろうとウイズの顔を見て、あたしはショックを受けた。

あたしの魔術師は、相手の髪の中に顔をうずめて静かに泣いていたのだ。

おまけに彼は、無意識に女の背中に手を回そうとして、室内の沈黙を察知して慌ててやめた。応接室では3人の男性がソファの上で、葬儀にも教会にも場違いな抱擁シーンを凍りついたように見て

いたのだった。

白髪の老人。

恰幅のいいアラフォーのおじさん。

痩せこけた7・3分けの30歳くらいの男。

「かのちゃん」

ウイズが女の体を押し離して、顔を覗き込んだ。

席に着かせようと思ったらしいが、女はウイズの顔を見ると更に興奮して泣きじゃくる。

「こーちゃん、お、オトコマエになつたねえっ」

「かのちゃん、先に中に入るう？」

その時ガタンと大きな音を立てて、アラフォーのおじさんが立ち上がり、こちらに歩いて来た。たるんだ頬が怒りに震えている。

それを見た途端、女は飛び上がってヒイと喉を鳴らした。

ウイズの背中側へ回ろうとして、あたしと軽く衝突する。

「ご、ごめんなさい、ごめん、座るから、座ります」

大声で謝る彼女の態度は尋常なものではなく、あたしたちはまだ紹介もされないうちから、アラフォーおじさんが普段彼女をどう扱っているかがわかってしまった。

同時に彼女の顔を間近で見、あたしのショックはタイム2を力ウントした。

美人……というのは違うかも知れない。

歳は20代後半か30第前半に見える。

整った顔なのだが、美しさよりも愛嬌が目立ち、何よりもトロリと溶けそうな色っぽさがある。

それが言動とさっぱりマッチしないので、かえって心を奪われる。

出会ったばかりなのに、泣き顔だけじゃなく、笑い顔を見たいと思ってしまうのだ。女のあたしでさえそうなんだから、男性はもっと魅かれるだろう。

飛び移るように席に着いた彼女から、あたしは目を離すことができなくなつた。

(この女、誰？ ウィズのなに？)

ともあれ全員が席に着くと、シスター松岡が各人を紹介しながら司会にかかつてくれた。

白髪の老人は小藤という名で、今夜の喪主、つまり亡くなつた魔窟の女王様のご主人だつた。

人のよさそうな笑顔でウィズとあたしに葬儀出席のお礼を言つた後、

「妻はそりゃ、若いころいろいろやつた女ですけど、実刑を頂いて出て来てからは真面目に飲食店をやり、死を前にしてすっかり悔い改めて、コロに謝りたいと言いなから亡くなりました。」

こうしてお見送りに来ていただけただけのことを感謝します  
ウィズに向かつて深々と頭を下げた。

それに対する魔術師の返答は、慇懃ながらも辛辣だつた。

「懺悔に関する感動的なお話は、式典で詳しく伺いましたよ。」

でも自宅を売春宿に改築しちゃつた罪の事にも、できれば言及してほしかったものですが」

「ウィズ……！！！」

「それで？ 僕は有難いことに、やっと犬コロから息子に昇格したわけですね」

「吹雪さん！」

シスター松岡が低い声で注意すると、ウィズはやつと皮肉な攻撃

をやめた。

「吹雪さんにしたらいろいろ言いたいことはあると思うけれど、小藤さんも私たちも、明日の式典の準備がまだこれからあるので、ともかくここは本題に入らせてくださいね」

シスターはドライな口調で場を仕切りにかかった。

「今夜は遺産相続のことで弁護士さんからお知らせがあると思うので、集まっていたいたんです。本当なら日を改めて席を設けるところなのですが、ここにおいでの新田さんご夫妻が、明日には島根に帰らなければならないということなので、急遽ここでお話ということになりました」

新田というのが、アラフォーおじさんの名前らしい。そして「かのちゃん」なる女性はその奥さんということになるのか。

続いて瘦せた7・3男が立ち上がった。これが弁護士で、伊庭と名乗った。

「ではまず、亡くなられた小藤 蓉子さんの私産についてご説明いたします。

蓉子さんは27歳の時に新田 祐樹という男性と結婚なさっております。ここにおられる新田 一樹さんのお父様ですね。

この祐樹さんが亡くなられて、蓉子さんは1千万の遺産を受け取られた。

それを元手に飲食店の仕事をされて、現在3千万ほどになっております。

晩年になってからこちらの小藤 弘文さんと再婚され、家計はほぼ弘文さんの収入とおふたりの年金だけだったのですが、その3千万は現在も彼女名義のままに残されていました。その3千万円が今回の相続の対象額です」

あたしは内心の緊張を隠して、アラフォーおじさんの顔を盗み見

した。

法律のことは詳しくないけど、ざっと聞いたただけだと、このお金はこのおじさんに渡るべきもののような気がしたからだ。新田さんの実の息子だと言うんだから。

「では遺言状を公開いたします」

弁護士は書面を広げてゆっくりと読み上げた。

「遺言書。遺言者は、遺言者の有する預貯金のうち1百万を、

新田 一樹に相続させる。残りの預貯金その他一切の財産を、長

男 新田 頃（現在 如月 吹雪）に相続させる」

一瞬の沈黙は、全員が息を飲んだために起こったものだった。

「百万！百万ってなんでなんだ！」

アラフォー新田が立ち上がって声を荒げた。不躰にウイズの顔に人差し指を突きつける。

「もともと俺の親父の金だったんだろう。なんでほとんど全額

この男に行くんだ？

じ、実の息子でもないのに」

「財産の指定贈与というものは、例え赤の他人でも全額可能ですよ。」

増してやこの吹雪さんは養子縁組で蓉子さんの長男になっておられる。

蓉子さんが新田さんのお父様と結婚されたのはそのあとで、あなたは新田さんの連れ子でいらっしやいますね。ですから本来ならあなたも、実子ではないのでこの相続の対象者ではないのです。

お父様の財産ということなら、お亡くなりになった時、あなたも蓉子さんと同じ1千万を相続されている筈ですよ」

伊庭弁護士、あっさりと言い放つ。アラフォー新田の顔が、脳卒中でも起こしそうなくらい真っ赤に染まった。

「つまり、その男が受け取りを拒否しても、俺には入らないのか」  
「新田さんには百万だけです。ご主人の小藤さんには、遺留分請求の権利があるので、手続きを踏めば全額の2分の1までは貰うことができますが」

「いや、わたしは必要ないです。吹雪さんに差し上げて下さい。」

もう妻と生前に話し合っています」

小藤老人が鷹揚に答えた。アラフォー新田の握りしめた拳がぶるぶる震えている。

「お、俺が借金を申し込んだ時には、そんな金は一銭もないと言っただけ……！」

「そのことを後悔されて、蓉子さんは当時あなたが申し込まれた借金の金額百万円を、今回遺言に入れられたのです。それで充分ではないのですか？」

伊庭さん、こういうことになれているらしく、睨み殺しそうな新田の目つきにも動揺しない。

「さて如月さん、あなたにはこの相続を拒否する権利もあります。相続権放棄の書類を作成すれば、あなたの相続分は小藤さんのものになります。いかがなさいますか」

弁護士の言葉で、全員の視線がウイズに集中した。

あたしはこの時まで、ウイズが言下に「そんなもの要らない」と突っ撥ねるものだと思っただけで疑わなかった。

ところが一同の視線を浴びながら、ウイズはしばらく黙っていた。

その掌が、さっきみたいにあたしの手の中になれば、彼がその無表情な顔の裏側で、こっそりと「視力」を解放していることに気付いたかもしれない。

この時ウィズは、アラフォー新田の分厚いお腹の下に潜む、腹黒さの濃度を読み取るうとしていたのだった。

とても長い沈黙のあと、あたしの魔術師は口を開いた。

「有難く受け取らせていただきます」

シスター松岡がほおつと安堵の表情になり、小藤老人が穏やかにうなづく。同時にアラフォー新田がガンと音を立てて、テーブルを脚で蹴とばした。

その音はただの雑音ではなかった。

新田というとんでもない詐欺師と、ウィズとの戦いのゴングだったのだ。

## 6、最愛の人と100人の敵

話し合いが終わったのは、夜の9時半近くだった。

応接室から廊下に出ると、人の出入りが多い教会の建物全体に、夜の冷たい外気が絡まっていた。

式典に集まった弔問客はほとんど帰ったらしく、荘厳な廊下はかえって物寂しい。

ウイズの後について歩くあたしの後ろを、アラフォー新田が「かのちゃん」を連れて歩いていった。

狭い廊下だ。

出口まで一緒になるのは仕方ないけど、気詰まりな空気だった。

新田はとにかく不機嫌で、他人のあたしが見ても何か言いたくなるくらい、「かのちゃん」に当たり散らしている。

床に目を落とした時、何かが視界を横切った。

黒く平たい、小さな生き物。

あたしは悲鳴を上げてウイズにしがみついた。

「あ。ゴキブリいた？」

驚いた様子もなくウイズが言っつて、あたしの目を掌で塞ぐ。

「大丈夫、見ないで通過しよう」

毎度のことなので慣れていいるのだ。

あたしは昔からゴキブリが苦手で、一緒にいる時も気配がしたただけでガタガタ震えて何もできなくなってしまふ。一緒のときはウイズに始末してもらおうが、一人だと怖くて逃げ出すこともできない。

「ゴキブリきらいなんだね。わたしも苦手」

かのちゃんが気さくに話しかけて来た。

「ふん、たかが虫でギヤアギヤアうるさい女だ」

新田が口の中で、わざと聞こえるようにそう言って、立ちすくんだあたしを乱暴に押しつけ、先に外へ出て行く。その後を待って待ってと無邪気につぶやきながら、かのちゃんが追いかけて行った。

「あの『かのちゃん』って、どういう知り合いなの」  
簡単に聞けることのはずなのに、たったそれだけの言葉をあたしはためらっていた。

「ただの知り合いだよ」と言われて納得できないものが残るのは嫌だし、かと言って本当に思わせぶりな過去があったりしたら、それに触れるのもやりきれないことだと思ったからだ。

そして結局、聞けないで悶々としている自分も嫌で、そのあたりをぐるぐる循環してしまう。

駐車場に着いた頃にやっと決心がつき、口を開き掛けたが結局だめだった。同じタイミングでウィズの方がしゃべり出したのだ。

「ねえ、美久ちゃん」

「えっ。……あ。な、なに？」

「……一緒に暮らさないか」

夜の駐車場に長い沈黙が流れた。

玄関を開けた途端にパンダが三つ指ついて待っていて、これほどの間は開かなかったんじゃないだろうか。それくらい長い間、あたしは固まっていた。

そのうちいくらなんでもこれは長すぎだろうと気づいて、全く内容をまとめられないままとにかく声だけ出した。

「暮らす、って？」

一瞬で喉がからからになり、声はうわずって途切れそうだった。

あたしの魔術師はあたしの手を取り、震えるほど固く握り閉めた指を開かせた。

「そのまんまの意味で。こうして手をつないで、あの新しい部屋に一緒に戻れるようになったらいいなと思ったんだ」

「結婚……っていうこと？」

「もちろん近いうちそうするけど、正式に結婚となると今日明日ってわけにはいかないだろう。」

僕が今言ってるのは、もっとこれからすぐのこと。

今夜はもう遅いから、お母さんに相談するのは明日になってからがいいかな」

同棲しよう、ということ？

それは、少しでも長く一緒にいたいと思ってきている、そういう意味なんだろうか。

お互いの家が遠くなったから、心まで遠ざからないように考えてくれる？

それとも親元から独立して自由がきくようになったから、堂々と一緒にいれると思った？

まさか3食作ってくれる家政婦が欲しいからじゃないよね。ウ

イズは大体3食食べる気なんかない奴だし。

ああ、でも朝おきるとこの横顔がすぐ目の前にあるって、いいなあ。

毎日電話しなくても一緒に食事ができるってことだよな。

あ。ま、待って。ってことはベッドもいっしょっていうことで。

当然、そういう関係になりましようとも取れる話だっていうことで。

そ、そりゃそうよね、当たり前か。むしろこれまでのことを考えたら、それが主目的って考えた方がいいかも……。

つまり、心も体も一緒になりたいっていう、これはそういう申し入れなんだよね。

返事をしないまま、あたしはずいぶん長いことウイズの顔を見ていたらしい。

どちらかというところスローペースな魔術師が、少し困ったようにもう一度声をかけてくれたので、はっとした途端、呼吸が戻って来た。それまで息をするのを忘れていたのだ。

「あたし、行ってもいいの」  
鼻の奥がツンとして、かすかに涙を呼んでいる。

まるで宇宙空間に一人でポンと放り出されて、両手で支えて貰ってるだけの状態みたいにもどかしく、不安で、そして泣きそうにうれしくて、あたしはウイズの返事を待たずにその肩に顔を押し付けた。

「いやったー！」

報告を聞いた親友の寺内まどかは、電話口で奇声を発した。

「なんだかドストロスと足音がして息を切らしているのは、部屋の中で踊り回っているのだろう。」

「いつまでグズグズしてんのかっ！って気になってたんだぜ。」

「そうかあ、如月さん意外と、なし崩しじゃなくて堂々とやりたタイプだったんだなあ。」

「そーかー、美久もいよいよ脱バージンだなあ、よかったよかった」

「まだわかんないわよ」

あたしは苦笑した。 実際、嬉しい気持ちの裏で、ひそかな不安も抱いていた。

だって、あの葬儀の夜のことを思うと、ウィズは無邪気にあたしとの性生活を夢見てこの申し出をしたのかどうかと疑問に思う。 たいいてい魔術師が突然突拍子もないことを言い出すのは、彼にしかわからない未来に向けての準備だからだ。

あの夜、何かが起こることが分かったのだ、彼には。

「どっちにしても、いいことだと思うぜ。 一番好きな人と一緒に暮らすんだから。」

それで敵が100人くらいに増えても、幸せは100倍に増えんじゃねえ？」

まどかは自分のことのように喜んでくれた。

次の日、ウィズはちゃんと背広を着て我が家に現れ、母に頭を下げた。

母は想像通り、かなりの難色を示した。

「吹雪さん、一緒に暮らすのは結婚してからでいいと思わない？ うちだつて親一人子一人になつちやつたんだし、まだ大学も出してやってないのに寂しいじゃない」

「今、必要なんです。 籍だけは先に入れることが可能ですが、拳式は最短でも3か月かかる」

「そんなに急いでるの？」

母は突然はつとした表情になる。

「美久！ あんた、まさか」

「いえ赤ちゃんはできてません」

ウィズが先回りで否定した。

結局、できるだけ早めに挙式をすることを条件に、取りあえず1か月だけ一緒に住むことを許してもらった。母もけじめけじめと言いつけても埒が明かないと諦めたようだった。

ウィズは次の日さっそくあたしを迎えに来て、車で新事務所のあるマンションに向かった。

その足で貴和子ママのところへも行こうとしたら、何故か魔術師は承知しなかった。

彼はわざわざ車を停めてあたしに向き直り、こう言ったのだ。

「美久ちゃん、これから1か月の間、『ウィザード』には出入りしないことにしてくれないか。」

喜和子ママと常連さんに迷惑かけたくないんだ」

「迷惑ってなんのこと」

「これからわかる」

その言葉は本当だった。

車がマンションに近づくにつれ、その建物の下に妙にたくさんの人が集まっていることに気付いたのだ。

一瞬、営業を始めたばかりの占い館がもうそんなに人気が出たのかと錯覚した。

でもよく見ると、それは客である若い層の女の子たちや、困った羊さんたちの群れではなかった。

彼らはその手に、カメラやマイクやメモ用紙を持ち、すっかり自分たちのペースで建物を撮影しながら何か盛んにしゃべっていた。

そして、運転席にウィズの姿を見つuckerや、口角泡を飛ばしながら駆け寄って来たのだ。

「あつ、来ました帰って来ました！」

あの黒いレヴィン、あれですあれに運転席に噂の占い師が乗っているようです！！」

「カメラさん、アップにしてください！」

「さあ百発百中の占い師、如月さんです、って、あ、あ、行ってしまいます、すみませーん、一言コメントを！」

「ワイドショーのノリだ！」

「いったい、何が起こってるの！？ あの人たち、何が目的なの？」

質問の言葉がむなしく車内に響いた。

魔術師は群がる報道陣を轢き殺さないように駐車場に入るだけで、もう手一杯だったからだ。

開いた車のドアめがけて殺到するカメラやマイクは、揃ってあたしたちに狙いをつけた銃口のように思われた。

100人の敵って、こいつらか？

## 7、新居はやっぱり変な部屋

「びつくりしたあ！」

「なんなのよ、あの能天気な感じのリポーター軍団は！」

「想像以上にしつこかったなあ」

「エントランスの自動ドアでちぎるように追手を振り切ったウイズとあたしは、エレベーターに乗り込んでようやく冷や汗を拭いた。狭い箱の中は、荷物の多いあたしたちふたりだけで満員だ。」

「これ、いったい何事が起こってるの？」

「美久ちゃん、昼のニュース見てないんだね」

「だって学校行つてたもの。あああ、ピノがめっちゃめっちゃ怯えてる」

あたしの抱えたペット用バスケットの中で、小さな子猫が両眼を全開にしてぶるぶる震えていた。

バスケットから出して腕に抱え、逆立った毛並みを撫でつけてやりながら、ウイズの新居に入った。

「占い館となる部屋の奥に事務所の小部屋がある。」

その奥に、ウイズとあたしのスイートルームとなる大き目の一室があった。

「何これ？ もう、ウイズったら、またヘン!!」

ウイズの部屋が部屋らしくないのは、いいかげん慣れてるあたしだが、今回もやっぱりそんな風に叫んでしまった。

とにかくあたしの魔術師、居住空間に対する認識があまりにも常識とずれ過ぎてると思う。

今回のこの部屋。

もともと居住用じゃなく、レストラン＆バーになる予定の部屋だったんじゃないだろうか。

ものすごくだだっ広い室内の一面ほぼ全部が窓で、8階からの絶景が、ぶち抜いたガラス全面に広がっている。

中央にカウンターバー付きのアイランドキッチンがあるんだけど、席が8つもある。明らかに「お店の中」って感じ。

壁際のベッドがあまりに似合わなさ過ぎるので、内装でカバーするのに苦労したと言う話だった。

つまるところ、ウイズは今回、マンションのワンフロア全部を買い取ったのだ。

中にはテナントが2軒入るようになっていた。

一軒がブティック等販売系の店舗。もう一軒がラウンジ型のレストランバー。

レストラン側に従業員用のトイレとシャワールームが付いていたので、そちらを居住区にした、という極めて単純な選択だった。

こんな天井の高い、外から丸見えの部屋でどうくつろげとこのか、あたしにはさっぱり判んないのだけど、ウイズにとってはそんなことどうでもいいことらしい。

居住空間が必ずしも落ち着ける場所ではないって感覚なんだろう。

「前のマンションは、ベッド使わないから寝室が丸ごと余っちゃったじゃないか。

どこに住んでもひと部屋しか使わないのなら、いっそデカイひと部屋にしてみようと思ったんだ」

「ひと部屋って、ねえ……」

こんなミニ二体育館みたいな広さを、ワンルームと呼ぶあきれた男が、将来のあたしの亭主です。

でも、今日あたしがビックリしたのは、部屋のつくりのことじゃない。それは引越しの段階でじっくり驚いた後だ。今あたしがおったまげているのは、部屋の内装の奇天烈さなのだ。

今、部屋の中は、青みがかかったガラスで縦半分真つ二つに仕切られている。

入り口から中央にまっすぐ、馬鹿でかいガラスが一枚はまって、区役所の受付みたいになっているのだ。よくまあこんな長いガラスがあつたと思うようなサイズだが、さすがに天井の近くはガラスが届かず、上半分がないので保健室の衝立のように無粋な感じに見える。

ガラスによって、部屋は右と左にきれいに分割されてしまっていた。

右側にカウチソファとハンガーポール、ミニテーブルとパソコンと本棚。

左側にベッドとクローゼット、おしゃれなデスクとテレビと飾り棚。

「水族館がどっかに引越した跡地みたい」

室内を見回しながら、あたしはあきれてつぶやいた。

「こないだはだだっ広いだけで、コーディネートはもう少しましだったと思っただけ」

「東野さんに頼んでおいたガラスが届いたから」と、ウイズ。

「東野さんって？」

「引越しの時に、室内コーディネーターの女の人がいたの、覚えてないかな」

「ああ、『ウィザード』占い館の方のデザインをしてくれた人ね」  
覚えてますとも。 いやらしくウイズにモーション掛けてた女だ。

「あの人が、前の仕事でミスって、大きなガラスが一枚余っちゃったって話をしたから、売ってもらったんだ。搬入が大変だったらしいけどね」

いや、だからそういうことを聞いてるんじゃないかって。

「なんでそこまで苦労して真つ二つにしちゃったわけ？」

「今日から二人で住むから、2部屋いるじゃないか」

ウイズはきよとした顔でオオボケをかましてくれた。

あなたの感覚ではこれを2部屋というのか！？ 透明な衝立で分割した体育館を。

てか第一、夫婦はひとつ部屋でいいでしょう！！

にわかにもまいがするほど疲れたので、あたしは部屋の左側に進み、ベッドの上に腰掛けた。

なにしろ頭をかきむしったり抱えたりする場所が欲しい気分だった。

子猫のピノは、慌ててあたしの腕から首の近くまで這い登り、下に降ろされまいと爪を立てまくる。

この猫の場合は部屋のセンス云々じゃなくて、慣れない場所が嫌なだけだろう。

ウイズは涼しい顔でカウンターに入り、冷蔵庫からアイスコーヒを2杯入れて来た。

ガラスの上を越えてこちらに1杯寄越してくれ、自分は右の部屋に進むと、カウチソファにこちらを向いて腰掛ける。

「乾杯」

青いガラス越しに、お互いの青く染まった顔を見ながらコーヒを飲む。

いや、これものすごくヘンですけど！

(お茶の間コントみたい……)

そのあと、ウィズがテレビを点けてくれたので、あたしはさっきの報道陣のことをやっと理解した。

昨夜、死体を放置して葬儀に来ていたアケミさんが、あのあと警察に行ったのだ。

死体はアケミさんの内縁の夫だった。

彼女は取り調べを受けた時に、自分は無実だと言った。しかし彼女の主張は支離滅裂だった。

「わたしが殺したんじゃない。」

でも結局わたしが殺したことになるのかも知れない」

警察が苦勞して、詳しく事情を聞き出したところによれば、アケミさんの主張はこうだった。

「亭主がいなくなったらいいなと思ってオニバサリさまにお祈りしたら、本当に叶った」

オニバサリとは何かと言うと、一種の新興宗教のようなものらしい。

「苦しみを取り除く水」という歌い文句の水に、信者を入浴させることで有名になった宗教なのだ。

昨今、この水を高額で買って、病氣治癒の願をかけると叶う、という噂が、信者間に流れていた。

アケミさんは最近それにはまり、かなりの金をつぎ込んでいた。それが原因で、亭主と大喧嘩をしたのだ。

腹立ちまぎれに彼女は入浴の際、亭主が死んでしまうように祈った。だから彼女は亭主の死体を玄関で見つけた途端、てっきり自分の祈りで死んだのだと思い、罪悪感から家の中に運び込んで隠してしまったのだった。

かなり特異な話だが、それだけならただの狂信者の世迷言と思われて、こんな大騒ぎにはならなかったかも知れない。でもこの話には、更に人の好奇心を煽るおまけがついていた。死体を隠匿して悶々とする彼女に、新たな衝撃を加えたのは、ひとりの青年占い師だった。

「警察に行きなさい。あなたがやったんじゃないでしょう？」  
そう、アケミさんの秘密を看破して助言を与えたのは、ウイズだ。彼女にしてみれば、2人めの超人が現れたのだ。知るはずのないことを知り、それをコントロールする神のような存在。ウイズにいきなり事実を言い当てられたアケミさんは激しく動揺した。

自分の人生は自分の手の中にはない、と感じた彼女は、その場で周囲に死体のことを打ち明けた。  
周囲の者が、警察に通報した。

ウイズのところにも、早朝に警察がやって来たらしい。  
もしかして当初は犯人の可能性ありと考えられていたのかも知れないが、死亡推定時刻にウイズは引越しの真っ最中で、業者さんと1日中べったり1室にいたので犯行は不可能だった。第一、動機になるような接点が皆無だった。

オニバサリの教祖にも警察の調査が入り、このあたりでマスコミが騒ぎ始めた。

教祖の名前は、鬼挟おにばさり魁かい。

テレビ画面に流れた彼の顔を見て、あたしは仰天した。  
アラフォー新田だ！

新田は夕べと全く別人みたいな、穏やかなどっしりした顔つきで、テレビカメラに向かってこんな風にしゃべっていた。

「水は、靈的な力を分け与えるものとして販売しています。」

教団本部の近くで取れる天然水で、それを祈りによって、靈的に高めている。もちろん薬物ではないし、薬だとかこれで病気が治りますとか言っていて売っているわけではありません。

増してやこの水が人殺しの願いを叶えるなど言ったことは一度もありません。

大体、我々はカウンセラーではないのですから、信者様の悩み事をいちいち聞いて、アドバイスなどをするわけではないのです。

もちろん、是非聞いて欲しいとおっしゃる方には、お時間もお取りしますが、それが本筋じゃない。

あくまで我々は、信者様のためにお祈りする。そして、体と心の平安を願って、ご入浴のお手伝いをする。我々のしているお世話はそれだけなんです。

怪しいのは、説明もされないのに死体のことを知っていた、何とかいう占い師なんじゃないですかね？」

当然、マスコミはウィズの顔もホームページから探し当て、報道の手を伸ばして来た。

「ウィザード」の占いサイトを取り上げ、街の噂を拾い集めた。

“稀代の占い師！”

“百発百中！？”

“超美貌の青年預言者？”

「で、取材の申し込みに応じたの！？ どうして？」

あたしは意外に思ってた何度も聞き返した。ウィズらしくないことをすると思っただのだ。

それに対する魔術師の答えは、あたしの想像を超えていた。

「新田の私怨を他に拡散させないために、要りもしない遺産を受け取ったんだ。」

あの男にちゃんと攻撃されてやってれば、小藤さんや「ウィザード」の店に累が及ばないだろう」

というわけで、この美貌の魔術師の顔は、お昼のお茶の間に流れ、絵面の良さもあって大反響を呼んだのだった。

テレビは、新田の挑戦的な台詞とウィズの顔を交互に流して、対決ムードをあおっていた。

本当のところを言えば、この件は遺産のこととは無関係なので、ことこの事件に関する限り、彼ら是对立などしていなかったのだが、そんなことに配慮してくれるマスコミではない。

かくして、今朝からふたりの超人の名前が、選挙演説もかくやと繰り返されたという訳だった。

ウィズの新事務所での初仕事は、そんな喧騒の中で始まったのだ。いつものようにあたしを取り残し、ともすれば、当の魔術師さえも置いて行きそうな勢いで……。

## 8、ワンキッズで一大事

無粋なマスコミ攻撃のおかげで、新事務所でのウイズの初仕事は難航を続けていた。

まず電話が鳴りっぱなし。

受話器を置くとすぐに次が鳴って、何も手に付かなくなるので、線を抜いてしまった。予約の依頼人には携帯番号を知らせてあるので、不自由はないらしい。

ところが夜に予約を取った依頼人が、せっかく建物入り口まで来たのに、入り口の報道陣に怯えて帰ってしまったり、外で会いたいと連絡を入れて来ると言う事態が相次いだのだ。

あんまりだ。報道のためなら営業妨害しても許されるのか？

せっかく独立して酔客と縁を切ったのに、結局ウイズは11時になっても部屋に戻って来ない。

あたしはベッドに腰掛けて、面白くもないバラエティ番組を延々と見ていた。話し相手は腕の中のピノだけだ。

灰色の子猫はやっとな緊張を緩めて、体を丸くする気になってくれた。良かった良かった。

その小さな体のぬくもりだけで寂しさを紛らわすには少々無理があったけど、8時にはミギワが入ってきて親身になってうなずいてくれただけ良かった。

二人で暮らすようになったら逆に独りぼっちになるなんて、考えてもみなかった。

これまでは「ウイザード」で喜和子ママや常連さんがいつもそばにいてくれて、家に帰れば母もいた。

二人で暮らすって、本当にふたりだけになることなんだ。

おまけに何しろやることがないのだ。

例えば家事にでも没頭できれば、ここまでしんみりしないで済んだのだから、まず料理を作るうにも冷蔵庫が空。 買い物に出ようとすると、「出口で何を言われるかわからないから、一緒に出よう」とウィズに止められた。

お洗濯でもと思えば、なんここには洗濯機がないじゃないか。

これまで喜和子ママが洗ったのか、コインランドリーだったのかは知らないけど、とにかくやったことがないらしい。

引越した時にピカピカに磨いたばかりだから、お掃除って言ってもそこまで必要ない。

部屋の家具を置き換えて整えようとしたが、あまりに意図のわからない配置なので、動かしようが考えられない。

「ウィズだったらわかってんのかなあ。

今夜は新婚、じゃなくって同棲初夜なんだけど。 ねえ、ピノ」  
まだちよつと落ち着かなげに眉間にしわを寄せて寝ている子猫に、  
あたしはぐちぐちと話しかける。

「初夜と言ったらもつとラブラブのイメージじゃない？」

「いちやいちゃとかベタバタとかって効果音を撒き散らしながら、  
くっついたり抱き着いたり、もつとくっついたりして過ごすもんじゃないの？」

「ベッドだつてこんな隅っこに置いとくんじゃなくつて、もつと  
部屋の真ん中で主役張りーの、一晚大活躍しーのするもんでしょ？」

料理だつてしたかったわよ。 上手じゃないけどさ。

留守の間にびっくりさせてやるうとか、思い切り豪華なメニュー立てて、彼の好物ばかりずらつと並べるとかね。 うーん、それ

だとうちの場合、お酒しか並ばないけどさ。

で、帰って来たダンナサマに『ずいぶんがんばったねえ』なんて頭撫でて貰ったりして、そのうち他の色んなところも撫でて貰ったりしてるうちに、なんとなく電気なんか消したくなったりしちゃったりしてそいでベッドが大活躍するって、あ、同じとこに戻っちゃった」

言ってる間に、なんだか猫にまであきれられてるような気がし始めたので、あたしはひとりごとをやめた。

その時、室内で電話が鳴りだした。

あたしはびっくりして立ち上がった。部屋に電話があることに今まで気が付かなかったのだ。

パニックになったピノがあたしのお腹のあたりから爪でぶら下がっている。

電話があるのは、カウンターキッチンのほとんど足元あたりだった。

「電話まで営業仕様になってる！あたしはバーテンダーかっつの！」

またどうせマスコミ攻撃だろうけど、暇な上に騒音付きじゃストレスが大きすぎる。しゃがみこんで、変な格好で受話器を取った。

「ごーちゃん？」

如月です、というフレーズが出て来るのに時間がかかっているうちに、相手の舌足らずの言葉が耳朶を叩いた。誰の声かなんて、考えるまでもない。

「お仕事済んだ？夜中じゃないと済まないって言ってたから夜中に電話したよ」

かのちゃんは小学生みたいな言い方をして、こちらの返事を待った。

「あの。 ウィ、き、如月はまだ仕事中です」  
どう言えばいいのかよくわからないので、あたしの返事は社長のイジワル秘書みたいな台詞になってしまった。  
なんでこの人がウィズに電話をして来るのか、あたしにはさっぱり見当がつかない。

「あ。 こーちゃんの奥さんだった。 こんばんはー」  
「……こんばんは……。 あの、なんのご用件ですか」  
「ううん、特に用事じゃない」  
「用事がない……」

こんな夜中に用もないのに電話するのかこの人は。  
「だってこーちゃん、電話してもいいって言ったもん。 まだ仕事済んでないのね。 じゃあ、すんだらまたかけようかな。 ねえ、いつ終わるの？」

あまりの屈託のなさに、あたしはその時初めて気付いた。 かのちゃんという人は、少し他の人とは違う。 常識がなさすぎるのか、知的障害があるのか、他の何かの要因なのかはわからないけど。  
この人なら、あたしが少しばかり図々しいことをしたって、気にしないかも知れない。

「ねえ、彼の代わりにあたしと話をしてくれませんか？」  
あたしはその一步を踏み出した。 あとで思えばこれが、失敗の序章に他ならなかった。

「こーちゃんの奥さん？」  
「美久って呼んでいいです。 かのちゃんはほんととはなんて名前ですか？」

「かよの」  
「かよのさん。 ね、できればあたしの携帯から電話しなおしていいですか？」

そんでもって、ウィ……こーちゃんには内緒にしてほしいんだ

けど」

「いいよ。かのもミスモリさんには秘密でかけてるよ」

「ミスモリさん？」

「うん、新田さんのこと、ここではそう呼べって」

「新田さん、って、ご主人じゃないんですか？」

「ご主人様だよ」

ご主人様とご主人は全然違うと思う。

長くなりそうなので一度電話を切り、自分の携帯から掛けなおすことにした。

このときあたしは、ちよつと悪女的なことを考えていたつもりだった。つまり、かよのさんに直接交渉することで、ウイズと連絡を取る意思を削いでやることができなかなということだ。同時に、ウイズに聞けなかつた彼らの関係を、彼女に聞くことができるかも知れない。

電話を携帯に代えたのは、あとでウイズに残留思念を読まれる可能性を考えたからだ。

とはいえ、あたしの網膜や脳裏に一瞬でも彼女の姿が映れば、ウイズはあたしたちが会話をしたことに気付くだろう。そのあたりをなんとかうまくやらなきゃいけない。

あたしは傍らのダイレクトメールを引き寄せた。

近所の和装店の内見会のご案内が載っていて、着物を来た女性が大写真になった写真がある。

写真を見ながら、なるべくかよのさんの顔を思い浮かべないようにして、携帯をプッシュした。

「美久ちゃん、美久ちゃん」

肩を揺すられて、はつとして目を開ける。いつのまにか寝ていたらしい。

ベッドにうつぶせになった顔の前に開いたままの携帯があるのに気づき、取りあえず手の中に握り込んだ。

魔術師は抗議の声を上げる子猫を抱き上げ、あたしの体を引き起こした。

「遅くなってごめん、待ちくたびれたんだね。でも布団もかけずに寝たら風邪ひいちゃうよ」

ほんとだ、何だか寒気がする。気分もあんまりよくない。

体を起こしてベッドの上に座る。今まで何してたんだらうか、考えてもすぐには思い出せなかった。

しばらくして、電話をかけていたことを思い出したが、誰と話していたかが出て来ない。

携帯を開いて見直すと、見覚えのない電話番号が表示されている。

「ウイズ、あたし、誰と電話してたっけ」

「覚えてないの？」

「なんか、頭ポーツとしてるの。寝ぼけてるのかな」

ウイズは小さく笑って、あたしの横に腰を下ろした。

そして、世の一般的な恋人たる男性とほぼ同じことをした。つ

まり、あたしの肩に腕を回して抱き寄せたのだ。それから首を落としてキスの体制に入った。

突然、とんでもない音量の悲鳴が室内に響き渡った。

青いガラスがビン！と震えるほどのボリュウム。

でも、あたしが驚いたのはその声の大きさではない。その声があたし自身の口から発されていたからだ。おまけに叫び声と同時に、あたしの腕はウイズを思い切り突き放していた。

「いやあああ！ 触らないで！」

ピノが大慌てでベッドを駆け下り、デスクの下に走り込む。  
ウイズの乏しい表情の中にも、大きな驚きがたたえられている。

なんで？ あたし、どうしたの？

何故、ウイズに触られて悲鳴なんか上げなきゃいけないの？

そして、この全身を駆け回る嫌悪感と吐き気、全身の震えと脱力はなんなの？

ゴキブリを見た時とまるで同じ症状が、どうして大好きなウイズに対して出て来るのよ！？

## 9、それは入力ミスだから

あたしの体は馬鹿になっちゃんだろうか。

男の子にちよつと触られただけでジンマシンが出ていた頃だって、ウイズのことだけは別格で受け入れていた体なのだ。

そのことが、あたしにとってはささやかだけど確固とした誇りだったのに。

今、ウイズのキスを拒否したあたしの中に沸き起こる嫌悪感とは、ジンマシンのレベルの物じゃない、そもそも異性に対する感情でさえないと思う。

虫。異物。汚染物質。

汚物を突きつけられて反射的に振り払う、あの反応が、何故ウイズに対して出てしまったのか、自分でもさっぱりわからない。

ああ、ウイズがすっかり凍ってる。

「ごめんウイズ、違うのっ」

自分の本意ではないことを説明しようとして相手に手を伸ばした途端、あたしの胃はゴロゴロと不平の唸りを上げた。

しゃべる事も出来なくなり、口を押えてトイレに走り込む。

込み上げて来る嫌悪感を便器の中に吐き出した。

何故かその中に、真っ黒な虫の死骸が無数に入っているような気がした。

喉に引っかかる感じは、トゲトゲの付いたあの黒い足。

てらてら黒光りするいやらしい羽根が、何枚も何枚もあたしの口から出て来る。そんなはずはないのに、そう感じるのだ。見えないのに感触があるのだ。味がするのだ、臭いがあるのだ。

何度も何度も、吐いた。

「美久ちゃん、大丈夫？」

トイレの扉を遠慮がちに叩いて、ウイズが様子を見に来てくれたところはその声を聞いただけで、あたしの背筋に冷たい粟が立ち上がる。更に嘔吐感までひどくなり、胃がひっくり返って収縮する。

「今来ないで！ お願いっ」

叫んでしまっただけから、すぐに後悔する。なんで何を言っても、この優しい人を傷つける台詞しか出て来ないんだあたしの口は。そうでなくても、あたしの中の嫌悪感は、彼には絶対ダイレクトに伝わってしまったはずなのに。

「わかった、落ち着いて美久ちゃん。」

無理にしないから。 僕が強引だった、悪かった」

ウイズは努めて穏やかな声で、ドアの外からあたしを労わろうとしてくれた。

「違う……。 ウイズちがうよ……」

ああ、どう言えばいいんだろう。

ウイズはあたしの拒絶が、男嫌いの感情から来ていると思っている。でも違うんだ、これは何かの「入力ミス」みたいなものなのだ。

あたしの体は、何のきっかけもなくウイズを、大嫌いなゴキブリと同じラインで認識した。それがまともな反応であるわけではないじゃないか。

オトコのウイズとは違う感覚かもしれないけど、あたしはあたしなりに、ウイズと結ばれるその日を心待ちにしていたし、大事に思っていたのだ。

大好きな人との初エッチが、女の子にとってどれくらい重要なセ

レモニーか、男には絶対に解らない。

「だから、違うの！ こんなことありえないんだってば！！」

「わかったから、美久ちゃん」

「わかってないッ！！」

叫び返してまた傷つけてしまう。

馬鹿、馬鹿、あたしの馬鹿！

どうしたらいいのかわからなくなって、大声を上げて泣いた。

泣いても、吐いても、苦しさは収まらなかった。

しばらくして、やっと胸の動悸が収まったので、どうにかこうにかトイレからよるめき出ると、ウイズの姿は部屋から消えていた。

どうやらあたしのパニックを助長するのを察して、部屋を出て行ったようだった。

さつきとは違う味の涙が、じわじわとあたしの頬を濡らし始めた。あたしの体が、ウイズの気配を敏感に感じ取って、吐き気を取り寄せている、ということに気付いたからだ。

ウイズの気配が遠ざかったから、吐き気が遠のいたのだ。それを認めた途端、絶望感がどっと押し寄せて来た。

魔術師が部屋に戻って来たのは、あたしの意識がトロトロと、眠りの坂を転がり始めた夜明け近くなってからだだった。

肩口で丸まったピノの陰からそっと薄目を開けていると、ウイズはあの独特の動作で、滑るように部屋へ入ってきて、ガラスの仕切りの右側の部屋に入って行った。

そう、あたしとは隔てられた、ウイズの「個室」へ。  
そして暗がりの中、彼が自分のカウチソファに横たわるのが判った。

緊張していたあたしの体から、吐き気の予兆が消えていく。そう、ウイズが別の場所で眠るのだと言うことが分かった途端、あたしの罰当たりな体は急に楽になったのだ。

その反面、心はずっしり重くなった。  
情けなさで、脳みそが膨れ上がったみたいに水っぽくてかったるい。

あんなに変だとあきれていたガラスの仕切りに、あたしは助けられている。そのことがもう堪らないくらいみじめで、ウイズが隣にいないければ大声で泣きわめいていたところだ。

ひとつのありえない未来が、あたしの頭の中で不気味な口を開けていた。

例え心の中ではこんなに好きでも、この状態が続いたら一緒にいられない、そう言う未来だ。

それどころか婚約も解消しなければならぬかもしれない。会って話することさえも諦めなければならぬと言うこと、つまり、つまり、ウイズと別れるという、悪夢のような未来。

あたしとウイズの同棲初夜は、こうして最悪の形で終わったのだ。  
った。

次の日は、心の中と正反対に、皮肉なほどの快晴。

「あつ、来た来た。篠山ちゃん」

大学の正門をくぐった時、数人の顔見知り到手招きされた。

あ

たしのテンションとはこれまた真逆のハイブリットボルテージで、声までスキップ混じりに半分裏返っている。

大学で新しくできた女友達とは、まだ中途半端な打ち解けようで、ちよつと気詰まりな感じが残る。

呼び捨てにしたり、憎まれ口をきいたりするには気を使うし、かといって他人行儀過ぎると、垣根を作っているみたいで気まずい。

あたしにとつては、男の子相手の方が楽に言葉を交わせる気がする。連中の「あわよくば」と思っている下心をこちらで巧妙にずらしていさえすれば、悪意や勘繰りから身を守る必要がないからだ。

あたしを群れの中に引つ張り込んだ女の子たちが、口々に質問する。

「篠山ちゃんの彼氏って、今すごいテレビに出てるあの人でしょ！」

「待ち受けに入ってた人よね？ あれカレシって言ったよね？」

「う、うん」

そこで耳をつんざくほどの歓声上がる。

「すごい！ ちよつと紹介しなさいよっ」

「知人割引はないのか？」

屈託のない口調で騒ぎながら、みんなであたしを小突き回す。

ああ、誰にも言えない。

朝目が覚めて、彼が起きないうちにこっそり部屋を出て来たことカウチソファで眠る彼に、毛布一枚かけてあげる事も出来なかったこと。

こつちやって思い出すだけで、喉の奥が吐き気に震えて気分が悪くなること。

涙が出そうになるのをこらえた時、バッグの中であたしの携帯がほろほろと歌いだした。

夕べのあのときと同じ、見知らぬ携帯のナンバーが表示されている。

慌ててハイブリット歓声の群れを抜け出し、通話ボタンを押した。

「おはよう美久。かのだよ」

子供のよな口調で、聞き覚えのある声のはじけた。

聞いた途端に思い出した。そう、夕べの電話はこの人が相手だったじゃないか。なんでそんな簡単なことを、あたしは忘れてしまっていたんだろう。

「かよのさん。おはようございます。ウイズ、でなくて、こ  
うちやんと話げできた？」

「ううん、まだ電話つながらない」

「ほんと？ でも部屋にいましたよ」

「そお？ 寝てるのかな、鳴らしても取らないの」

「ふうん、珍しいこともあるんですね」

ウイズは朝寝坊だけど、基本的に眠りが浅いので電話を鳴らすと普通はちゃんと起きるのだ。

変だなと思つたが、まさかこのあけつびろげな女性が嘘についているとは、あたしには想像できなかった。増してやこれが仕組まれた罠だなんてことは、思いもよらなかつた。

「だから、また美久と話をしようと思つて」

「はあ。まあ、まだ時間があるから大丈夫ですけど」

逃げるように家を出て来たあたしは、少々早く来すぎていたのだ。

「あのね、かのは今お腹ぺこぺこなんだよ。美久は朝ごはん食  
べた？」

かよのさんの話は、まるで幼児の雑談だ。キャンパスの中で笑

いさざめく学生たちの姿を見ながら聞くと、ものすごい違和感がある。

「あ、あたし今日はちょっと気分が悪くて入らなかつたんですよ」

「気分が悪いの？ 今も？」

「うん、まあ」

「かのがなおしてあげようか」

ハツとするほど明るい声で、かよのさんが言った。

眩しすぎる朝日の中で、学友たちの笑い声が別の世界の声のように弾けて消えた。

「なおしてあげるよ。これから出ておいでよ」

## 10、悪魔の水

かよのさんの指定したJRの駅まで行ってみると、そこで待っていたのは、思いがけず見知らぬ若い女性だった。

20歳そこそこといった感じの、ジーンズ姿の女の子だ。

「如月さんですね。 ええと、初めまして、クルメギと言います」  
ぺこりと頭を下げる様子が、いかにも世慣れていない。 あたし  
の名前を如月と伝えたのは、あたしをウイズの奥さんと思いついで  
るかよのさんだろうか。

「クルメギさん……？ あたし、かよのさんがいらっしやるもの  
だとばかり」

「かよのさんって？」

動転しているあたしの言葉に、今度は彼女が首を傾げる。

「ああ、『みせんさま』のことですよ。 あの方はオニバサリ  
を離れられないので、こういうことは奉仕の私たちがやるんです」

「みせんさま」

うやうやしい言い方に、ちょっと嫌な予感がした。 それに、こ  
ういうことってどういうことだろう？

尋ねると彼女はうなずいて、駅前の道を歩き出した。

「とりあえず、私の家に来てください。

狭いマンションで申し訳ないけど、バスタブがコンパクトだか  
らご入浴にはいい感じなんです」

「ご入浴！」

全身がこわばるのを感じた。 これって、例の怪しい宗教の勧誘  
じゃないだろうか。

あのアラフォー新田のところの、いかにもインチキ臭い教団に連  
れ込まれるなんて冗談じゃない。

第一、見も知らぬ人の家に行つて、いきなり裸になつてお風呂に入つていうのか？

そんなことをしたら、どんな犯罪に巻き込まれたつて文句は言えないぞ。

突然、廊下に待機していた撮影隊がなだれ込んで来るとか、乱交パーティーに巻き込まれるとか、そんな物騒なことを考えていたら、また気分が悪くなつて来た。

胃がギュツと縮み上がつて、吐き気の発作が近付いて来るのを感じる。

あたしは踵を返して立ち去ろうとした。

「そんな話は聞いてなかつたです。 帰ります」

「待つて！」

クルメギさん（どんな字を書くんだろう）が、あわてて駆け寄つて引き留める。

「不安に思われますよね、わかります、私も最初そうでした。

でも私、このお水でホントに体調が良くなつたんです」

「そういう話、信じない方だから」

「だけど、ホントなんです。 私、中学時代にグレちゃつてシンナーとかやつてたもんだから、更生して高校へ行った後もすごいフラッシュバックに悩まされてたんです。

でもこの水に触るようになってから、そういう症状が無くなつて勉強も進むようになって。 ほんとですよ、ほら」

彼女は口を開けて、シンナーでボロボロになつた歯並びを見せた。

色が変わつたその歯並びには、何故だか見覚えがあるような気がした。

どこの誰がそんな歯並びをしていたらろう？

友達でシンナーなんかやってた子がいたとは思えないんだけど。って言うより、あたしは友達と呼べる相手が極端に少ないのだ。寺内まどかと「ウィザード」の面々、大学で出来たばかりのぎこちない同級生たち。どの友人もそんなことをやりそうなタイプじゃない。

なのに、あたしは知っているような気がするのだ。

あの黄ばんだ歯並び、そこから発散される独特の悪臭。同じように変色してかさつく爪の感触。

吐き気が急に強まった。

あたしは道路の隅に走って行って、人に見られないよう看板の陰に入ると、ひとしきり嘔吐した。

「如月さん、手を出してっ」

背後からクルメギさんが叫んだ。

しゃがみこんだあたしの腕を無理やり取ると、彼女はカバンの中から500mlのペットボトルを取り出した。

「ホントは全身浸すのがいいんだけど、手だけでも少しは効きます。」

その代りに祈ってください。今すぐ治りたいって、心から願ってください」

宗教の如何に関わりなく、激しい吐き気に襲われている時、早くその苦しみから逃れたいと思わない人はいないと思う。あたしは吐いても吐いても治まらない嘔吐感と戦いながら、思わず祈ってしまった。

ペットボトルの中身が掌に振りかけられた時、明らかに水なのに、どういふ訳か温かいと感じた。

水には、化粧水程度の軽い粘りがある。そのくせサラツとした、不思議な触感の水だった。

全身がジンとしびれて、胃の重さがたちまち遠のいた。そう、ほんの一瞬の間に、あたしの吐き気は掻き消えてしまったのだ。

信じられない思いでクルメギさんの顔を見ると、ほらねと言うように笑っている。

「どうして？ これ、水ですよ。薬じゃないんでしょう？」

「水ですよ。でも絶対、体にいいと思います。」

今は、私の体に慣らしてあるので効果はそこそこですけど、如月さんの体になじませたら、もっと効いて来ますよ」

「体になじませるって？」

「毎日繰り返しご入浴していると、水は体に反応しやすくなるんです」

「逆じゃないの？ 体が、水に反応するんでしょう？」

「そうじゃなくて、なんかね、この水って、人の肌になつくみたいなんですよ」

クルメギさんは、言ってる自分でもおかしいと思ったのか、首を傾げて笑った。

「ということは、同じ水で何度も入浴するの？」

「そうです。最初はちょっと高くつくけど、浴槽1杯分の水を買うんです。」

それから毎月、2リットルのペットボトルに何本かずつ、水を買って足します。じゃないとだんだん減ってきてしまうから」

つまり、彼女は何か月も同じ水を使い続けているわけだ。

普通なら腐ったり虫が湧いたり、悪臭がしたり問題が起きるもの

だが、そういうことはまだ一度もないと言っ。

(でもどう考えても、雑菌だらけのはずよね……)

それにしても変な感じだった。

宗教めいたことを話している感じが全然なく、どちらかというところ、以前口コミで無香料の化粧品を売ってもらったために知人のホームパーティーに行った時とよく似ている。

「このペットボトル差し上げます。出来れば1回で捨てないで、繰り返し使ってみて下さいね」

クルメギさんは愛想よく言っ、透明なペットボトルをあたしに押し付けて立ち去った。

(もらってしまった)

強引に渡された水を、でも捨ててしまうことは出来なかった。

その水はあたしを救ってくれたし、きつとあたとウイズ二人の關係も救ってくれるのではないかと思う。ウイズの待つ家に、新田の息のかかった物を持って帰るのは気が引けたが、吐き気が治まる安心感には代えられなかった。

せつかくウイズと一緒に暮らしたいと言ってくれたのに、応えられなかった自分が情けなくて、その息苦しさからも逃れられるのが嬉しかったのだ。

ウイズには隠したっけどどうせすぐバレしてしまう。隠さず全部言おう。

気に入らないかも知れないけど、彼は優しいから、あたしの苦しみを知ったらきっと許してくれる。

夕べの仕切り直しをしよう。

帰り道でしっかり買い物をしてから、その荷物に顔をうずめるようにして、マンション入り口の報道陣の砦を通り抜けた。

魔術師は、占いルームで仕事だった。

あたしはウイズの私室へ帰り、お酒にも夕食にもなるようなメニューを選んで料理を作った。

それが終わると、あのペットボトルを取り出した。

100均で買ったタッパーに水を移し、その中にゆっくりと両手を浸す。

冷たい水なのに、掌に光が当たっているようなぬくもりがやっぱり不思議で、とにかく気持ちが悪かった。

その時、突然ドアが開いた。

ラウンジバー用の凝った洋風のドアから、ウイズが足早に入ってきた。そしてあるうことか、彼はあたしに駆け寄るなり、いきなりタッパーの中の水を流しに捨ててしまったのだ。

「ウイズ！ 何するのよ？」

慌ててその手を抑えたが、水は一滴残らず流れて行った後だった。

「こんなものを持ち込まないで！」

魔術師は厳しい顔でピシリと言いつつ放った。

「この水はあつてはいけない水だ。」

この中には、人の血と悲鳴が混じり込んでいる。

それを喰らい尽くす欲望の悪臭が含まれている。 悪魔の水だ

よ。

こんなものに頼ろうなんて、美久ちゃんどうかしてるよ！」

どつして？

頭ごなしに言われたショックで、あたしは泣きそうになりながら

ウイズの顔を睨みつけた。

その水がなければ、あたしはウイズと一緒にいることができないのよ？

11、ピノとあたしはにやあにやあ鳴く

心の中に怒りと悔しさが押し寄せて来た。

「そりや、悪いかなとは思っていたわよ。 ウィズはきつと気に入らないってこともわかってた。

でもいきなり捨てることないじゃない」

そもそもボトルごと無理やり押し付けられた物で、あたしが望んでもらって来たわけじゃないのだ。

そういうことも聞かずに、こっちの気持ちも確かめずに、あんまりひどいやりようじゃないか。

「ウィズはあたしとこのままガラス越しに付き合うことになってもいいの？」

「そうはならないだろ」

「なってるじゃない！ そのことより新田に勝つことの方が大事なの？」

「今、そんなことを言ってるんじゃないだろ。 この水に触るなって言うんだ」

「悪魔の水だから？ なんなのよ、その気取った表現！

預言者めいた言い回しで人をけむに巻くつもり？ ずいぶん占い師らしくなっただわねえ！」

仕事をからめて揶揄されると、温厚な魔術師もむっとした表情になる。

「けむに巻くってなに？ 人を詐欺師みたいに」

「違うの？ じゃあ反対する理由をちゃんと行ってよ、どんなふうに悪魔の水で、触るとどうしていけないのよ？」

問い詰めると、ウィズは黙った。

あたし、意地悪だ。 この万能占い師の預言は、視覚で捉えたも

のに限られるので、『何故』に対応する答えが用意されてはいないのだ。それを知ってて、わざと問い詰めた。

「だいたい、ウィズがかよのさんに『電話して』なんて言うから、こういうことになったんでしょ！」

勢いづいてさらに突っ込む。 氣に入らない事っていうのは、引っぱり始めると芋づる式に出て来るものだ。 で、つい要らないことまで言い出してしまうのだ。

この苛立ちの始まりは、こいつの周りに寄ってくる女どものせいだ。 かよのさんはその親玉だ。

「あたしに新田と関わらせたくないのなら、自分だってかよのさんと関わらなきゃいいじゃない。」

あたしはとばつちりを受けてこの水を渡されたようなもんなのよ。 知りもしない人と話をして、宗教臭いこと言われて迷惑だったわよ。

そもそもかよのさんって何者なの？ あんな夜中に電話してくるような仲なわけ」

魔術師は形の整った眉毛を寄せて、静かなため息を胸から吐き下ろした。

「ああ、つまり君にとって、そこが一番核心なわけだ。」

僕とかのちゃんかどういいう付き合いをしたとか、今から恋愛に発展する恐れがあるとか、そういうことが知りたいんだね」

その通りだ！ でもそんな風に剥きつけに言われたら、絶対認めたくないッ！

なによなによ、いかにも下らない事みたいに蔑んだ表情すんじやないわよ。 そういうことのケアって、大事なことじゃないの？

あたしは一瞬で泣きたいくらい興奮してしまったので、咄嗟に何

も言えず、黙ってカウンターを出ると部屋のドアに向かった。その腕をウイズがつかんで引き戻す。

「痛い！ 離して、別に聞きたくなんかないから！」

「キツネなんだってさ！」

「はあ？ キツネ？」

思わず聞き返してしまつてから、しまったと思つたがもう遅い。

ウイズは滑稽なほど真面目な顔でうなずくと、繰り返した。

「人間じゃなくてキツネ。」

かのちゃんはどこかの稲荷神社で、魔窟の女王に拾われた子供なんだ。

この子はこんこんさまのお使いだと言つて、役所に届け出もしないで外から鍵のかかる部屋へ閉じ込めて、神棚の下で寝起きさせたまよ」

ウイズ以外に対しても、異常な子育てをしたのか、とあたしは顔をしかめた。

子供を人間扱いたくないのが、魔窟流であるらしい。

「キツネの使いだなんて、いくら10年以上前でも本気で信じてる人がいたの？」

「女王様は信じてたさ。だから子供なんかいらぬはずのあの家に、わざわざ自分で連れて来て育てたんだ。」

当時は僕も子供だったから、宗教的なことなんてわからなかつたけど、今はわかるよ。

女王はかのちゃんのことを内心で畏れてた。

死ぬ前になってカトリックの洗礼を受けたのも、かのちゃんのこと怖かったからだ。死後に守ってくれるものが必要だったんだらう。

天国から自分を監視するために降りて来てる、それがかのちゃんに対するあの女の見解だった。よっぼどひどいことやってる自

覚があつたんだろっね」

「女王、ええと、小藤のお義母さんは、迷信深い人なのね。でもウイズにとってはどうなの？」

あたしはウイズがあの人をどう思っていたのかが知りたいのよ」  
あたしの言葉で、魔術師の普段変化に乏しい表情が、ふうつと緩んだのがわかった。

その腕があたしの肩を優しく包む。全身が温かい腕の中に、すっぽり収まった。

胸に押し当てた耳から、ウイズの心臓の音が歌うように響いて来る。久しぶりに戻って来た、あたしだけの特等席だ。

そしてそこから、かすかな笑い声が響いて来た。

「美久ちゃん、8歳の僕の何を心配してるの？」

くすくす笑ってウイズが言う。

いやでも、その8歳までの間に魔女と関係してるの、バレてますから。……言わないけど。

「あたしの初恋は7歳の時よ。ウイズだってわかんないじゃない？」

「えっ、本当？」

「そうよ。小学校入学した頃に、学童グループの集団登校で手をつないでくれた6年生の男の子が好きだったの。卒業の時にお手紙書いたけど、恥ずかしくて渡せなかった」

「そんなマジで？ 女の子って早くからオトナだね」

「当時なりにね。でもウイズにも、たまには知らない事ってあるんだね」

「うん。その男、今は何してる？」

「あはは。ほらウイズだって気になるじゃない」

からかうように言って魔術師を見ると、彼は思いのほか怖い顔を

していた。

じつとあたしの目を覗き込み、夜の闇の色をした瞳を凝らす様子は、造作が整っているだけに悪魔のようでドキリとする。

「そいつ、今はどこにいて、何してるんだ？」

「し、知らないわ。5歳も違うんだもん、中学も高校も一緒じゃないし」

「いや、君は知ってる。今、丁度近くにいるな」  
「……え？」

ウイズの両手があたしの背中の上で熱くなる。

やだやだ、ウイズったら焼きもち妬きさん。

よし、この様子ならこのまま押し倒されて一気に今夜こそ、今夜こそゴールインだ。

ところがそう思った途端、あたしの胸の中にワツと不穏なものが膨れ上がった。

吐き気だ。

全身に湧き上がってくる鳥肌と嫌悪感。

あたしはそれらを必死で否定しようとした。せつかくいいところなのに、また元に戻ってしまうなんて絶対だめよ！

ほら、ウイズの熱い手があたしの背中を押して来る。

部屋が広いからベッドまで無駄に遠いけど、ふたりで歩くムードは甘ったるくていい。

吐き気なんか関係ないわ、頑張れあたし。

さあ、ベッドに着いた。ウイズが優しくあたしをその上に横たえる。

寝ていた子猫のピノが、不満一杯に抗議の声を上げる。

ああ、いよいよ始まるのね。 え？ あれ？  
なんで布団を掛けるの？

「ウイズ、ど、どこ行くの？」

あたしはびっくりして大声を出した。 魔術師がベッドを離れ、  
春物の上着を着込み始めたからだ。

「そいつに会ってくる」

「は？」

「居場所が判ったから、行って会ってくる。 一発殴んなきゃ収  
まらないよ」

「な、何言いだすのよ？ おかしいでしょ？」

学童ん時の片思いの相手よ？

妬くつたつて度が過ぎるっていうか、ま、待ちなさいってこら、  
おい！！」

あたしの叫び声に耳を貸さず、ウイズはさっさと部屋を出て行っ  
てしまった。

「ぬぁにを考えるとるんだ、あいつうぁあああ！」

もともと変な男だったけど、今度と言う今度は、さっぱり思考回  
路の見当がつかない！

安眠を妨害されて激しく鳴きわめくピノの声と張り合って、あた  
しは大声を張り上げた。

「報道陣のみなさああん、シャッターチャンスですよ。」

その占い師はなんだかわけのわからん理由で人を殴りに出かけ  
るとこなんですよう！」

モチロン、聞こえるわけはないけど、どうしようもなかったので  
とにかく叫んでみたのだった。

子猫のやってることと少しも差がない無力さで。



## 12、オニバサリとの因縁

まだ宵の口なので、スナック喫茶「ウイザード」の窓からは、ホッとするようなランタンの灯りが通りに漏れていた。

（そう言えば、来ちゃダメって言われてたんだっけ）  
柿渋色の古風な扉の前で、思い出してハタと迷う。

見たところ、報道陣らしき人間はいないみたいだけど、もしかして店内に入り込んでいるのがあるかも知れない。イカれた我が婚約者どのの事はともかく、貴和子ママに迷惑をかけるのは、あたしもイヤだった。

窓の外から、伸びたり縮んだりしながら店内を覗き込んでみると、

「軍艦巻きっ」

「きやああ？」

いきなり後方から、両腕で体を挟み込んできた男がいる。

回された腕の先には、仕事用の書類カバン。

背広姿で澄ました表情のセクハラ男の名前は、朝香 怜という。

「もう怜さん！！ 痴漢かと思うじゃない！」

「いつも『握り寿司』じゃあつままないからさ」

「いつもやってはいません！一回きりでしょようにっ」

怜さんの腕を振りほどくと、お馴染みのトワレの香りがした。

以前、「朝香 レイミ」と名乗っていた頃から、この人はこの香水を愛用していた。

ただし、この店に来るときはウイズのパニック発作を気遣って、香料を使わずに来ていた筈だ。

それがここ数か月の間、彼はきっちりトワレの香りをまもって

来る。

あたしはそれを、「今後は恋愛対象をはずれます」という意思表示と解釈していた。

それにしても、ウィズには触られただけで吐き気がこみ上げて来ると言うのに、相手が怜さんだと、ここまでされても平気なのは何故だろう。

「オニバサリ、ねえ。ウソくせーな」

額に落ちかけた前髪をかき上げながら、怜さんがつぶやく。

「ウィザード」の駐車場で自分の車のボンネットにすがり、缶ジュースのふたを開けながらあたしの話聞いてくれていた。

あたしには冷たい生茶のボトルを買ってくれた。

「美久ちゃんさ、もっと早く言わなきゃダメだろう。」

コ口助に触られて吐き気がした時点で異常事態なのに、なんで俺に相談に来ないよ？」

「だって」

確かに怜さんはあたしの主治医だ。

でも彼は多分、まだウィズの事が好きなんだ。他の事はともかく、そっちの相談はしにくい。

「今聞いた限りだと、その吐き気はコ口助のパニック発作と同類のトラウマに起因していると思う」

「でも、これまでウィズだとジンマシンだって出なかったのに」

「そうそう、ジンマシンね。君のトラウマ反応は、もともとそれだった。」

中学の時の性的虐待が原因だったよね。

でも今度のは吐き気で、症状がまるで違うだろ？ ころころいう時

は、原因も違う事が多いんだ」

「今になって急に出来たってことは、最近のことが原因？」

「そこなんだけどね。美久ちゃん、ゴキブリが苦手になったのはいつ頃？」

「昔からよ。誰だつて嫌いでしょう？」

「そりゃそつだろうけどさ。キヤーとかヤダーとかの次元ならともかく、手足が震えるとか吐くだの貧血になるだのってのは尋常な反応じゃないぜ。」

「覚えてないか？ 小さい頃からずっと、ゴキブリ見るたびにそこまで過剰に反応したかどうか」

あたしは首をひねった。

ゴキブリ自体については、小さい頃どうだったか記憶になかった。でも、そう言われてみれば、今はゴキブリによく似たカブトムシやカナブンなんかもかなり嫌いなんだけど、小さい頃にはカブトムシも飼っていたし、クワガタを捕まえて遊んだ記憶もある。

「つまりは、悪化してるってことだ」

怜さんは缶ジュースを飲み干すと、車のドアを開けた。

「本気で治療する気があれば乗って」

「ど、どこ行くの？」

「別に俺の部屋でも車内でも構わない話なんだが、そういうことするとまーたうるさく妬きやがるやつがいるだろ？」

うちの大学の研究室にも、セラピストルームがあるからそこ行こうか」

「こんな夜中に開いてるの」

「夜も昼もない奴がうようよいるからな。」

逆に落ち着かないのが心配なくらいだぜ」

確かに、大学病院の研究棟の中は、暗くて静かな割に人通りが多かった。

白衣を着た学生や、医者なんだか教授なんだかわからないモツサリした人がうろろしている。

「あ。相沢先生、学生のカウンセリングルームって、今使えますかね？」

通りすがりの白衣の男性を捕まえて、怜さんが聞いた。

「空いてるけどサア。ダメだよこんな時間にカノジョ連れ込みだりしたら。」

なんか苦情があつたらいつぺんで閉鎖されちゃうよ。  
僕、家族に隠れてエロ本読めなくなって困るなあ」

向こうから話しかけてくる人もいる。

「朝香先生！ キシン教授見なかったですか？ まあた雲隠れしちゃったんですよ」

太った若い青年がバタバタ走ってきて聞いた。

「またかい？ お疲れさんだね」

「僕は、こんなことのために大学に残ったんじゃないんですよ」  
青年は汗を拭きながら廊下を去って行った。

怜さんは、二階の隅っこから2番目の小さな部屋のドアを開けた。  
電気をつけると、応接セットだけがある部屋だ。

「横になるのがいやでなかったら」

言われてあたしはソファに斜めに座り、体を倒した。

怜さんはどこからか黒いアイマスクを取り出して、あたしに渡した。

「これをつけるんですか？」

「そう。まあ、きみのためじゃなくて、実はオレのためなんだけどね」

「怜さんのため？」

「ちよつと恥ずかしいから、確実に目を閉じてて欲しいんだよね。美久ちゃんもね、できれば心の中で、自分をだます努力をしてくると嬉しいね」

「なんのことか、さっぱり」

「話を始めたらわかるよ」

あたしは首をかしげながら、アイマスクをつけて体の力を抜いた。

「まず始める前に、ちよつと深呼吸してみない？」

その声を聞いて、あたしは思わず叫んだ。

「レイミ先生！」

忘れもしない女の朝香先生、レイミ先生の声だった。一瞬、玲さんが病気を再発したのかと思ってしまった。

でも、そうか。怜さんは、あたしが話しやすいように、レイミ先生のふりをしてくれてるんだ。

彼にしたら過去のつらい思い出のこもった人格だろうに、その気持ちはありがたかった。

「はい、目をあけて。充分よくわかったよ」

怜さんの声が夢の中のように遠くで響いた。あたしはゆっくりと目を開け、起き上がるうとした。なんだか体がほわほわと頼りなくて、赤ちゃんになったみたいだ。

催眠療法が終了したのだ。

「トラウマの原因、わかったんですか」

尋ねながらあたしは体をよじってジタバタもがいていた。横になるための寝台ではないので、体を起こすのに手間取ったのだ。手すりも何もない椅子だし、クッションが良すぎてかなり沈み込んでいる。

あたしは怜さんの手を借りて起き上がろうとした。

その時、突然ドアが開き、3人が同時に硬直した。

あたしはソファに横になってもがきながら。

怜さんは、そのあたしを抱き起こそうとして。

太った青年は、ドアを全開して駆け込んで。

「わ。すすすいません！」

「ハツちゃん、どうした？」

怜さんは青年をそう呼んだ。

「灯りが漏れてたから、てっきりキシソ教授かと」

「まだ探してたのか」

ハツちゃん青年は、不意ににやりと笑った。

「朝香先生。僕、誰にも言いませんからね」

「お前、なんか誤解してないか？」

「はい、僕の誤解でした。相沢先生にもそう言いますから、お願いがあります！」

「信じてないじゃないか」

「信じますから、キシソ教授を迎えに行ってください！」

「おい」

「来週、学会で研究発表あるんです。僕ら、その準備で手が離せないんです」

「オレだって忙しいんだ」

「でも、明日と明後日の土日は、連休取られてますよね？」

「土日が休みなのは普通だろう」

「僕は、その間に発表用のパソコン画面を編集しないとイケないんです」

「そりゃま、気の毒に」

「その内容を、教授に把握して質疑応答の準備をしてもらわないとイケないのに、今朝からいないんですよ!」

「どこに行ったの、あの人」

「オニバサリです」

あたしと怜さんは、真ん丸くなった目を見合わせた。

「キシシ教授によれば、鬼狭つてのは沼の名称だったんだそうです。昔、偉い行者様が鬼を一匹、岩に挟んで沈めたのでその名がついたって。」

だから昔から、この沼の水は「鬼の染む水」と言われて、霊泉扱いされてるんだとか」

「鬼のエキス入りの水かよ」

怜さんが顔をしかめた。

「ねー？ いかにも教授が好きそうな話でしょ？」とハツちゃん。

「あの人、ここじゃ心理学で教鞭取ってますけど、実は民俗学が専門でしょ？」

好きなんですよ、まじないとかイワク付きとか、鬼とか妖怪とか。

オウム真理教のときも、上区一色村へ行ったきり、2週間音信不通だったんですからね」

「オウムは鬼でも妖怪でもなかっただろ？」

「超能力も好きなんですあの人！」

ハツちゃんは、もう一枚地図を出して広げた。

「ほら、ここが鬼挟沼。この沼のすぐ上の山の中腹に、教団本部があるんですよ。」

ここに行くにはですね、岡山に出た後でここを北にまっすぐ上がって」

「おい待て、なんでドライブマップまで出すんだ。オレは行くか」と言ってるだろう」

怜さんが地図を押し戻した。

### 13、セックスとゴキブリそして恋人

ハッちゃんという院生は、相当切羽詰っているのかもともと粘着質なのか、かなりしつこく怜さんに協力を迫った。

それも、あたしと怜さんのラブシーンを見たものと完璧に誤解しているから、始末が悪い。

ようやく諦めて、セラレストルーム部屋を出て行く彼を見送った怜さん、舌打ちをやめてもとのドクターモードに戻るのに、存外に時間がかかった。

「まったくこれだから、この部屋は使いづらいなよな」

「みなさん忙しそうなのね」

「そうでもないさ。約一名ガンが居るんで、周りが振り回されてるだけだ。」

まあいい、本題に戻ろう」

怜さんは軽く咳払いをして、サイドテーブルに置いてあったカルテを取り上げた。

「美久ちゃんのゴキブリ嫌いの原因だけだね。」

君自身は覚えてないつもりでいたが、君の深層意識はちゃんとその原因を記憶していたよ」

「なんだったの?」

「まあ待て。その内容を聞いても大丈夫なのか判断がまだつかないぞ。」

この記憶は、きみ自身のストレスを避けるために、君の脳が故意に隠ぺいしたものだからな」

「構わないから教えて」

あたしに迷いは無かった。

「ウイズの時に勉強したからわかってるもの。」

忘れてしまったことは克服できないけど、思い出せば乗り越える方法もあるものだって」

「んー、んー、んー」

怜さんはまだ迷っているのか、体を揺すってしばらく考えてから、独特な抑揚のある声でぽつりと、一つの名を口にした。

「柳井 雄太」

あたしの心臓が、ぴくんと反応した。

その名前はたった数時間前から、何度か胸の中で思い起こしていた名前だった。

「そういう名前の子を知ってるか？」

子といっても昔の話だから、もう三十路に乗っかってるはずなんだが」

「雄太、くん」

何でその名前がここに出て来るんだろう。

その名前は、たった今ウィズが殴りに出かけて行った、あたしの初恋の相手の名前だったのだ。

記憶の中でその男の子は、もう体が大きくなりすぎて似合わなくなったランドセルを背負い、ぴちぴちになった学校指定ブレザーを着ていた。

窮屈そうな外見と裏腹に、いつも笑顔であたしに手を差し述べてくれた。

「美久ちゃん、おはよう。 学校行こう！」

同じ学区の同じ地区に住んでいた上級生。 初恋と言っには淡過ぎる思い。

一人っ子のあたしにとっては、頼れる兄貴分への憧れでしかなか

ったのかも知れない。

その分、かえって純粹で、とらえどころのないふわふわした、温かい思い出として、あたしの胸に残っていたのだ。

ところが。

怜さんが読んでくれたカルテの中には、そのいい思い出を根底から真っ黒に塗りつぶすような、とんでもないことが書かれていたのだ。

しかもそれは、催眠によって中学1年生にまで退行した、あたし自身の口から語られたものだった。

それを聞いているうちに、鮮明な記憶があたしの脳裏に戻って来た。

吐き気のする記憶だった。

「あんた、柳井が好きだったんだってねえ」

その日の放課後、あたしの天敵ミヤハシは、そう言ってあたしの腕をつかんだのだ。

いつものいじめの始まりだった。

山王寺夏美を従えたミヤハシを、その日もあたしは拒否できなかつた。もうその頃になると、この同級生に何かで勝つことなど考えられず、逆らうことを思いつかないまま言いなりになってしまう事も少なくなかったのだ。

学校近くにある、建設現場に連れて行かれた。飯場というのか、プレハブの作業員小屋だ。

前日からの雨のために工事が中断していたらしく、人の気配はなかった。

ミヤハシはヘアピン一本で、器用にプレハブ小屋の鍵を開いた。

手慣れた様子を見て、窃盗の趣味でもあるんじゃないかと思ったのを覚えている。

事務机とストーブがあるだけの殺風景な部屋で数分待つと、若い男がひとりやって来た。

茶髪。耳と唇にピアス。服装も、当時の典型的なヤンキースタイルだった。

その男が柳井 雄太であることを、ミヤハシに言われるまで気づかなかつた。それほど彼は変わってしまったのだった。

「感謝しなさいよ、篠山。初恋の相手って聞いて、わざわざ連れて来てあげたんだから」

ミヤハシはそう言っ、茶髪の柳井の肩を押し、強引にあたしに近付けた。

「へええ。お前ホントに俺のこと好きだったの？」

ませてたんだな、小1で。ランドセルの方がでっかいくらいのちびだったくせに」

柳井がだらしなく口元をゆるませてあたしの肩を抱き寄せる。

ピアスの付いた唇から、シンナーで半分溶けて色が変わった歯並びが見えた。

思わず突き放すと、急に顔色を変えてのしかかって来た。

ミヤハシの目的は、「初恋の雄太君」に、あたしを強姦させることだ。

それに気づいたとき、恐怖よりも一瞬、怒りの方が勝り、あたしは当時にしては珍しいくらいしつかりと抵抗をした。

まず手足を振りまくって相手を近づけなくした。

それから大声を上げた。悲鳴ではなかったが、当時ほとんど無抵抗だったことを思えば、かなり頑張った声量だったに違いない。

「し、静かにしなさいよっ」

ミヤハシが人に聞かれるのを恐れてあたしの口を押えに来た。暴れるあたしの手足と口を、柳井と山王寺と3人掛かりで抑えようとす。

「雄太、なんか口に突っ込んで」

「な、なんもねーよ」

「下着脱がして口に突っ込むのよ。よくビデオとかでやってるじゃない」

「こ、こんなに暴れてたら脱がせらんねーよ」

「もおっ、ヘタクソ！」

ミヤハシは、事務机の下からとんでもないものを見つけて取って来た。

「いいものがあつたわ！」

それはゴキブリ捕りの、あのマットつき紙箱だった。中には捕獲したゴキブリが、駐車場の車みたいに並んでいた。

ミヤハシは瞳を輝かせて箱を二つ折りにすると、あたしの口の中に無理やり押し込んだのだった。

口の中に広がった薬物の匂いと、何のどこの部分なのか考えたくもない感触、苦み。

「ぐええっ」

耐え難い嫌悪感に、胃からせり上がってきた物を吐き散らした。最悪の事態だったが、結果としてこれがあたしをレイプから救ってくれたのだ。

柳田が、叫び声を上げて飛びのいた。ミヤハシが笑いだす。

「あーあ篠山きたねえっ！」

「なにしやがんだ、おいつ、ドロドロじゃねーかよ」

吐いたもので、自分とあたしの体が汚れたと言って、柳田が怒り出した。

「こんなで抱けるか」

罵倒と一緒に、何発か蹴りを入れられた。それでも強姦をあきらめて柳田が帰って行ったので、あたしは内心ほつとして、涙が無節操にだらだらとこぼれて来た。

もう立ち上がる気力がなくて、座り込んだまま呆然と泣いた。

ミヤハシの前で涙を見せるのは屈辱だったが、それに固執する段階はもう過ぎてしまっていた。

負け犬として自分から底辺に落ちれば、早く楽になれるとさえ思った。

ミヤハシの高笑いが、世界の外側ほどに遠くで聞こえた。

「エッチして貰えなくって、残念だったわねえ。

あんたみたいな汚物とファックするヤツなんて、いやしないってコトよ。

あんたのアソコには、こいつらで充分よ！」

ミヤハシはそう言って、山王寺にあたしを押さえ込ませた。吐き気と精神的ショック、柳井に蹴られた痛みもあって、あたしは抵抗する力がさつきほど出ないままに、下着をはぎ取られてしまった。

「ゴキブリとエッチしな！」

割り箸でつまんだゴキブリを、膣の中につままれた……。

「やめて！ 怜さん、もういいっ」

あたしはカルテを読む怜さんを遮って、両手で耳を塞いだ。

後悔が全身を震わせ、悲鳴に近い声も震えていた。 思い出すんじゃないかった！

いじめの記憶は何を取っても最低に違いなかったが、こんなひどい記憶は一生忘却の河の中に沈めておいたほうがよかったのだ。そうすれば、せめて怜さんには知られずに済んだのに。

「美久ちゃん、これでわかったよ、だからつながってるんだ。」

君の感情の中で、ゴキブリとセックスは一つのラインの上にある。その相手であるコロ助も、ゴキブリと同じ線上に立ったというわけだ」

怜さんは静かに言ってカルテのファイルを閉じた。

「でも問題は、そんな過去のことか今、急に何故浮上して来たかという事なんだよ。」

これまで君とコロ助は、セックスとまではいかなくても性的な行為はゼロじゃなかったんだろ。

症状が出るならその時点で出てもおかしくなかったはずだ。

俺は今回、例のインチキ教祖さまが何らかの細工をしていると見てるんだがね」

「細工……」

「だれと電話したか覚えてなかったとか言ってたじゃないか。」

おそらく君に、新しい暗示をかけた者が居るはずだよ」

「かよのさん……?」

「それはわからない。コロ助はその女じゃなくて、柳井に復讐に行っただろ。」

暗示をかけた者がわかっていれば、そいつに復讐しそうなもんじゃないか」

コロ助。 ウィズ。

その名前を聞いたとたん、目の前がふっと暗くなるような感覚に襲われた。

ウィズに、見られた。

あたしの過去、思い出したくもなかったあたしの記憶の汚点を、

魔術師にしっかりと見られてしまったのだ。生半可ではない、汚らしくもみじめな記憶を。

たぶん、ウィズは優しいから、あたしの代わりに心を痛めてくれたんだろう。

あたしに成り代わって怒ってもくれたんだろう。

そしてあたしに対しては、それを見たと言わないでくれたんだろう。

ウィズはホントに優しいから。

でも、その優しさを有難いとは、あたしはどうしても思えない。

それはあたしが狭量なせいなのかな。素直に感謝できないあたしが馬鹿なのかな。

こんなみじめな思いをするぐらいなら、もう何処かに行っておつか、ウィズに会うのはつらいから別れてしまおうかと、そんな風に残る向きに思うのは、あたしが弱いからなのかな。

## 14、変人同好会

「美久ちゃん」

肩に手を置かれて、はっと我に返ると、怜さんがあたしの顔を覗き込んでいる。

そう言えば、さっきから何度か呼ばれていたかもしれない。

「大丈夫か」

「うん」

反射的に答えてから、すぐに笑って首を振った。

「なわけないわね。大体、こんなことを忘れてること自体、充分大丈夫じゃないもんね」

「そんなのおかしいうちに入らないって。誰だって苦しいことは高速で忘れたいんだ。喉元を過ぎて今が幸せなら尚更だ」

怜さんは、二人がまともに向き合う位置に座りなおして、正面からあたしの瞳を見据えた。

整った容貌の中に漂うコケティッシュな印象が、とても魅力的だ。

「こんな時に言うのはなんだけどな。

オレ、美久ちゃんにプロポーズしたろ？ あれ本気だし、今も同じ気持ちだから」

「え？ でも、怜さんは」

確かウィズにキスしたりとか、この前まで明らかにもめてたようだったけど。

「そんな顔するな。オレもまだいろいろレミの方の整理がついてないんだ。

ただ、美久ちゃんが気になるんだよ。コ口助と一緒になるっ

てことは、相当ハードなことだと思っからさ」

「ウイズが『見る人』だから？」

怜さんはうなずいた。

「コロ助はいいやつだよ。オレだって、レミの時代にはあれだけ惚れ込んでたんだ。きみがあいつを好きになるのは無理もないと思っただよ。」

でも、恋人としては、ハード過ぎる相手じゃないか。

きみはあいつに針の先ほどの隠し事も出来ないし、そのうえ触角が精巧過ぎて、単に恋の駆け引きが出来ないとか、浮気したらばれるとかさ、そういうレベルのお話じゃ済まないだろ？

今回がいい例だ。きみが自分自身でさえ直視出来ずにいることを、あいつは一瞬で見ってしまう。

美久ちゃんにもそろそろわかって来ただろ？

この先、例えば結婚してもそうなるんだ。人間、自分一人の胸に隠しているから生きられる秘密の一つや二つ、誰でも普通に持つてるさ。それをあいつはゼロにしてしまうんだ。

美久ちゃんは辛抱強い子だ。コロ助を受け入れようとして、神経をすり減らしてボロボロになったって、自分から別れるとは言わないだろ？

そうなっからでは、コロ助は加害者として傷つくし、きみのダメージも深い。

そうなる前に、オレが壊してしまった方がいいんじゃないかと思っただのさ」

ウイズと別れる！

そのことを想像しただけで、あたしの胸は張り裂けるほど傷んだ。たった今まで、とてもやって行けないと後ろ向きに考えていたのに、こんなじゃ別れると言っただって難しいだろっ。

怜さんの言う事は、極論だけど方向違いじゃない。　ウイズがあたしを見向きもしなくなる日が来るなら、それが一番幸せかも知れないのだ。

「もうしばらくはアタックを続けるし、待つよ。　いつまでも、とはさすがに言えないけどね。」

だから美久ちゃん、もうだめだと思ったら、オレのプロポーズを受けてくれ。

コロ助と殴り合っても、オレがあとを引き受けるから」

「引き受けるって、怜さんとあたしが結婚するの？」

「付き合ったり結婚したりする方向に行きたいならそれでもいいし、そんな気分にならないんだっいたらしばらく様子を見て決めよう。」

とにかく、コロ助が君を見て、自分と一緒にならない方が幸せそうだと感じればそれで終わりにするだろう。　そのための一時避難だよ」

あたしはうつむいて首を振った。

ウイズと別れるなんて辛すぎるし、怜さんと恋愛することも想像できない。

そんなこと、怜さんにだってよくわかってるはずだ。

でも、それでもここまで言わせるほどの危機感が、あたしたちにあるってことなんだろう。　ウイズと一緒にになったら不幸になりそうなたたしが、怜さんに見えてしまったってことなんだろう。

怜さんが表情を和らげて、ふつと息をつき、

「そう深刻になるな。　今すぐ決めなくてもいい話だ。」

さあ、今夜はこれで終了。　送ってくよ」

立ち上がった途端、大変なことが起こった。　部屋の隅に置いてあった、一つだけデザインの違う不格好なソファがいきなり動いて

叫び出したのだ。

「冗談じゃない、気を持たせといてそんな話で終わるのは言語道断！」

布を被ってソファそっくりに擬態していたその人は、立ち上がると天井に頭がくっつくのではないかと思うほど馬鹿でかい図体をした、中年の髭面男だった。

あとで聞いたたら、この時のあたしの悲鳴は、廊下の隅まで響いたそうさ。

すぐにさっきのハツちゃん青年が、声を聞きつけて脂肪を揺すりながら駆け込んで来た。

「いましたかッ」

「……いたねえ。 忍者みたいになって」

怜さんが、我知らずしがみついてしまったあたしの背中を撫でてくれながら、あきれた声で言った。

「ずーっーっここにひとのやること見てたんですか、キシシ教授」

あたしは驚いて、狭い部屋にそびえ立った忍者もどきの大男を見上げた。 無精ひげに一面覆われた、日本人離れた顔は、日焼けの具合もあって、エジプトあたりが似合いそうさ。 その下に、いつ洗濯したのかわからないようなしわだらけの白衣に包まれた、蜘蛛のように細くて長い体がある。

「別段好きで見ておったわけではない。 ここに隠れてたら、あなたたちが勝手に入ってきてラブシーンに及んだから、出るに出来るん状態になっただけだろう」

「誰がラブシーンやったんですよ!」

怜さんが気色ばむ。

「立派にプロポーズしたろうが！ そのまま押しまくるのかと思つて期待しておつたら、さっさと自分から鎮火するとは、あれでは竜頭蛇尾というものだろう」

「それつて結局、隠れるより覗きの方に身が入つてたつて言つてますよね？」

「どつちが重要であつても、吾輩の勝手じゃないかね」

「暇なんですかあなたは！」

まあまあまあ、とハツちゃん青年が、二人の間に割つて入つて来た。

「ここまでここまで。 朝香先生もキシシ教授も、忙しい体ですよほんとに。」

はいはい朝香先生お疲れ様、気を付けてお帰り下さいね。

さあ、キシシ教授にはこれから研究室で腐るほど暇つぶしをあげますよ」

「要らんというに、離せ！」

「まあそう遠慮なさらず、お樂にお樂に」

意外にもハツちゃんは怪力で、抵抗しようとするキシシ教授の腕をつかんで引きずつたまま、涼しい顔で廊下への扉を開けた。

「あつ？」

扉の外に人が立っていたので、ハツちゃんはドアを開けそびれた。その間に教授が手を振りほどいて、部屋の中央に逃げ戻る。

「すみません」

謝罪して外からドアを支えたのは、なんとあたしの魔術師ではないか。

「ウイズ！」

「美久ちゃん、迎えに来たよ」

ドアから滑り込むように部屋に入って来たウイズを見て、怜さん

が顔をしかめた。

「お前なあ、こつちが苦勞して二人で逃避行したのに、けるっと嗅ぎつけて来んなよ」

「怜に言えんの？ 人のフィアンセ拉致つといて」

「誰がそうさせたんだよ」

「喧嘩しないで」

今度はあたしが割って入った。そしてウイズの目を覗き込み、

「殴ったの！？」

目的語抜きでいきなり聞くと、ウイズはくすんと笑って首を振った。

「殴つてない。 ちよつと脅しただけ」

「脅したつて……」

「たいしたことないよ」

穏やかに言われたら、より一層怖い感じがした。

「お。 君は見たことのある男だな」

ハツちゃんを避けて部屋の奥に下がっていたキシム教授が、ウイズの顔を見て好奇心いっぱい瞳を輝かせた。

「先日から何やらテレビで騒がれとる御仁じゃないかね」

「ああそうそう！ そうですよ」

怜さんが意地悪そうな顔つきになり、ウイズの肩を押して、教授の方に向き直らせる。

「彼は教授好みの超人スーパーですよ。

おとなしく研究に参加してくれたら、終わった後でこの男を教授にあげましょう。

煮るなり焼くなりして遊んでいいですから、マッドサイエンティストごっこでもなんでもおやんなさいよ」

「あのね怜ねえ！」  
ウイズが抗議の声を上げた時。

教授はのっそりと歩み寄って、魔術師の瞳を覗き込んだ。  
うわー！ でかい！

ウイズと並べてもこの教授、ホントに身長が半端じゃない。  
メートル以上あるんだろう。 2

こんな図体でよくソファなんぞに化けていたものだ。

「君は、噂の占い師だな」

教授は、ウイズの頭の上から話しかけた。

「人の頭の中が見えるというのは、本当かね？」

「はあ」

「私の考えが読めるかね？」

ウイズは教授の正面に立ち、その顔を2秒だけ見つめた。

「教授は空腹でいらっしやるんですね」

ごく普通の口調でまずそう言うと、その後しばらく黙り込んでから、突然、

「えっ!?!」

と大きな声を出した。

「ち、ちよつと待ってください。 ちよつと待って。

ぷっ、あはははは。 そんなもの食べませんよ！」

笑い始めたウイズを、教授はニヤニヤしながら見下ろしている。

「かんべんして下さい。 いりませんよ僕は。

あつ。 あっはははは。

なんで自分で食うんですか、変な人だなあ！」

ウイズは笑い転げてその場に座ってしまった。教授もそれを見ながら、咽喉をくつくと鳴らして笑い出す。ハツちゃんが戸惑った表情で、全員の顔を見比べている。

あたしと怜さんも、ぼかんと口をあけて彼らを見ていた。

どんな映像を共有したのか知らないが、どうやら変人ふたりは、めでたく気が合ったようだ。

## 15、仙人、ワイドショーに出る

「さあ、お待ちかね『ワダモリのつつコミュニケーション！』のコーナーがやって参りました。皆様お元気でしょうか、和田健之助です！」

「森崎ねねです！」

「今話題のホットなゲストに鋭く突っ込みを入れながら、ニユースや町の噂を掘り下げて行くこのコーナー、本日のゲストは！？」

テレビから流れて来るワイドショーの音声に、あたしは悲鳴を上げて耳を塞ぐ。

画面の中ではこちらの動揺にはお構いなく、男女二人の進行役が明るすぎる弾丸トークを続けている。

「本日は、ぜひ見て見たかった超常対決、どちらもちよつと怪しげというか、ホントかしらというか、印象からするといい勝負な感じするお二人ですね」

「はい。まず『癒しの湯として人の望みを叶える水は、殺人の望みを叶えてくれるのか？』先日とんでもないニュースで話題騒然となりました、教団宗主様、鬼挟おにばさり 魁かいさんです」

「まどかあ！ 始まった！ 始まっちゃったよ。」

「どうしよう、こわいよこわいよあ」

「待て待て、すぐそっち行くから」

親友の寺内まどかは、トレーに入れたティーカップをガチャガチャ鳴らしながら、キッチンから飛び出して来てくれた。

あたしの買って来たチーズケーキの横に、チョコボールの入ったガラス皿と、香りのよいハーブティーのカップが並ぶ。でもあたしはもうガチガチに緊張して、香りなんて楽しんでいられない。

だって、画面の中央にあのアラフォー新田がでんと居座ってるんだもの。

そしてそして、次に映し出されたのは、眉目秀麗あらどうしたの素敵じゃない、という美男子の顔。

「対しますは、現代のヨハネ、百発百中外れ無しを誇る超絶占い師、如月吹雪さんです」

スタジオからほおっと、何だかわからないどよめきが起こった。

魔術師の顔を見た人の一般的な反応だ。

「ふえええん、ウイズほんとにスタジオにいるう」

「当たり前だろ出演してんだから。美久しっかりしろよ」

そんなこと言われたって。

ああ、ダメだ。とても見てられない。

そもそも最初にテレビ局が出演を持ちかけたのは、オニバサリとアラフォー新田の方だった。

例の「アケミさんの内縁の夫殺人」の騒ぎでクローズアップされた彼の、カリスマ性もしくはインチキぶりにスポットを当てようと、番組は新田にゲスト生出演を依頼し、それは受諾された。

当然、対抗馬としてウイズにもオファーが来たが、彼はこれを拒否。

二ニュース番組の時はなんとか承諾した「コメントVTRで画面に顔を出す」という依頼もはねつけた。つまりは新田と同じ画面に顔を出すのも嫌だったわけだ。

因縁のふたりの対決で煽ることが出来なくなって、テレビ局は頭を抱えた。

いくらオニバサリが今話題沸騰と言っても、素人にわかりづらい宗教論などを一人で延々と語られたら、視聴者がついて来れるわけがない。

そこで専門家を呼ぶ話が出て、キシシ教授に白羽の矢が立ったのだった。

四角四面な学術的研究者ではなく、オカルトだの都市伝説だのを交えた歴史民俗学の研究家、という柔らかかさ加減がテレビ局のお気に召したようだ。

ところが、すっかりウイズと戦う気になっていた新田は、この変更に難色を示し、スタジオでコメントイターとしゃべるだけなら出演しないと言い出した。もしコメントするだけなら、オニバサリの本部に来るか、現場を取材した上で語ってしかるべきだと演説ぶつたらしい。

キシシ教授は大喜びだった。

もともとオニバサリに行きたかったし、研究発表の準備もサボりたかったのだ。

逆に研究室のメンバーは大慌て。もともとテレビ出演に割いてる時間も惜しいのに、山陰まで出張なんかされたら、発表当日まで全く教授に会えないことになる。

という訳で、あの晩、大学の研究棟にあたしを迎えに来たウイズに、研究室のメンバー7人が総出で頭を下げて来たのだった。

「お願いです！ ワイドショーに出演してやってください！」

うちの魔術師はマスコミが嫌いだ。

それなのに出演依頼を受ける決心をしたのは、単にみんなに拝み倒されたからだけじゃないだろう。

新田のしつこい怨恨に対するいらだちもあつたかも知れない。キシシ教授が熱を込めて、「あんたは本物だから大丈夫だ」と繰り返していたのが嬉しかったのかも知れない。

でも、わかつてるんだ。一番大きな理由は、あたしにかよのさんがちよっかいを掛けたこと、それを新田の差し金だと言って、ウイズは怒ってくれているのだ。

有難くて、申し訳なくて、あたしは今回のテレビ出演の事では何も意見が言えなかった。

あたしは、ウイズに触ることもできないお嫁さんなんだから。

スタジオには、他にも3人のコメンテーターが来ていた。

医学、法律、宗教とそれぞれの専門家で、キシシ教授なんぞよりはずっと偉い人のようだ。

この3人のプロフィールを司会者が読み上げる間、画面の端に時たま映るウイズの様子を、あたしとまどかは真剣に見ようとした。

「なんか如月さん……他の人と違うな」  
まどかがボソツと言って首をひねった。

あたしも同じことを感じていた。でも、何がどこが違うんだろう。

ウイズの顔はいつもと同じ無表情だったが、それが今日はひどく子供じみて、ぼんやりしている気がしたのだ。

スタジオ全体が映し出された時、やっとその理由がわかった。

「違う、ウイズがおかしいんじゃないよ。」

他の人がみんな、なんか必死でこそごそ動いてるのに、ウイズ

だけ動かないの。

ほら、見て！」

司会者と3人のコメントイターたちは、落ち着きなく始終体を動かしていた。顔を見ると、表情もどこかひきつって見えるのは気のせいだろうか。

それで、普段でも際立っているウイズのおっとりした態度が、余計に不自然に見えたのだ。

ウイズの対面側で、オニバサリこと新田も、ごそごそせずに不動の姿勢を取っている。

「まず、お二人のプロフィールをご紹介しましょう」

司会の和田が、VTRに乗せて、新田とウイズそれぞれの人物説明を始めた。プロフィールと言っても、要するに、例の殺人事件にまつわる二人の因縁についてが大半で、その他の情報と言ったらホントにわずかなものだった。

新田の事は、島根で教団を束ねている教祖で、水を使った“癒し”を売りにしていること。

VTRの画面はほとんどニュースで放映されたものの使いまわしだ。

ウイズに至っては、「HPで話題の、よく当たる占い師」とだけ。

それだけでは申し訳ないのか、HPを利用したことのある女の子数人にコメントを貰っていたが、

「すごいイケメンで」などというどうでもいい言葉ばかりが繰り返される、しょうもない取材だった。

「さっそくお話を聞きたいのですが、オニバサリさん。

水を使った癒しをされていると伺いました。この水というのは、特別な薬効がある水なんでしょうか？」

和田が無難に質問を開始すると、

「お人が悪い。和田さんそれは引っかけでしょうか」

新田は、たるんだ肩をすくめて首を振った。

「医者でも薬剤師でもない私が、薬を売ったらえらいことになります。」

うちの水は薬品ではありません。

ただリラックス効果を促進する力があると信じられている水なんです」

「それは科学的に、成分調査などを行われたのでしょうか」

森崎ねねの質問は、新田の脂ぎった額に小さな引きつりを走らせた。

「あなたもわからん人だな！ そういう成分が検出されていたら、それこそ薬効を謳ったことになるじゃないですか。」

我々はこの水を、靈的に高めて皆さんに使って頂いているのであって、水の成分に助けられて商売している薬売りじゃありません。

「だいたい、うちの事を宗教団体と表現するのはいい加減やめていただきたいですな。」

我々は『教え』を説いているわけではない。水を媒体にして、心の解放をご指導しているのです。

神仏を崇拝する宗教団体とごっちゃにしてもらったらたまりませんよ」

スタジオに並んで座った出演者が、軒並み首を傾げた。

「わかりづらいんですがオニバサリさん」

植松という名の壮年の男が、代表で口を開いた。

宗教研究家、という肩書きのテロップが表示されている。

「商品価値を武器に商売する商人ではないとおっしゃる。」

宗教的な教えを説いてるわけでもないとおっしゃる。

じゃ実際のところ、あなた方は何なんですか？」

新田はわけもなく胸を反らした。

「我々は、皆様の心の平安のためにお世話をする集団なのです」

「無償で？ ボランティアですか」

植松が畳み掛ける。

「ほとんどの人はそうです」

「じゃあどうやって食って行ってるわけですか」

「それは、お世話に必要な最低限の料金は頂いているので」

「ボランティアでもなんでもないじゃないですか」

「ほとんどの人はと言いました」

「つまり、あなたは利益を得ているんですね」

「最低限です」

「とにかくお世話をして利益を得ている、つまりはサービス業ですか」

大西という、若手の弁護士が割って入って来た。

「つまりは旅館や温泉施設のような経営業務と考えていいわけですかね？」

ホテルや旅館の経営者なら、利用者つまりお客様は神様のようなもので、あなたは今より相当遜へりくだって仕事をなさるのが妥当と考えられますが」

スタジオにくすくすと笑いが広がった。

これまでの報道で、オニバサリが信者から「水守り様」と呼ばれて、合掌までされているところが何度も放映されていたからだ。

新田の顔面に、怒りで赤みが差した。

「ええつと。いかがですか如月さん。」

あなたは人の心が読める、と伺っていますが、オニバサリさんの発言を聞かれて、どうお感じになりましたか？」

司会者が、全く話に参加しようとしないうイズに水を向けて来た。それ来たぞとばかり、スタジオの全員が魔術師に注目する。あたしの心臓がドカンと跳ね上がる。

「別に何も」

ウイズの返答は、拍子抜けするものだった。

「今のところさしたる嘘もついておられないようだし、いいんじゃないですか？」

「おいおい、攻めねーのかよ。ぬるいんじゃない？」

まどかがあきれてあたしを振り返る。その言葉に、ウイズの次の発言が重なった。

「薬効云々はともかく、リラックスすると言っんなら見せて貰ったらどうでしょうか？」

オニバサリさん、今ボトルでわざわざお持ちになってるようですし」

「えッ」

出演者の目が新田に集中する。

「ポケットにお持ちですよ」

ウイズが言うつと、カメラが新田の腹部を大映しにした。

もつとも、脂肪でほどよく膨らんだお腹は、何か入れていてもわかるものではない。

「オニバサリさん、水をお持ちなんですか」

司会者に確認されて、新田は口をパクパクさせて返事に詰まった。持っているけど、できれば見せたいけど、ウイズの手柄になるのは嫌なので認めたくないという事なのだろう。

「お持ちでしたら是非見せてください。」

私たちも、そのリラックス効果というのを体験したいですよね」  
食い下がられて、新田はしぶしぶポケットからミニボトルを出し、  
座席前の小さな台の上に置いた。

「これと同じものでご入浴なんですね」

和田が歩み寄ってボトルを持ち上げ、カメラでアップにさせる。

「そうですよ」

「誰かに体験していただいてもいいですか」

「ああ、構いません」

新田も腹をくくったのか、うなずいて一同の顔を見渡し、ゆっく  
りと言った。

「現在、何か御不快な症状をお持ちの方はおられますか？」

どうも皆さん、さつきから尻の落ち着きが悪いと言っか、辛そ  
うな感じに見えるんですけどね」

出演者が互いの顔を見比べた。 沼という名の女性外科医が手を

挙げる。

「あの、いいですか？」

さつき控室にすぐく虫が入って来ていて、わたしたちたくさん  
刺されてとつても痒いんですよ。

こういうのも不快って言うのかしら、治りますか？」

「あ。私もです」

「わたしも」

「蚊が多いんですかね、この建物は」

出演者たちが一斉に言い始めた。

カメラは彼ら一人ずつに寄って行き、痒いところをアップにする。  
赤く膨らんだひどい虫刺されの跡がいくつも映った。 季節から  
信じがたいが、やはり蚊ではないかと思われた。

どうやら一同が落ち着かなかったのは、この痒みを我慢していたからであるらしい。

水を入れるための大皿がどこかから調達されて登場し、痒い人が順番にそれぞれの手を浸してみることになった。出演者が次々に立って、水に近寄って行く。

ウィズひとりが、退屈そうに頬杖をついてその様子を見守っていた。

15、仙人、ワイドショーに出る（後書き）

くくりが難しく、少々長い一話になりました。  
ワイドショー、次回まで続きます。

## 16、オニバサリの罖

スタジオ内に興奮した声が次々上がった。

「すごい！なんでこんなに気持ちいいの？」

「ほんつとに痒みが消えましたね」

「患部を浸けてるわけじゃないのに、不思議だねえ」

緩いテンポで進んでいたお昼のワイドショーは、“癒しの水”の登場で一氣に加熱し、大騒ぎになっていた。蚊に刺されて痒いと言っていたゲスト出演者たちが、こぞつて水に手を浸し、痒みが消えたと感激したのだ。

「ヤラセじゃねーの？ だって、足を刺された人もいるのに、浸けてるのは全員手だけだろ」

まどかが吐き捨てて、ハーブティーをがぶりと飲んだ。

「うん。でも、あたしの時も、浸けたのは手だったけど吐き気は治まったんだし」

「あ、そうか。皮膚から効いてくんじゃないんだ。

「ってことは、神経そのものを麻痺させてるってことか？」

「それ、怖くない？」

「怖いよな。あーあ、見るよオニバサリの得意そうな顔」

一瞬カメラがとらえた新田の顔は、不敵かつ満足そうな、太い笑みを浮かべていた。

「どうぞ次の人、手を浸してみてください」

あのー、如月さん起きてらっしゃいますか？」

ワツと笑いが起こり、動かないウイズを司会者が誘いに来た。

こいつ仕事する気あんのか、と内心でイライラしてるんじゃないかと思われた。

「僕は痒くないですから」と、ウイズ。

「え？ 刺されてないんですか？」

「はあ」

それを聞いた新田が、鼻息荒く立ち上がった。

「やせ我慢はやめて、あんたも体験すればいいじゃないですか。

いくら千里眼だったって、相手が虫なんだから刺されたって恥じやないでしょう。素直に参加して見せたらどうです？」

ウイズの目がすーっと細くなった。やれやれと息を吐き出してから、魔術師はおもむろにポケットから小さなスプレーボトルを取り出し、座席前のテーブルに置く。

虫よけスプレーの携帯用ボトル。

出がけに何か探し回っていたと思っただらこれだったのか。

さすがウイズ、お仕事前に大体の展開は予見してあるのね。

一呼吸の沈黙の後、スタジオは再び騒然となった。進行役の二人が、口角泡を飛ばしてまくし立てる。

「これはつまり、予測していらしたわけですか？」

まさか毎日持ち歩いておられないですよね？」

「いや、大体こんな街中に来るのに持ってこないもんですよ。

前もってわかっておられたんですね？」

「はあ」

「皆さんお聞きになりましたか？ 如月さんも本物ですよ！」

拍手が起こった。ホーとかハーツとか感心したような反響も大きい。

その音を引き裂くように、新田が反論の声を張り上げた。

「ばかばかしい、こんなのヤラセでしょう。」

自分で前もって虫を仕込んで、部屋に放っておいたら成立する。

「いわゆる手品です。とんだ詐欺師だ」

どうでも因縁がつけたい新田の言に、司会者が飛びついた。彼らはこの対決ヒートアップこそを望んでいたのだ。

「オニバサリさんは、これが如月さんの策略だと?」

「当たり前です。預言なんてものは、簡単にでっち上げられるもんなんだ。」

第一、前もってわかってたんならみんなに教えて予防すればいいものを、これ見よがしにここで出して見せること自体、インチキ臭いじゃないですか」

スタジオ内の客席から賛同の拍手が起こった。

まどかが頭を掻き篦る。

「あー。こうなるんじゃないかと思っただよ。」

所詮こういうことを証明するのって無理なんだよな」

画面の中のウィズは、あい変わらず何を考えているのかわかりにくい顔だ。

見る人によつてはこういう表情も、胡散臭いと思うんだろう。

「ええと、反論しても?」

とても静かな声で、あたしの魔術師は司会者に言った。

「もちろん! どうぞ」

ウィズは新田ではなく、会場の客席の方に目を向けた。

ここに来ているお客さんは、出演者の付き添いで入場パスを貰った人か、視聴者プレゼントなどで招待券を貰った人だけだ。あたしもウィズの付き添いで入れて貰えるところだったのだけど、とても現場で見守る勇氣はなかった。

「和田さん。今、客席の中にも、ずいぶん痒い思いをしている人がいらっしやるのを感じるんです。」

まずその人をここにお呼びしてもいいですか?」

「お客様の他にも、蚊に刺された人がいらっしやる？」

「はい。あそこの中央右寄り、白っぽいポロシャツをお召しの男性の方です」

魔術師が指さす客席に、スタッフがすぐに入って行き、問題の男性を探し出した。

カメラがアップで捉えたのは、くたびれた感じの中年のおじさんで、薄汚れた服装に、いかにも年季の入った大きなカバンを抱えている。

彼は最初、ステージに出るのを拒んでいたが、強引に詰め寄られて仕方なく前に引つ張られて来た。

「おお、ご覧ください。ホントにほらっ、虫刺されの跡がこんなに。」

うわっこれは凄いですね。 3 / 4 / 5 / 6 …… 10 か所以上もある」

司会者が、男の腕や首筋の赤くなったところを無理やりカメラに向ける。

「ええとすみません、お名前を伺えますか」

マイクを突き付けられ、男は口ごもった。 が、見逃して貰えそうにないと悟ったのか、

「部屋と申します」

蚊の鳴くような声で言った。

「部屋さん、ずいぶんたくさん刺されましたね。 どこにいらっ

しゃってこんなになっただんですか」

「く、車の中です」

「車内にこんなに蚊が!? 大変でしたねえっ」

「は、はあ」

その時、森崎が大声を出した。

「和田さんあのね、今、後ろでみなさんが大騒ぎしてるんですけど。」

その部屋さんですね、ゲストの皆さんが控室にいる時に顔を出されてるみたいなんですよ」

「どういことですか」

カメラが高速で切り替わる。

森崎はゲストにマイクを預けてしゃべらせた。まず植松が、

「わたしが控室に入っすぐ、その人がノックして来てですね。

清掃作業員だけど、私物のバッグを忘れたから探させてくれと言って部屋に入っ、ここじゃなかったと言っすぐ出て行っただす」

「僕の控室にも来ました」「わたしの部屋もです」  
大西と沼も口々に言う。

「その人が蚊の仕込みをした人です。」

オニバサリの信者さん、ああ、宗教じゃないんですけどね。……

オニバサリの利用者で、ボランティアにも参加しておいでです。

今回、蚊の運搬をするときに車内に漏れてしまったようですね」

ウイズの言葉に、またスタジオが湧き上がる。

「と、ということは、蚊の仕込みしたのはオニバサリさんだということですか？」

「ひどーい！ ホントですかオニバサリさん。」

水の効果を見せるために、ゲストに痒い思いをさせたわけですか」

「知らん！ 私は何もやってない」

森崎に詰め寄られて、新田が首を振りまくる。

「部屋さん、どうなんですかホントのところは」

和田が拳銃のように、部屋にマイクを突きつけた。

大汗をかいて肩で息をする新田の顔と、しどろもどろで生唾を飲

み込む部屋の顔が、2分割でアップになる。

やった。ウィズの勝ちだ！

あたしもまどかもそう確信した。

ところが、予想外の事態が起こった。

「如月さんに、頼まれてやりました」

部屋の馬鹿たれ中年オヤジが、いきなりそんなことを言ったのだ。

「占い師の如月吹雪さんが、控室に蚊を入れておくように私におっしゃいました。」

仕事料として10万払うからおっしゃったので、引き受けました」

こらあ！ クソオヤジ！

ウソつきは閻魔様に言いつけるからね！！

## 17、恋のバイブル

くやしい！

くやしい！

くやしいよおっ！

「なんなのよウイズ、何で負けちゃうの？

あのおっさん、名誉棄損で訴えようよ。 あれって絶対、新田の差し金じゃないの！！」

テレビ局から戻ったウイズに飛びかかるようにして、あたしは不満を全開した。

途端に、忘れていた吐き気が胃の中で盛り上がって来たので、慌ててウイズから離れ、トイレに駆け込む。 くやしい、この吐き気だって新田の策略に違いないのに。

トイレでさんざん吐いていると、ウイズが扉を叩いた。

「美久ちゃん、落ち着いたらでいいから、あとで占いルームに来てくれる？ お客さんなんだ」

「占いの？」

「いや、大学の。 明日、キシン教授と一緒に、オニバサリに行くことにしたから」

「え？ ウイズが？」

「うん、今日のリベンジしたいからさ」

吐いてる場合じゃない！

あたしはトイレを飛び出すと、ティーポットに適当なお茶をぶち込んで、占いルームに突進した。

お客さんは、キシシ教授とハツちゃん、それと仕事を切り上げて一緒に来た怜さんの3人だった。

彼らは接客用のデスクに山陰方面の地図を広げて、車の走行ルートを検討中だった。

今日で研究発表が終わってお許しが出たので、キシシ教授は晴れて山陰行きを決行、どうやら周囲も今後は不真面目な教授がいるだけ邪魔になるので賛成している、と言う感じだった。

「今回の目的の一つは、オニバサリ沼と教団それぞれの水の成分調査なんだ。

あの水、怪しいだろう？ 変な薬でも混ざってたらことだからサンプルを送ってもらって大学で検査する」

怜さんはいつものように、あたしに解りやすく説明してくれた。怜さん自身は、仕事があって平日は休めないなので、送られたサンプルを分析するのを手伝うと言う。

次にハツちゃんが調査結果を披露してくれた。

「あの部屋つて男、調べてみたら製薬会社で殺虫剤の開発をしている関係で、蚊の飼育機を持ってるんですよ。で、ボランティアはもう6年の古株です。」

娘さんが若いころから痛風で苦しんでいて、痛み止めも限度があるってんで父親が水に手を出したんです。で、支払が増えすぎて返せなくなったので、両親ともオニバサリでボランティアを。

そういう人が多いらしいですよ。借金返す代わりに泊まり込みで労働してる人」

ウィズが顔を曇らせてうなずいた。

「自分の事より、子供の苦しむのを見かねて水を買って親が多いん

だよ。

薬なら保険もあるし、高額医療で補助金が出たりするけど、水は全額負担だからね」

「ウイズそれ、はじめからわかってたの？」

「スタジオで部屋さんの顔を見た時に解ったんだ。

あの作戦が成功したら、借金を棒引きするってオニバサリは約束したんだよ」

「だから、負けるの判ってて言わなかったのね？」

あたしの優しいお馬鹿さんは、小さく肩をすくめただけで何も言わなかった。

「今夜は早めに寝て、明日の早朝に出発なんだけど。

美久ちゃん、一緒に来てくれる？」

「いいの!？」

ウイズに言われて、あたしは大喜びでうなずいた。このメンバーじゃ足手まといだって言われるとばかり思っていたのだ。

「美久ちゃんの吐き気を治しに来た、って言うのが一番丸く収まりそうなんだよ。僕は面が割れてるし、仲間を連れて殴り込みに来たと思われたら面倒だからさ」

「あたしがおねだりして水を買いに来たことにすればいいのね」

新田はあたしが水にはまり込んで、借金でもすればウイズから遺産を巻き上げられると思っていたのだから、喜んで水を売るだろう。

「ご入浴つてやつも体験してくれると助かるな」

「い、いいの? 『悪魔の水』 なんじゃないの?」

ウイズはきまり悪そうに肩をすくめた。

「体に害があるわけじゃないからね」

要するにそれを取り巻く環境の問題なんだろう。新田のや彼の

生きる世界の悪意を、あたしの周囲に呼び込みたくないウイズの気

持ちは、判るような気がした。

「わかったわ。で、その間教授とハツちゃんはとうするの」

「我々は鬼挟沼と、その田神社を調べる。地元の郷土資料館も回って資料集めだ。」

そのあとで、旅館で合流しようじゃないかね」

キシシ教授が言うと、怜さんがうーんとうなった。

「車が2台いるな。俺のを貸すから、ハツちゃん運転するか？」

「そうしますか」

その晩はみんなで「ウイザード」に食事に行き、早めに解散してウイズと二人でマンションに戻って来た。

大勢でわいわい言っている時は忘れていたけど、二人だけでエレベーターに乗ったら、また悲しさが戻って来る。狭いエレベーターの中に二人きりだと、端っこと端っことに離れて立っていてもまだ吐き気から逃げられないのだ。

情けなかった。

世界で一番、好きだったはずなのに。

「ウイズ、ごめんね」

「美久ちゃん」

震える声で謝ったら、ウイズは困ったように首を振った。

「美久ちゃんは、僕を傷つけたと思って自分が傷ついている。」

でも僕は一度も傷ついてなんかいないんだよ。そのことがどうやったらわかってもらえるか、ずっと考えてただけだ。そうか、それが今日なんだね」

ウイズは謎の言葉を口にしてから、あたしたちの部屋のドアを開けた。

ガラスで半分に仕切ったおかしな部屋の右と左に入って腰を下ろす。

ウイズが、ガラス越しに取って置き笑顔を寄越した。

「ね。美久ちゃん。上着脱いでくれない？」

「え？」

「その青いサンドレス、見た事なかった」

「あ。うん、今日初めて着たのよ」

「よく見せてくれる？」

あたしは立ち上がって、上着を脱いで見せた。

なんだかすごく恥ずかしかった。

長い付き合いなのに、ウイズがあたしの着る物なんかに興味を示したのは、初めてだ。

「よく似合ってる」

ウイズが微笑んだ。

「ありがと。実は、母さんの昔の服をもらったの」

「そうなの？ ちゃんと今年の流行に見えるよね」

「ちよつと重ね着して、今風に見せてるのよ。」

でも母さんは、ファッションで繰り返すもんだって、喜んでたわ

「凄く可愛いよ。ちよつとそのままじつとしてて」

「え？ なあに？」

「僕の視覚記憶バンクに入れて忘れないように固めるから」

信じられない。

今、あたしウイズに口説かれてる！

魔術師はあたしを立たせて、ジツと見つめたあと、幸せそうにくすくす笑い始めた。

「ガラス越して、なんかいいね。人魚でも飼ってる感じ」  
あたしは下を向いた。顔に赤味がさすのを感じた。

「今度は後ろを向いてくれる？」ウイズが言った。

「あの」

ものすごく恥ずかしいんですけど。

「いいから後ろ向いて」

あたしはガラスに背を向けた。

「そのまま4歩、歩いてくれる？」

言われるままに4歩進むと、ベッドの枕元まで来た。

「その引き出しに入ってる物を出してみて。鍵はスタンドライトに引っかけてあるよ」

「あ。これ引き出しの鍵なのね。何でこんなところにあるのかとずっと思ってた」

サイドテーブルの引き出しを開けると、青いリボンをかけた小さな箱が出て来た。

「プレゼントだよ、開けて見て」

ドキドキしながら箱を開けると、古風なつくりのペンダントが出て来た。

青い平たい石がはまっている。

「このドレスと同じ色だわ！」

「僕の特権なもの、楽しまなきゃ損だと思って」

「特権？」

「せつかくのおニューなのに、ごめん。実は、先に夢で見ちゃったんだよ」

「夢で見た、このドレスに合わせてペンダントを買ったの？」  
「うん」

ウイズがこういうことをするなんて思ってもみなかったので、胸がいつぱいになった。

青い石を、電球の光にかざしてみる。

「これ、宝石なんじゃないの？」

「ラピスラズリだって。知ってる？」

「名前だけ。やっぱり宝石なのね」

「僕は、エジプト秘宝展の写真で、スカラベにはまったやつしか見たことない。現代でも同じ石があるって初めて知った」

「その 高いんじゃないの？」

「そうかな。そもそも相場を知らないんだ。宝石じゃないア  
クセサリーだって、夜店の指輪くらいしか見たことなく。あれ  
よりはずっと高いよ」

その無頓着な言い方があまりにウイズらしかったので、あたしは  
つい笑った。

笑いの奥に、涙が待ち構えているのがわかった。

「ホントを言うとな、婚約指輪を買おうと思ったんだ」

あたしははっとして、ウイズの顔を見た。

「あまりピンと来るのがなくて、やめたけど」

「ウイズ でも」

あたしは思わず首を振った。

「このまま、あたしがウイズに触れなかったら？」

「そしたらこのまま、結婚してもガラスを付けて暮らそうよ。

こういう時代だからさ、子供をつくる方法はきつとあるよ」

「できっこない！」  
あたしは叫んだ。

「そんな生活、絶対できっこない！」

「じゃあ、犬を一匹飼おう」

「犬？」

「ミー君に特訓してもらってさ、犬になって夜な夜なそっちのベツドを訪問する。僕が僕でなければ、吐き気はしないかも知れない」

「はあ？」

それはもしかして、犬とエッチするってことですか。

「いや、ピノがいるんじゃないか。ピノに成りすましてそっちに行けばいいんだ」

「それ、本気で言ってるの？」

「うん」

ウイズはけろっとして笑った。

「美久ちゃんに触れるんなら、もう僕は犬でも猫でもいいや」

「ばか！！」

あたしはついに泣き出してしまった。

バカ！

なんでそんなに優しいわけ？

あたしのどこに、そんな価値があるわけ？

顔を覆って泣くあたしを、ウイズは黙って見ていた。

ウイズも、唇を結んで耐えていた。

こんなに近くにいるのに何も出来ないのは、きつとつらいに違いない。

とても長い間、彼は黙っていた。後で考えたら、彼は彼なりに勇気をたくさん動員しなきゃいけなかったんだと思う。

「いつ、言おうかと思ってたんだけど」

口を開いたウイズの声は、緊張で少しかすれていた。

「教会で、あの魔女たちが言ってたことは、ホントのことだよ」

「ウイズ！」

あたしはビツクリして顔を上げた。

涙がちよん切れて、止まってしまった。まさか本人が告白する

とは思ってなかった！！

「僕は小さい頃、あの妖怪どもに、いわゆる性的虐待を受けて育った。」

逃げたり断ったりしたことは、一度もなかった。寒い夜に犬小屋で寝ることに比べたら、ずっと楽なことだと思ってたんだ。

彼女らだって、寂しい女の子たちだった。異常ではあったけど、優しかったと思うよ。

そんなわけで、自分が傷つけられたことに、僕は長いこと気付かなかった」

「年頃になって、女の子を意識するようになって、それで初めて自分の体験の異常さに負い目を感じた。できるだけ女の子を避けて生活した。」

でも高校生になると、向こうからモーションかけてくる女の子もいて。

あ。ごめん。不愉快ならやめるけど」

「ううん、聞きたい」

あたしは本心から言った。

「何人か、すごく積極的な子がいて、そういう子のひとりと、あ

る日なるようになっちゃって。

断るのが面倒だったんだ。そのあと付き合いとか考えてなかった。そのくらい、関心の薄い相手だったんだよ」

「その子は納得した？」

ウイズは首を振った。

「結果的にめっちゃめっちゃ傷つけて、相手の両親が怒鳴り込んで来た」

深い溜め息が、彼の口から漏れた。

「喜和子ママを泣かせちゃったよ」

たぶん、それが一番つらかったんだろうな。

あたしも唇を噛んで耐えた。目の前にいるのに、抱きしめてあげられないのがつらかった。

「女の子にね、本気になるなんて、この先絶対ないと思っていたんだ。」

美久ちゃんと初めて会った頃も、こんな気持ちになるなんて思ってもみなかった。

僕にとって、恋愛は決して軽いものじゃないんだよ。だから美久ちゃんとも最後まで行くのを伸ばしてた。そうなる前に、ちゃんと宣言しておきたかったんだよ」

「宣言って」

「近寄ることができない程度の事であきらめたりできないくらい、僕は不器用だけど本気なんだってこと。だからもう少ししっかり覚悟してついて来てくれなきゃダメだよ。」

美久ちゃんとはね、死ぬまでに一緒になることが出来れば、もうそれだけで神様のギフトだと思うよ。

よく聞いて。僕はね。

女の子はもう、美久ちゃんしか要らないんだ」

ああ。 ウィズったら！  
また涙が止まらなくなったじゃない！

「美久ちゃん」

泣きじゃくるあたしに、ウィズが重ねて言った。

「言葉って、大事だね」

あたしはうなずいた。

これまで、ウィズからあたしへ、はつきりした意思表示の言葉があったのは、一度だけ。 あの、レテ河のほとりのプロポーズの時だけだ。

あれが、今日までのあたしの恋のバイブルだった。

今日、ここでウィズはあたしに新しい言葉をくれたのだ。 女の子はあたししか要らないんだって。

それだけで一生頑張れる。 オニバサリになんか負けるもんか。あたしはウィズを、手放さない。

出発の準備を済ませてから、あたしたちはベッドとカウチソファをガラスに寄せて、出来るだけくっついて横になることにした。その時初めて気づいたのだ。 ウィズがこの部屋にガラスで仕切りを付けたのは、ふた部屋にするためじゃない。 ウィズがずれるからでもない。

あたしのこの症状のため、離れていても一緒だと教えるためだったのだ。

向こうとこちらで、心だけ抱きあって眠った。

悲しくはなかった。

あたしたちは、間違いない一つになっていた。  
たとえこの世から、キスと抱擁がなくなっても。

## 18、鬼狭沼の伝説

夜明け前、大病院の職員用駐車場はこのあたりでは珍しく濃い霧が立ち込めていた。

「雨になるかな」

空を見上げたメンバーは5人。

あたしとウイズ、キシシ教授とハツちゃん。

そして驚いたことに、車を貸すだけだったはずの怜さんも一緒に行くと言ってきた。

「今日だけ休みを貰えたから、夜には帰らなくちゃいけないけどね」

そう言った怜さんの顔を見て、なんとなくあたしはピンと来た。

あたしが判ったくらいだから、ウイズはもちろんわかったはずだ。

「あたし、吐き気がしちゃったらいけないから、教授たちの車に乗せて貰っていいですか」

「え？ カレシと一緒にじゃなくっていいのかい。この車は資料館めぐりをするんだよ」

ハツちゃんが目を見張る。

「近くなったらどこかで乗り換えます。とにかくウイズと密室にいると気分が悪くなるので」

「難儀なことになってんな」

「怜がこつちに乗ればいいよ。疲れたら代わってよ」

ウイズがさりげなくあたしに加担してくれた。

怜さんは、自分の「レイミさん時代」の感情をつまく捨てられなくて、いろいろな自分を作ってみている。特にウイズに対して、それがまだ固まっていないのだ。

思い人であり古い知り合いでもあるウイズと、この先どんな付き

合いをしていけばいいのか、まだはつきり決められず怜さんは悩んでいる。そのことが判るから、あたしはウイズと彼をふたりでいさせてあげようと思ったのだ。

だけど、もし前の晩にウイズがあんな優しいプレゼントをくれなかつたら、とても自分からそんなことは言い出せなかつた。ウイズと二人でいたくないような言葉を口にすることは、とても勇気が要ることだからだ。

あたしの吐き気は、ウイズを傷つけない。

離れていまいしょうと言う言葉が彼を不快にしない。そのことが信じられただけで、あたしの胸の痛みはすっかり楽になっていた。

空が少し白み始めたころ、2台の車は朝もやをかき分けて出発した。

車の中では、教授が後部座席いっぱい山陰の資料を広げまくっていた。

座るところがないので、しかたなくあたしが助手席に乗る。運転手はハツちゃんだ。

キシン教授は資料をまさぐりまくりながら、とにかくずっとしゃべりっぱなしだった。

「大変なんだよ、今回のオニバサリつてのは、一部地域の資料しかなくてな。それもごく最近まで、えんのきょうつじや役行者の伝説と混じって分類されておつた話もあつて、どうも違うらしいと返されてきたりして全くわけがわからん状態だったのだ。

うちの学生でこの地域の出身者が二人おるんだが、こいつらが最近になってから、ようやく神社の奉納品の中から『戸部多津奈』なる名前を掘り出して来て、鬼を退治した行者はこれではないのかという話になって来たところだ」

「とべのたづなですか。　まだそれ、学界では何も騒いでませんよね」

ハツちゃんがハンドルを切りながら首をひねる。

「そりゃそうだろう。　おとぎ話だと思われておるのだ」

「薬売りだっていう説を聞いてますよ」

「その辺が有名だからな。　だが薬売りにフルネームはないのが普通だろう」

ふたりの会話を聞きながら、口を挟まずに黙っていたら、ハツちゃんにたしなめられた。

「ねえきみ、いいかげんに、それはどんな伝説ですかって聞いてやってくれない？」

知らない人に聞かせるのを、至上の喜びと思ってる先生なんだからさ」

「あ。　すみません、お邪魔かと思って」

「何百回も聞かされた話を、初めて聞いたみたいに盛り上げるのって疲れるんだよ。」

あとはきみが相手してやってよ、運転に専念したいからね」

「は、はあ」

あたしは頭をかきながら、後部座席に話しかけた。

「ええ、で、教授。　それはどんな伝説なんですか」

「この戸部多津奈という行者、神通力があって、山郷を荒らす鬼を念力で峡谷に挟み込んで封じた、という伝説がある。　これは沼の縁を守る「田神社」にもちゃんと記されている伝説なんだ。」

ただし、神社には多津奈の名前は記されておらず、ただ行者とだけあるので、鳥取あたりの役行者伝説と一緒にあって考えられて

おったわけさ。

田神社というのは稲荷神社でな。この行者を、神の使役するキツネとして祭っておる」

「人間じゃなくて、キツネ？」

「奉納された絵の中にある行者は、耳としっぽを生やしておるんだ。」

ただし、この種の画には見る者の主観がこめられておるからな。本当にそんな人間がおったということではないぞ。画をわかりやすくするために入れる印の様なものだ」

「あれと同じかしら、キリスト教の画の中で、聖者には丸い輪っかが入ってますよね」

「うん、うん、それだそれ。これが特別な人なんだよ、って矢印して書きたいんだが格好が悪いから、そういう飾りをつけた絵にするわけだ」

相槌を打って食いついてあげると、教授はことのほか喜んで、ますます饒舌になった。

「さて、鬼を封じ込めた溪谷は、そこでせき止められた川が沼になつて「鬼挟沼」となった。」

鬼挟の伝説は鬼退治もスマートでいいんだが、その後がもっと面白い。

キツネと呼ばれたこの行者は、鬼の沈んだ沼の水を使って、数々の奇跡を起こすんだ。

ヤツはこの水を、徳利に入れて持ち歩く。そして病氣の人に水を飲ませると、たちどころに治ってしまう。歩けない人の足に

この水をかけると、あら不思議

「万能薬ですか」

「鬼のダシ汁だ。効率的じゃないかね」

「ダシって」

身も蓋もない言い方に苦笑する。でもたしかに出汁と言った方がわかりやすい。

そこでハツちゃんが言葉を挟んだ。

「でも教授、昨年の資料を見る限り、あの沼の水はずいぶん汚いですよ。」

「そんな水飲んで大丈夫だったんですか？　今も、その何たら言う教団では、使ってるんでしょう？」

「ああ確かに綺麗な水じゃない。　だがね、それには理由がある。昨日来た資料だ」

教授は資料の山の中を探って、薄汚れた大学ノートを出し、ペーシをめくった。

そこには一枚のコピーが貼り付けてあった。

「昭和39年に環境庁が行った水質調査で、鬼挟沼の汚染が問題となった。」

で、鬼挟神社と近隣の住民に対して、こういう通知が出される。

“供物を水中に投ずる慣習を改めよ”と

「それまで、お供え物を沼に直接放り込んでたんですか？」

あたしはびっくりして聞いた。

「その通り」

「またどうして」

「そこが面白い」

教授はさも自慢そうに、シートの上でふんぞり返った。

「土地の者しか知らないことなんだがね。　この神社では『生け贄』の習慣が在ったらしい」

車内の空気がスーツと冷えた。

あたしだけでなく、ハツちゃんまで息を飲んだので、気圧が動いたのだ。

「つまり、家畜を生きたまま沼に沈めたのかしら？」

「生きたまま沈めるんだか、首をひねって殺してから沈めるんだかわからんが、生命を捧げるわけだ」

「原始的なんですねえ」

「もともと、稲荷神社だからな。稲荷と言うのは、民間宗教だ。仏教やキリスト教みたいに、系統立てて説かれた『教え』があるわけではない。土地によって、また時代によって変化する。」

昔は恐山のイタコのように、巫女が『口寄せ』をしたり、狩の獲物を神棚に乗せていたりした。殺生を嫌う仏教とは、根本的に違うんだ」

「でも昭和39年って言ったら、高度経済成長始まってましたよね。そんな時代になっても、生け贄の習慣が残ってたんですか」

「おおっぴらにはやらなかっただろうがね。祭りの時も、神棚には田畑の収穫物を積むだけだ、今と一緒だな。」

「けどな、人間ってのは、そうは言っても切羽詰ると、やるもんだろうが」

「例えば？」

「子供が事故で大怪我をする。病院で生死の境をさまよっていて、両親はつきつきりで病院だ。」

そうすると、ひとり家に残ってる婆ちゃんか誰かがさ。何もしてやれないもんだから思い余って、夜中に鶏の首ひねって、沼に走るわけだ」

「一世一代のお願いに上がるわけですね」

「苦しい時の神頼みだ。　そういう時は、近所の者が見かけても、見て見ぬふりをするそうだ」

あたしとハツちゃんはうーんとうなった。

なるほど、迷信と言われながらも、そうやって受け継がれていくものかも知れない。

「それって、効き目あったんですかねえ？」

曲がりくねった山道に苦勞してハンドルを切りながら、ハツちゃんと言う。

「それは確かめようがない。　もともと、人に言わないものなワケだから」と、教授。

「でも、効果があるから伝承されるんじゃないんですか？」と、あたし。

「うーん、たまたまってこともあるからな。　誰そのところは助かった、なんて噂が一つでもあると、苦し紛れに試してみる。

そうやって細々と伝承していくんだ。

ただな、この話にはおまげがある。　ここからが、ホラーで怖いんだ」

「なんですか？　そのおまげって」

あたしとハツちゃんが、素晴らしく素直に身を乗り出したので、教授は満足そうな顔をした。

「生け贄を捧げて祈願したことが神に聞き入れられると、捧げた生き物が戻ってくる、というのさ」

「戻って来る？　死んだ動物が沼から上がって来るんですか？」

「戻ると言っても、生き返るわけじゃない。　神の遣いとして、あの世から派遣されて来るんだ。

だから、戻った動物は、風呂に入れて丁重にもてなし、何でも

言つとおりにしてやる。

願いが叶うと、そいつは消えてしまうそうだ。

だからまあ、れっきとした使者、でなくて死者なわけだ」

「やだ！ 自分が殺した生き物の世話をするなんて、怖い！」

あたしがお約束の悲鳴を上げるのを、教授は気持ちよさそうに見て笑っていた。

その時、ふと思い出したことがある。

かよのさんの事だ。

かよのさんは、キツネの子だと言われて育てられたとウィズが言っていた。

そして今、彼女は教団の巫女役のような事をしているようだ。

（かよのさんって、戸部田津奈の生まれ変わりとか、そういう役どころなのかしら）

その時あたしが考えたのは、教団を運営するために、新田がそういう娘を探し出してきたのだろうと言う程度のことだった。

この考えが、実は常識的すぎてまるで甘い認識だったことを、のちにあたしは思い知ることになる。

宗教を甘く見てはいけないのだった。

## 19、孤仙の肖像

「わあ、すごい！」

車を降りて思わず、大声を出してしまった。

ガードレール越しに見える下界の展望が、吸い込まれそうにきれいだ。休憩と乗員移動のために車を停めた峠のそこは、多分絶景ポイントなのだろう。わざわざ道路を広げて停車スペースと簡易ベンチが設けられていた。

「見てウイズ、こんな山の中なのに、海がすごくよく見えるわ」

「これ、日本海だね」

ウイズが後ろから来て、ガードレールに手を付いた。目の遙か下の方に青白いきらめきが広がっていて、それが海だという事が信じられないくらい幻想的だ。

「日本海？　じゃあ、ウイズにはここから中国大陸も見える？」

「いや、それ方向関係ないから」

「あれ？」

「距離も関係ないしね」

あたしは頭を掻いた。理屈じゃわかっているけど、ウイズの頭の中は相変らず想像しにくいことだらけだ。

怜さんは車を路肩に止め、しばらく周囲をうろつろつしていた。

その後、こつちへ歩いてきて言った。

「コ口助の言うとおり、この上の鳥居が田神社だろうよ。書いてある字が消えて、何神社ってわかんねえけど、そのちょっと上のほうに沼があって、供え物が結構置いてあった」

「じゃあ教団も近くにあるはずよね。行って見ましょっよ」

「行くけどさあ」

怜さんは眉間にしわをよせて鼻を鳴らした。

「美久ちゃん、あれ見て大丈夫かな。ほんつとにきつたねー沼だぞ。あとでご入浴の段階になったら、気持ち悪くて入れないって言いだすんじゃないかな」

「そんなに汚いの」

「水はそこまで濁ってないけど、底の方に色んなゴミが沈殿してんだ。中にどうも骨らしき物も結構あるんだよ。供物の残骸なんだろうけどさ」

「行って見よう。供物に形が残ってるのなら、何かしゃべってくれるかもしれない」

ウイズが俄然元気になって、運転席に乗り込んだ。

供物がしゃべると言うのは、そこから残留思念を読むことが可能だという事なんだろう。

「教授とハツちゃんは市街の方へ降りて行ったけど、神社を見なくてよかったのかしら」

ウイズと距離を取るために助手席を怜さんに任せ、後部座席から魔術師の後ろ頭に話しかける。

「いいんだろ。まず頭の中を作ってから、現物が見たいって言うてたから」

「ハツちゃんは教授のわがままに慣れてるから、二人の方がいいのさ」

付け足して怜さんがクツクと笑った。

雑草だらけの石段を登って石の鳥居をくぐると、高く上った太陽が木漏れ日になって満ちていた。

それでも、木々で囲まれた境内は、うら寂しく寒々として見える。境内の入口に、石でできたキツネの像が2体ある。通常の神社なら狛犬が座ってる位置だ。雨ざらしになって色のさめた小ぶり

の幟に、「田能加実伊奈利神」と書かれている。

「稲荷じゃなくて、伊奈利なんだ」

あたしが驚いていると、ウイズがさらっと説明してくれた。

「うんと昔の表記だから、漢字は表音文字なんだって。

それでも『田能加実』たんぼにょくみのりきくわえりだから、かなり表意文字っぽいけどね」

「へえ、ウイズ詳しいね」

「小さい頃からあの字を見てたんだ。かのちゃんの部屋は神社の中ようだったから」

かのちゃんの部屋。

一瞬、あたしの頭の中は凍ってしまった。

ウイズは幼い頃、家の中に入れない子供だった。

それをあの魔女たちが、温めてあげるとか何とか言って引つ張り込んで楽しんでいたのだ。

かよのさんにも、変な趣向の物だったにせよ部屋はあったんだ。

だとしたらそこに入るために、ウイズは何かを要求されたんだろうか。

突然、ザーツと土砂降りの雨のような音がして、頭上から何かがいっぱい降って来た。

思わず悲鳴を上げて頭を庇う。視界が暗くなる！

花びら。木の葉。小枝。

「痛い、痛い、痛いッ」

風もないのに嵐のように降り注いで来る。目が開けていられない。

だのに木の枝が揺れている感じが少しもしなかった。

顔を庇った腕の隙間から、頭上の木立ちを伺うと、大枝の上に白い顔があった。

年齢のわかりにくい、何故か人目を引く女の人の顔。

かよのさんだ。　こつちを見る。

「あはははは、びつくりした？」

子供のように豪快に笑って、かよのさんがするすると地面に降りて来た。　その途端、木の葉の集中豪雨はぴたりと止んだ。

「難しい顔して入って来たからおかしかったよ」

言いながらかよのさんは、いきなりウイズの首に腕を巻きつけてにギユツとくつついた。

「こーちゃん、やっと会えたね！　来てくれると思ってたんだあ」  
密着されてウイズの顔が緊張する。　とつさにリアクションゼロになってるあたしの顔を、仰天した怜さんが覗き込む。

そんな顔して見ても、あたしだって何が何やらわかんないよ。

「びつくりしたって言う前に、ひどいよ、かのちゃん。　ほこりだらけになつたじゃない」

ウイズが文句を言うと、かよのさんはキヤタキヤタ笑いながら巻きつけた腕をほどいて、ウイズの頭と肩の埃を払った。

「もう。　きみ、ぜんっぜん子供ん時と変わってないんだからなあ」

「ごめんごめん。　ほらきれいになつたよ」

あたしたちの方もいい加減汚れてるんだけどね。　こつちは無視ですかい。

かよのさんが登っていたのは大きなクヌギの木で、見上げるとほとんど葉も枝も落ちてしまっていた。

でも、どう考えても揺すって振動させられるような小さい木ではないのだ。　一体どうやってあんなに大量の葉っぱを落とすことができたんだろう。

「神社を見たいんだけど」

ウイズが言うと、かよのさんは嬉しそうに、いいよと叫んで走り出した。まるで子供のように全力で走るので、白いデニムのスカートの中身が見えそうだ。

「こっちこっち」

荒い石の段を駆け上がり、彼女は社の建物にあたしたち（いや、多分ウイズだけのつもりだろう）を導いた。その姿は友達を家に案内する小学生のようだった。

社の中は、石の床がむき出しになっているだけで何も置いてなかった。入り口にしめ縄が下がり、賽銭箱が嚴重にくくりつけられているだけだ。

多分、祭りや新年の行事の時しか、社の中には入れないのだろう。あたしたちは賽銭箱に取りあえず硬貨を放り込んでお祈りをしようとした。

するとかよのさんはさつさと賽銭箱を乗り越えて、奥に入っていくではないか。しかもさらに予期に反してとんでもないことをした。社の閉ざされた扉の中に走り込んで、中から扉を開けてしまったのだ。

「あッ」

普通は神主さんしか開けられないはずの扉だと思うのに、いつも簡単に彼女はそこを開帳した。

そこには一枚の大きな絵があった。

木の板に直接凹凸を掘り込んで、そこに着色した古い画は、半分風化して崩れかけているせいもあって、ものすごく不気味な人物画だった。

その人物は和装の男性で、斜め左方向から見た全身が描かれている。

服装から見て奈良・平安の時代だろうか。ゆがんだ烏帽子の様な物を被り、袖の長い衣装の先で徳利を引っ提げている。そして、

衣装の裾のあたりから、長く豊かな尾が一本、垂れていた。

「これ、尻尾ね。 キツネの尻尾。 これが戸部多津奈なの？」  
よく見ると、頭の烏帽子の脇からも、長い毛の生えた耳が出ているように見える。 そう考えると、口のあたりにしわのように描かれているのは、髭なのかもしれない。

「田神社狐仙画、つて書いてあるぜ」  
怜さんが、下の方に紙で添えられた書付を発見して読む。

「狐仙？ キツネの仙人なの？」

「それがつまりお使い狐の事じゃないのかな」と、ウイズ。

「ええ？ 多津奈はお使いじゃなくて行者でしょ？ 尻尾が書いてあるのは宗教上の貴人を指すからだつて、教授が言つてたわよ」

「でも狐仙つて、神通力のあるキツネの事だぜ」と、怜さん。

「ああもう、教授と来なきやわかんないわよ」

3人でわいわいやつていたら、かよのさんはすーっと社から出てどこかへ歩いて行ってしまった。

「かのちゃん！ 待つて。扉を閉めてくれないと」

ウイズがあわてて追いかけて行った。

沼へ上る道は、社の右手奥にあった。

けもの道のように細く、丈の高い草が両脇を覆っていたが、路面は小石を除いてきれいに普請がしてあった。そこを2分も歩くと、沼地に到着した。

雑木林の中にぼっかり空いたような平らな土地に、あまり大きくない沼が横たわっている。

沼は緩い楕円形で、周囲をぐるりと縄で囲んであった。池のふちにはクサヨシなんかの雑草が生えてはいたが、定期的に手入れされているようで、うっそうとした感じはしなかった。怜さんが汚い汚いと言つので覚悟をしていたのに、いっそ清潔な気がして拍子

抜けた。

「見ろよ、あそこに無粋なものがあるぜ」

怜さんが、沼のふちに立っている立て看板のようなブリキの板を指さした。

“沼の中に供物などを投じてはいけません。環境庁”

よく見ると、その看板の下に、腐った果物や油揚げなどの供え物の山が出来ている。

「だからって置いて帰るなよって感じね」

「せめぎ合ってたんなあ、信者と役所」

あたしと怜さんがくすくす笑っている時、ウイズは少し離れたところで沼の水を凝視していた。

そしていきなり、くるりと回れ右をして社の方へ降りて行ってしまった。

「あれ？ おーい、コロ助来ないのか？」

「ウイズ？」

急いで後を追って行くと、ウイズは社の石段に座り込んでいた。顔色が悪い。

「なに？ ウイズどうしたの？」

「あそこ、僕だめだ。あれ以上近づけないや」

「どうして？」

「残留思念がものすごくて。体が重くて進めなくなっちゃった」

「どんな思念？」

「……欲だ」

夢のように整った顔に、嫌悪感のベールが何重にも降りて来ていた。

## 20、ご入浴場潜入ルポ

鬼挟沼から車で2分も進まないうちに、尾根の一角に教団本部らしき建物が見えて来た。

あきれするようなデザインの建物だった。洋風の美術館に、金色の勾玉が散りばめられた大屋根を乗っけてある。その勾玉の積みようがただ事ではなく、横倒しになった100本くらいの巨大なガマの穂を連想させて、有難いのか滑稽なのかわからない。

「ご利益があるうがなかるうが、このセンスは許せねーな！」  
怜さんがワケもなく憤慨した。

取材陣が入り込んでいたら厄介だと思って、ウイズに記者除けの変装をさせようと思ったんだけど、結局うまくいかなかった。

もともと飾り立てることの嫌いな魔術師の印象を変えるために、今の服装に少しでも加えると、今よりも目立ってしまう。バンドナとサングラスを付けた時なんか、まるっきり芸能人に見えた。

「ウイズって、普段が実は一番地味だったのね」  
あたしは感心してうなづいた。

仕方なく、怜さんの持っていた眼鏡（ほんのちょっと近視らしい）を借りてかけさせ、髪の毛を思いっきりひっ詰めて、後ろでくっただけにした。

「変装とは言えないな」  
魔術師本人が感想を述べた。あたしもそう思うけど、限界なんだ。例えば女装させたって、モデルみたいになって目立つに決まってる。

「記者らしい人間は見当たらないぜ」

先に行つて様子を見て来た怜さんがそう報告した。

「受付で、魁のおっさんに会いたいつて言つたら、今は講話の間なのでホールにどうぞつてさ。」

記帳が必要とは言われたが、まあ出入りはかなり自由な感じだな

「行つてみるか？ キシン教授が、講和は結構面白いつて言つてたよ」

ウイズがちよつと興味ありげな様子で言つた。

「地元の学生にこつそり録音させたのを聞いたんだつてさ。」

『大したことは喋つておらんのに、深遠な事実を語つてでもおるかのごとく聞こえる。 あれはなかなかいい』つて言つてた」

「ウイズ、それすごくくだらないつて意味じゃないの？」

「いや、新田にヤマつけがあるつて言つてんのさ。面白いじゃないか、ぜひ聞いて行こう」

さすがのおつとり魔術師にも、詐欺師呼ばわりされた恨みは少なからず残つているらしい。

入り口で簡単に記名させられたあと、講話の行われているホールに案内してもらつた。

小学校の体育館の半分くらいの広さの部屋に並んだ座席には、3分の2くらい人が入っている。大盛況とは言えなくても、平日の昼間で特別な集会の日でもなんでもない、ましてやこんな山の中でという事を考慮すると、決して少ない人数ではないと思つた。

すでに始まつている講話の邪魔をしないように、そつと一番後ろの席に座つた。

聴講者のほとんどが、ジャージや浴衣を着ている。 ご入浴に来

て宿泊する人も多いらしいから、そういう服装になるのだろう。

「人を憎むと、自分も幸せになれません」

会場に敵かに広がるのは、テレビで皆さん聞いたあのいやったらしいオニバサリ新田の声だ。

彼は、低めに作られた演壇に立って、人々の顔を見渡した。服装は、涼しげな浴衣姿だ。

「はい今、うんうんとうなずかれましたね、奥さん。

では、何故、憎むと幸せになれないかわかりますか？

あ、聞いてみていいですかね、奥さん」

新田はマイクを手にして一跨ぎに演壇を降りた。

最前列に座った70歳くらいの婦人が、あらあ、と照れて笑う。

「はあ、はあ。嫌な気持ち。

不愉快、そうですね。なるほど。

つまりこうですね。人を憎むという感情は、不快感につながる感情だから、と。

四六時中、不快な思いを抱き続けていたら、幸せにはなれるはずがない、と。

わかりやすいご説明ありがとうございます」

オニバサリはうなずきながら、演台に戻って来て続けた。

「黒い感情に身を任せていると、その場でその人は不幸です。

これは当たってますね。

はい、しかもそのまま行くともっと問題は深刻になって行く、ということがある。これからその話をいたします。

よく言う人がいますよね。『私の人生、いいことなんて一つ

もなかった』みたいなこと。不満ばかり言い募る人、よくいます。自分の不幸だけじゃなくて、人の態度もなんかかかかと気に入らない人なんですね、何を見ても腹が立つし自分が嫌な目に会っていると感じる、そういう人。

『人生いいことなんか一つもない』 この台詞はね、人を恨んでる人独特の台詞なんですよ」

ここで一度、言葉を切つて、オニバサリは会場を見渡した。

一瞬、その目がウイズに向けられ、しばらく静止したような気がした。

「いいことが一つもない人生なんて、ホントにあると思いますか？  
ちよつと手を挙げてみてくださいよ。先生や親に、よく出来ましたと一度も言われたことのない人？

道で100円拾った事のない人？

歯が生えて、背が伸びて、大きくなったことのない人？

散髪したり、風呂に入ったりして、すっきりしたことのない人？

何日も続いた便秘が治ったことのない人？」

会場にざわざわと、笑いの波が広がった。

「いや、笑いますけどね、皆さん。これは小さいけど、人が幸せになる瞬間ですよ。

こういうことで幸せを感じることが出来ない人は、ではいつ幸せになれるかというと。

例えば、億万長者になった瞬間です。

有名大学に合格したり、ミスコンテストに優勝したりした日です。

プロ野球でMVP取ったり、紅白に出場したり、そういう時です。あり得ないほど大きな夢がかなった瞬間だ。それも自分で

外の人にも分かる形の幸せじゃないとダメなんですよ。

でなければ、憎い相手を、包丁でメッタ刺しにしている瞬間くらいしかないでしょう」

シン、と会場が静まり返った。

「人を憎むと、そいつに自分のしたことを思い知らせてやりたいと思うでしょう？」

お前があんなことをしたから私はこんなに不幸になったんだぞって。

実際の不幸よりもね、相手に見せつけるための不幸を、常に必要としている人間が出来上がる。

いや、そんなことはない、私はいつより幸せになって見返してやるんだ、と思う人だっていますよ。

でもそんな人が求める幸せは、今日便秘が治ったから嬉しい、なんてものじゃダメでしょう？ 憎いあいつが悔しい思いをするくらいのも、でかい幸せじゃないとダメだ。

自分の幸せをね、誰かに見せ付けるものだと思定した人は、でかい幸せしか幸せと感じなくなる。

憎い相手に見せ付けてやりたい。そう思った途端、小さな幸せはカウントされなくなっちゃうんですねえ。

実際の幸せは自分のためだけにあるもんです。でも人を憎むことによって、相手に突きつけるためのものが必要になる。大きすぎる幸せを夢見て、現実に打ちのめされてばかりいる人間がここに完成するわけです」

なるほど、面白い話ではあった。居並ぶ聴講者も感心して聞き入っている。

だからと言って、これが何かの足しになるかと言うと、ちょっと

首を傾げたくなるだろう。結局、どうすれば人を憎まずに済むか、もし憎んでしまったらどうやって幸せになればいいのか、そのあたりを語ってくれないと実際の救いにはならないわけだから。

その時、前方左側のドアが、小さく開いた。

そこから小柄な人影が滑り込んで来た。

かよのさんだ。

講話中にも関わらず、演壇側のドアから侵入したかよのさんは、さっきのワンピース姿のまま、かなり埃っぽい格好だった。

彼女はわけもなくニコニコ笑いながらあたりを見回した。その姿は、まるで子供のように、体を取り違えた小学生を見ているんじゃないかと言う気がした。

でも、会場の中では、明らかに歓喜のざわめきが広がっていた。

「みせんさま」

「みせんさまがいらっしやっただ。まあ、いつもお幸せそうだからと」

「今日はついてますよ。」

「ここは通路に近いから、あとでお声をかけて頂けるかも知れません」

「ありがたい、これで今日は楽に寝られます」

すぐ前に座っていた老人が、手を合わせてかよのさんを拝んだ。

かよのさんは笑ってそれに応え、演台の脇にあるパイプチェアに静かに座った。

講話が終ると、観衆は一斉に立ち上がった。

拍手のためかと思っただら、違った。

「みせんさまあ」

「みせんさま、手を」

「手を握ってください」

「私の足を触って」

「ああ、ありがとうございます」

かよのさんが立ち上がって通路を歩き始めると、みんなが必死で手を伸ばして、触ってもらおうとする。

彼女はそのひとりひとりと手を握り、瞳を覗き込む。短いが親しげに言葉をかける。

足や腰をさすってやる。

新田がその横に立って、一緒になって相手の背中を撫でてやった言葉を掛けたりした。

それだけで、信者たちは涙を流して喜んだ。

ついていけねえ、というふうに、怜さんが肩をすくめた。

「こーちゃん」

信者の列が途切れるのを待って、かよのさんが駆け寄って来た。

「いらっしやい！今日は美久がお風呂入るんだよね！」

さつきは無視されたが、今回はあたしの事も目に入ったらしかった。

「うん。一度来てみたかった」

「こつちで申し込みするんだよ。あ、ミスモリさん！こーちゃんが出来たよ」

浴衣姿の新田、つまり鬼挟。魁は、尊大な様子でゆっくり歩いて来て、ウィズの顔を見ながら太い笑みを浮かべた。

「おお、これは如月さんじゃないですか、いらっしやい。」

「この間はお世話になりましたねえ」

わざわざこの前の事を挨拶にさしはさむ厭らしさに、思わず一発入れたくなる。それでも「このペテン師め」と勝ち馬に乗って罵らないのは、信者さんたちの前で立派な教祖の仮面を脱ぎたくないからに違いない。

見ている本気で腹が立って来そうだったので、さっさとご入浴に行ってしまうことにした。

受付に申込用紙を出すと、タオルとお線香（宗教じゃないって言うたくせに）と一緒に、ボトル一杯のお水を渡された。驚いたことに、たったのそれだけで1万6千円も請求された。

あたしの代わりに、ウイズがお金を払うのを見て、新田が満足げに口元をほころばせた。

この先、ウイズが相続した遺産全部を、こつやつて徐々に吸い取るうたとくらんでいるとしたら、随分気の長い話だ。

怜さんが、ボトルからこつそりサンプルとして試験用の容器に水を抜き取る間、あたしとウイズは新田とかよのさんにおべんちゃらを言いながら建物の説明なんかを聞いていた。

さて。噂のご入浴はあたしひとりの潜入ルポになる。

「行って来るね」

元気に手を振って見せながら、ウイズの顔色がまだあまりよくないのでちよつと気になった。

ウイズの仕事は、これからロビーのソファでうたた寝をすることだ。

その閉じた瞳の裏で、できるだけの情報を「見て」「帰ってもらおう」という作戦だった。

## 21、魔術師をブロックする

脱衣場の横にスタッフルームがあった。

あたしが「入浴をお願いします」と声をかけると、女性が入り口で事細かに説明してくれた。

入浴と言うから、体を洗うのだと思っていたら、微妙に違った。水に触れるのが真の目的なので、体を洗めるだけなのだ。

普通の浴場はないから、先にシャワーで体を洗って欲しいと言われた。うーん、変な感じ。

体を洗ってから、浴場に入った。

説明を受けた通り、入り口の仏像に線香をあげて手を合わせる。

素っ裸でやるので、ヘンと言うより仏様に失礼じゃないのかと言う気もする。自分で下を向いて笑いながら祈った。

浴場の正面を見ると、あきれたことにそちらには神棚がある。

ここはなんでもありなのか。

その横には、「戸部多津奈像」と、わざわざ説明つきで書かれた像も置かれている。

「宗教がごちゃ混ぜですけど」

思わず、案内してくれたスタッフの女性に言うと、彼女はちょっと困ったように、

「そうですね、見た目ちょっと変ですよね」と言った。

「でも、ここはお祈りする場ではなくて、気持ちがよくなるために来る場所なんです。

ですから、ご要望が多かったものは置かせて頂いてるんです。

そのほうが、苦痛が軽くなるとおっしゃる方が多いものだけですけど」

なるほど。ここで宗教を推奨する意思はないっていうわけなのだ。

「ちよつとお、邪魔だね！ 入らないんだつたらどいてよ、先に行くよ」

不意に、後ろから肩を小突かれた。

振り向くと、髪を黄色に染めた素っ裸のオバサンが仁王立ちになっている。

下腹のふくらみ具合は妊婦さんかと思うんだけど、それにしてもちよつと歳がいきすぎているような気もする。

「すみません、お先にどうぞ」

あたしは大人しく順を譲った。他の人がやるのを真似たほうが良さそうな気がしていたからだ。

オバサンは、まずボトルの水をドボドボと水槽に空けた。

プールで足を洗う水槽とたいして変わらないくらいの、狭い水槽が3つ並んでいる。

その一つに足から入って、オバサンはゆっくり座った。

なるほど、ひとり分の水を足すのか。

感心して見ていると、

「なんなのさ、この子は人のことジロジロ、ジロジロ」  
文句を言われて、その時になって気付いた。

このオバサンには会ったことがある。そう、確か教会の告別式に来ていた、魔女のひとりだ。

ウィズに、エイズが気になるなら避妊しろと言われていたモアイ像みたいな女。

なにしろ化粧が落ちていてわからなかったのだ。

「あれえ？ そっぴい見たことがある子だね」

むこうもあたしの顔をまじまじと見て、気付いたようだった。

「コロの彼女だ、そうだろ？ あの子も一緒かい？」

あたしがうなずくと、

「変なところでデートだねえ？」

あーあー、そっぴいやテレビでさんざん騒がれてたよねえ。

それで偵察に来たってわけかね？ やれやれ、ご苦労さんだ」

言いながら、あたしの体を上から下まで吟味するみたいに視線でなめた。

「案外遊んでないカラダつきだねえ。

ここで小遣い稼ぐって感じでもないし。

コロはともかくあんたは、物見遊山に来るほど暇なのかね」

余計なお世話だと思って黙っていた。

でも、「小遣い稼ぐ」って？

ここでお金もつけできるのは、オニバサリくらいじゃないの？

ウィズはともかく、あたしが何のお金儲けするんだろ。

水の感触は格別だった。

さらりとしているのに、心地よく体に吸い付いて来る。

確かに冷水なんだけど、体温を奪われる気が全然しない。

体の上を滑って行く水の優しさに気を取られているうちに、胃の奥のじくじくした不快感が嘘のように消えていた。

やっぱりこの水は本物だ。

あたしはこっさりサンプリングした水の小瓶を、服を着る時にとポケットに滑り込ませる。

水の効果は確かにある。

新田のやっつてゐることは相当嘘くさいのだけど、それとこれとは別だ。

それだけに、怜さんの言ったように「怪しい水」ではないかどうか調べる必要があるだろう。

水の中にモルヒネ張りの鎮痛剤を投入しているとか、あの新田ならやりかねない気がする。

ただし、実際に人体に危険な物だったら、ウイズはあたしに体験なんてさせないだろう。「悪魔の水」と言いながら、入浴してくれと頼んで来たことは、水そのものが悪魔なのではなく、水を取り巻く人やシステムが「悪魔的」だということなんだろうか。

つまり悪魔的なのは、この水を手に入れるため、または販売するためにやっている「行為」だ。

すっかり吐き気が無くなってしまつと、あたしは猛烈にウイズに会いたくなつた。

だつてずーっと我慢してたんだ。触るのも近付くのも、時には隣に立つことさえ。

水の効果はすぐに薄れてしまはずだ。今のうちにハグハグしまくつて、しばらく分の充電をしておきたい！ サンプル取って目的も果たしたことだし。

踊る足取りで、あたしはウイズの待つ階段の踊り場に向かった。

この建物内には、入浴に来た人がくつろぐための休憩室もあるし、ロビーには大きなソファもある。

入浴者を迎えに来た人のための待合室も設置されているんだけど、

ウイズはそこには行きたがらなかった。

「そんなとこじゃ何も見えない」

つまり、落ち着いて集中できないから嫌だと言って、人けのない階段の踊り場に、お座なりに置かれたソファの上で陣を張ってしまった。

わずか3階建ての建物にしては立派なエレベーターが2機もあるので、階段の利用者は少ないらしく、ソファは埃っぽくて不潔な物だったが、うちの魔術師はそういうことが一切気にならない男だ。

階段を登るあたしの足が、突然止まった。

ロビーで買って来たお茶のペットボトルを、あやうく取り落としそうになる。

ウイズは、自分とあたしの荷物を入れた小ぶりのビニールバッグを枕にして、ソファに斜め掛けになって眠っていた。

そしてそのソファの前に、白い服を来た女の人が立って、ウイズの顔の上にかがみ込んでいたのだ。

「……かよのさん」

思わず声が出てしまった。

白いワンピースの背中がゆっくり起き上がり、肩ごしに彼女は振り向いた。

ウイズの顔に覆いかぶさっていた体を起こし、髪の毛を掻き上げて薄く微笑む。

「美久。終わった？」

その顔を見た途端、あたしは初めてこの人を「気味が悪い」と思った。

表情が無邪気過ぎる。

人の恋人にちよっかい出して、それを目撃されたんでしょう？  
それでこの顔ってありえない。

子供っぽいのに、なぜか妖艶なその表情は、あまりにこの状況とミスマッチで、むしろ口元から血のしずくでも垂らしていた方が似合いそうな気がした。

「こーちゃん、変な寝方してたから直してあげたよ」

かよのさんはそう言いながら、さつさと立ち去ろうとした。

(うそ！ キスしてたでしょ！！)

こっちは声には出さなかったけど、どうやら顔には出たみたい。ホントの事だよ、と、小さな声でかよのさんが言った。

「こーちゃんは夢を見てた。」

見ちゃいけない夢だったから、かのが直してあげたの」

夢を直した？

それはつまり、ウイズの潜入をこの女が止めたってことでは？  
そんなことが、できるの？

「もうその夢は見ないでねって、こーちゃんに言っというて。」

ミスモリさんが怒り出したら、かのはこーちゃんを……しなき  
やいけなくなる」

背筋を冷水が流れたように感じた。

何をしなきやいけないかはわからなかった。かよのさんはわざと  
とその部分を、低い声でしゃべったのだ。それが却って不気味で、  
あたしは床に座り込みそうになりながら、声もなく彼女を見送った。

## 22、田神沼への捧げもの

「初めてじゃないのか、お前がブロックされたのって」

まだ眠気が振り払えない表情のウイズに、怜さんが真顔で尋ねた。ふもとの町に降りて入った料亭の、大きな紫檀の食卓の上だ。

あたしたちはそこで、キシシ教授とハツちゃんを待つことになっていった。

「かのちゃんのこととは昔から読めないよ」

ウイズは頭痛がするらしく、こめかみを指で押さえながら、水を一息にあおった。

「彼女はああいう性格だから、いろんなことをイメージしないで動いてるせいで読めないんだと思ってたけど、そうか、あの子は僕を遮断できるんだ……」

魔術師、少なからずショックを受けている。

「それにしても眠ったりする必要があったの？」

あたしは聞いてみた。ウイズが『見る』気になれば、起きてる状態で、その場で視力を解放できるはずだ。

「いや、初めは起きて『見て』たんだよ。そしたら途中で、かのちゃんが階段を上って来て。

うん……何してるの、とか聞かれた気がするけど……そのあと覚えてないや」

「で、気が付いたら眠ってたらしい、みたいなの？」

「そうそう」

「あたしのときもそう。なんだか一生懸命話してる時に判らなくなってる感じなんだよね」

ということは、ウイズの見る力より、かよのさんの隠す力の方が

強いつてことになる。

彼女の方が能力が上、だったりするのかしら。怖くてウィズには聞けないけど。

「なら、戦利品はこれだけってことか」

怜さんが、卓に置いた白いハンカチの上に、3本のサンプル容器を並べた。

白い布の上に並べたサンプル容器には、水がほぼいっぱいに入っているが、それぞれ微妙に色が違う。

一番左が黒ずんでいて、真ん中のが無色透明、右端はちょっと黄色っぽく見える。

「左は例の沼の水。真ん中はボトルに入っていた水。」

右端は、美久ちゃんが取って来てくれた、入浴場の水槽に入っていた水だ」

そうやって見比べると、一番汚れているのはやはり沼の水のように感じる。よく見ると、木の葉のかすの様な物も沈殿しているようだ。

「不純物の量は確かに沼の水が一番多いようだけど、こうしてみると」

怜さんは、羽織っていた黒いウィンドブレーカーを脱ぎ、ハンカチの上に重ねた。そうして、その上にサンプルの3本を移動させた。

「水槽の水、えらく白濁してるのがわかるかい」

「あ。ほんとだ」

右端のサンプルは、黒い布の上だと白く濁って見えた。

ご入浴の時は、浴槽のタブが真っ白だったからわからなかったのだ。まず意図的にそういう色のタブにしていると思って間違いな

いだろう。

「ボトルの水が一番きれいな。水道のお水と変わらない色」  
あたしが言うと、ウィズは目を閉じて小さく笑った。何か見え  
たらしい。

「そいつね、市販の水のラベルはがしたただだよ」

「えええ？ そんなんで1万なんぼも取ったらぼったくりじゃないの？」

「詐欺で訴えてやるか？」

怜さんが言ったけど、あたしは首を振った。

さつき入浴の時に、チケットの様な物を渡され、今日中に入浴するなら何度入っても無料と言われたのだ。

講演会がない時間は、さつきのホールで、大したものじゃないけど映画をやってますのでご自由に、とも言われた。

という事は、1万6千円と言うのはボトルだけの値段じゃなくてこの施設の1日分の利用料ということになり、講演会を聞いたり映画を見たり、シャワーを浴びたり食事（これは別料金だったが）をししたりしてくつろぐ、という形のないサービス料の金額という事になる。

それがぼったくりであるかどうかという事になると、ちょっと判断がつけにくいだろう。

その時、仲居さんに案内されて、キシシ教授とハツちゃんが意気揚々と入って来た。

「教授、遅いですよ」

抗議する怜さんの膝の上に、教授はわざとらしく次々と書類を積み上げる。

「待たせて悪いねえ。この通り、大収穫でなかなか解放されな

かつたんでねえ」

「ななんですこの量は！」

「図書館にも郷土資料館にも行って見たんだが、多津奈の名前があるものはほとんど発見できなかった。ところが最後に行った歴史資料館つてところで、島根大学の郷土研究部つて部活の学生と知り合つてな。随分面白い話を聞かせて貰つて、ついでに連中の研究資料をコピーさせてもらったのさ」

「多津奈についてですか？」

「いや。田神沼のいけにえ伝説についてさ」

「ごきげんのキシシ教授は、全員にビールやジュースを一杯ずつおごつてくれた。」

「郷土研究部の学生に、乾杯！」

ワケのわからない音頭を取られ、ひきつった表情でみんなが乾杯した。

「教授、ご機嫌のわけを見せてくださいよ。」

これ、なんの資料ですか？ 『伝承の実態』つて、わ。堅いな  
怜さんが、膝の上に積まれてしまった資料をほくしながら、ひとつずつ目を通す。

「あ！ 戸部多津奈の呪法入門書があるぞ！」

横から覗き込んだウィズが、子供みたいに喜んだ。

「なんだそれ、修行の仕方でも載ってるのか？」

「いや、ノウハウみたい」

「呪術の？ もっと凄じじゃないか！」

おいおいおい、と教授が割つて入った。

「君ら、だまされるな。それは学生がこしらえた『こつだったかも』的な仮説だ。」

大学祭用に面白おかしい視点で書いてある物もあるからな。

全体に戸部多津奈物は信用せん方がいい。もともとあれだけ資料が少ないんだから」

そんな中で、教授のおすすめ資料は、何年もかかって先輩から後輩に受け継がれながら、田神社周辺の住人に聞き込みをした「沼のいけにえ伝説の伝承」という資料だった。

それに書かれているのは、おじいちゃんやおばあちゃんに昔聞いた、沼にいけにえを沈める話の数々だった。

「文献に書かれたものはどうしても郷土宣伝になりがちだが、こっちは素朴なもんだ。

私が小さい頃、おばあちゃんが、『戦時中、小さい弟が病気で亡くなるのを止めようとして鶏を絞めた』と言ってました、とかな」

覗き込んで読んでみると、本当に聞き込みをして、その口調のまま書き残したらしい資料がたくさんあった。大半は跡取り息子や家長が亡くなるのを止めようとして家畜を沼に捧げた話だったが、中には自分の飼っていた猫が死にかけて、家族に内緒でコオロギを大量にとらえて捧げたが、結局猫は死んでしまって、父親にこっぴどく怒られた、などと言う話もある。

どうやら、一世一代のお願いとか言いながら、意外に何度も試されているものようだ。

しかも、結構ハズレを引いている。

「これって、ききめがあった例が案外少ないですね」  
怜さんが言った。

「こんなに失敗があるのに、嘘っぱちだった、って話にはならないんですかね」

「君は信仰というものの根深さがわかっておらん」  
キシン教授は馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「君らだって毎年、初詣に行つてその年の祈願をするだろう。  
で、その年の夏に病気になつたり失業したりしたら、なんだ、  
初詣したのに効果ないじゃないか、と言つて、翌年からお参りをや  
めるかね」

「……いや、多分やめないですね。」

「どころか、病気したならますますお祈りに行くかもしれないな」  
「そういうものだ。祈りと結果は別物で、祈る対象は常に必要  
とされておるのさ」

教授はしたり顔でそう締めくくり、鞆の中から別に取つてあつた  
資料の束をおもむろに取り出した。

「さあ、オードブルはそこまで。」

今日のメインディッシュはこれだ」

教授が示す書類は、パソコンで打つた3枚つづりの書類。  
主に短文がびっしり書いてある。

\*\*\*\*\*

### 《禁忌の伝承》 生け贄について

オニバサリ沼の生け贄伝説の聞き込み調査（P8から19）の過  
程で、伝承者の口から語られた「祟り」の内容について、ここに記  
載しておく。

生け贄に選ぶとよくないことが起こると言われている生き物が多

数ある。

どういけないかも、伝わっている家ごとでまちまちである。  
以下はその口伝を列挙したものである。

尚、伝承者はひとりが何個も語っている場合があり、( )内は延べ人数である。

《生け贄に選んではいけない生き物について》

犬や猫を捧げてはいけない(3)

猫は崇らないが効き目はない。犬を捧げたら崇る(1)

豚を捧げると神の怒りを買う(1)

虫を捧げても、願いは叶わない(4)

ネズミを捧げると、子供が死ぬ(2)

鶏を捧げると、捧げたものが目を患う(1)

牛を捧げると田が枯れる(2)

牛は効き目がない(1)

小鳥を捧げると、崇る(4)

ヤギを捧げると、年寄りが寝付く(2)

馬を捧げると、病がひどくなる(1)

馬は沼を汚すから、捧げない方がいい(1)

狐を捧げるのはもつてのほか(16)

狸やかわうそを捧げると、家が絶える(1)

狸は沼に入れても死ぬことがないので、生け贄に不適切(1)

狸を捧げると貧しくなる(2)

かわうそは、沼の力に敵対するので、絶対に捧げてはいけない

(2)

魚は捧げてても聞き入れられない(3)

魚は捧げると家長が死ぬ(1)

\*\*\*\*\*

「これ、結局どうしろっていうんだよ！」

怜さんがぼやいた。

「何を捧げたらいいってんだ？ キリンか？ コアラか？」

「効く効くと言い伝えながら、一方でこれか」と、ウイズ。

「結局、効かない時の言い訳なんじゃないの？」と、あたし。

「でも待てよ。」

これだけの動物を、みんなが試して統計を取った拳句、言い伝えてると思うか？」

玲さんが腕を組み替えた。

「牛や馬やヤギを投げ込んだヤツがさ。」

「やっぱり効かなかった、家が絶えちまった、オマエはやめとけ！ って言い伝えるのか？」

「それできゃ、投げ込んだ途端に、誰かに打ち明けてないと。」

「普通は、何を生け贄にしたかなんか、触れ回らないモンなんだろ？ 伝わるか？ こんなにいっぱい」

教授が満足そうににやにやした。

「つまり君たちの意見は、これは脅しまたは戒めのために、事実とは無関係に言われてきたことだ、と」

「違うんですか？」と、怜さん。

「こつちが質問してるんだ」

「教授は質問じゃなく説明する立場でしょうが！」

「そんなことをしたら、キミらは一生、頭を使わんだろ」

涼しい顔で失礼な事を言って、教授はビールを咽喉に流し込んだ。

「仮にその仮説が正しいと仮定して、キミらに聞きたい。何を戒めるためだろう？」

何を、何故、やめさせたかったんだ？」

「生け贄の習慣そのものじゃないんですか？」

あたしは言ってみた。

「文化的じゃないし、不潔だし。」

それに、農家で馬や牛を犠牲にしたら、きっと困ったと思うわ」

「それは一理ある」

教授がうなずいた。

「家族の誰かが、鶏を捧げようとする。」

「ここら、そんなことをしたら目がつぶれるよ、と、家長がたしなめる。」

「そういう図式でできた言い伝えだということだろう？」

「はい」

「ありえることだ。」

しかし、だとしたら何故これほど、動物の種類にこだわるんだろっな？」

あたしとウイズは、顔を見合わせた。

怜さんが、書類のページをめくって読み返す。

「犬だめ。 鳥だめ。 猫だめ。 馬だめ」

「その調子で行けば、満月の夜はだめとか、農繁期はだめとか。

病気の祈願はだめとか、女がやつちゃだめとか、いくらでも出て来そうだ。

でも、そういうったものはないんだよ。

ただやめさせたいだけなら、ここまで動物に偏った理由がわか

らないんだ」

「そういえばそうだ、これだけ言ってるのに、捧げ物の種類だけだ」

怜さんの横で、ウイズがふと目を輝かせた。

「理由はわかるよ。でもその理由が当たってるとしたら、生贄は、劇的に効き目があるんじゃないとおかしいんだ」

みんなは一樣に悪い予感がして、魔術師の顔を凝視した。

「沼に生け贄を捧げると、必ず効果があるんだ。

どんな時期に、誰が捧げても、必ず願いが叶うわけ。

ただし、効き目がある生け贄は、たった一種類だけ」

「ここに書いてないもの？」

「そう、あるじゃないか、書いてない生き物が。

それを捧げなさいとは、とても言えないただひとつのものが！」

「まさか」

みんながシーンとなって、ごくりと唾を飲んだ。

「そう。人間さ」

## 22、田神沼への捧げもの（後書き）

今回は一息に読んでほしい個所だったので、少々文字数多めです。  
軽くホラー仕立てにはなってますが、堅い話の苦手な方はごめんなさいです。

### 23、彼女が狐仙になった理由

捧げものは、人に限る。

なるほどそれが本当だとすれば、必ず、劇的に効果があるのでなければ、誰も実行はしないだろう。

キシシ教授が満足そうにうなずいた。 どうやら意図した通りの結論だったようだ。

「昔はね、人柱という慣習があった。 人柱ってやつはね。

洪水や干ばつに悩む地域で、領主が命じて人命を犠牲にする。

人柱に選ばれた民間人は、全体のために覚悟の上で身を犠牲にするんだ。

そういうことを、家族単位でやっていたという可能性は充分あると思わんか」

「家族の生活を助けるために、家族を犠牲にするんですか？」

あたしが聞くと、教授は割り箸をもてあそびながらうなずいた。

「そうさ、当時としては珍しい考え方じゃない。 家族って言うのは生活のための貴重な労働力だ。

働けない家族は、わずかな食料を食いつぶすだけのゴクツブシだ。

棄老伝説つてのがあるだろう。 俗にいう姥捨て山の話だ。

歳とって働けなくなったら捨てられる。

子供については、間引きという慣習があった。

一家でいららない人間というのが、本当はあってはいけないんだが、実はあったわけだ。

そういう時代の慣習だからね」

「そうか、口減らしの一面もあるな」  
「怜さんが渋い顔をした。」

「きつと、人道上問題があるので、時代の流れと共に家畜を捧げる習慣に変わって行ったんだ」

「でもそれじゃだめなんだろう？」

ウイズが言った。

「供物のランクダウンは本当は許されない。人間を捧げないと、効かないわけだ。」

それで、こんな持って回った言い回しがいっぱい伝わったんだ」

「ちよつと待って。それじゃ、願いが聞き届けられたらどうなるの？」

殺した家族が、沼から上がって来てしまうの？」

あたしは背筋が寒くなり、その場で身震いした。

殺した家族が、死体のままで戻ってくる。その死体を、一家でもてなすというのが。

「だから、本当に本当に一世一代のことじゃないと、あの沼にお願いなんぞしちやいかんわけだ。」

そして死人を世話する恐怖と罪悪感を乗り越えて、ようやく願いがかなった後は、堅く口をつぐんで話さない。相当ハードな願いじゃないと、やる価値はないぞ」

「伝説……よね？」

「さあな」

わざと怖い言い方をして、キシシ教授はカラカラと笑った。その笑いを、ウイズが凍りつかせた。

「伝説じゃない」

驚いて一同が魔術師を見やると、彼はテーブルの上で握りしめた両手を見つめて、静かに体を震わせていた。

「あの教団にとってはその伝説じゃあないんだ。

あそこの施設には、広い地下室がある。僕にはそれがわかる。でも、何故か地下に通じる階段の様な物はないだろう？

だからきつと、人目に触れては困る仕掛けがあるものだと思う。あの階段の踊り場で下の方を見ようと探ってたんだ。僕の「目」は、基本的に距離や方向に縛られないけど、物音や匂いが届くと鮮明になるからね。

そうしたら、かのちゃんがやって来て、急に何もかも見えなくしてしまった。

そうやっていつも彼女は、僕の目から大事なことを隠してしま

う。

それができるのは、それこそが新田の望みだからなんだ」

ウイズは言葉を切って、あたしたちの顔を見渡した。

全員が次の言葉を待っていたのだが、魔術師はどうやら驚いて欲しかったみたいだ。

「わからない？」

あたしたちはフルフル首を振った。

「新田の家には、殺されて戻って来た子供がいるんだってこと」

「誰のことを言ってるの！！」

あたしは叫んだ。そうだ、確かにウイズはそう言っていた。

かよのさんは、稲荷神社で拾われた子なんだ、と。

「だって、あの人は生きてるわ！ 死体じゃないわ、ちゃんと血が通ってて温かいのがわかるもの。

ウイズもあれだけ密着されまくったら知ってるでしょう？」

「そう、かのちゃんは生きてる。」

なのに死体だと思われて、使者様として世話をされて来たのは何故だと思っ?

おかしいだろう? 誰だって抱いた赤ん坊が死体かどうかくらいわかるよ。一瞬じゃなくずっと一緒にくらすわけだからね。

大体、普通捨て子を拾った人は、引き取る時に役所に届けるものだ。

そうしないと罰されるからだけど、実際の話、保険証とか養育費とか子ども手当てみたいに、届け出ておいた方が得をするシステムもある。

それをしないで1室に閉じ込めて育てる方がずっと難しい。何故そんなことをする?」

「ウイズのお母さんが昔、子供を殺したという事なの?」

この質問に、ウイズは答えなかった。代わりに怜さんがうなずく。「それも生まれてすぐだろうね。」

役所に届けをしてしまった後なら、生き返って来た子供はその籍に戻すから、彼女の様な事にはならないだろうから」

「願を掛けるために殺したのかしら」

「いや、産んだ子をすぐに殺したのなら、産みたくなかった子だっただけかもしれないさ。」

ついでに願くらい掛けた可能性はあるけどね」

辛辣な言い方をする怜さんの言葉に、ウイズはさらにおっかぶせて、

「子供を殺すのに理由が必要な女じゃないよ」

ぞつとする口調で吐き捨てた。

そうか、そして赤ん坊は戻って来たのだ。

多分、幾ばくかの月日が経ってからの事だろう。

魔窟の魔女は自分が子供を捨てたその沼付近で、ある日、赤ん坊の泣き声を耳にした。

見ると、捨てた時と同じ裸の赤ん坊が泣いているではないか。

それは彼女が捨てた子供本人ではなく、別の誰かが神社に捨てて行った子かも知れない。

赤ん坊を抱いてみれば、それが我が子ではない事も、死者でも靈魂でもない事も、まともな人間なら判ったはずだ。

けれど、魔女はその瞬間思った。

ああ、そうか。 そういうことか。

伝説はこんな形で実現するのだ、と。

もともと育てられなくて子供を捨てたのだ。

彼女には子供を生んだと打ち明けられる相手が居なかった。

だから、捨てた子を連れて帰っても我が子として世話をしてくだりにはならなかった。 ただ、死体でないことはわかっていたから衣食住の面倒は見た。

周りにも本人にも、我が子であるとは言えないので、人間であることそのものから否定して、キツネだと言い張ったのだが、きつと捨てた本人には、その子が人間で、しかも他人の子だとわかっていたんだ。

ああ、これが神の意志であるか、と彼女は思っていた。

そういう形で、神は自分を試すのか。 この子を育てなければ幸せは手に入らないということなのだ。

「でも、かよのさんは不思議な力を持つてるわ。

それは偶然なの？」

あたしは、黙りこくってしまった魔術師に質問した。

ウィズは目を伏せたまま、小さく首を振った。

「かのちゃんは、神棚以外に何も自分の物を持ってなかったけど、ひとつだけおもちゃの様な物がその部屋にあった。赤ちゃんに握らせる、柔らかい布の人形だ。

それは凄く古い物だったから、僕が触ってもほとんど何も語ってくれなかった。

でも、それにはあの魔女のものじゃない、誰か大人の女の人の気配が微かに付いていた。

僕はその人を、きつとかのちゃんのお母さんだろうと思って、本人にそう言ったんだ。

かのちゃんは絶対に認めなかった。

『かのは神様のキツネの子だから、人間のお母さんはいないよ』  
って。

考えたら当たり前の事だよね。わからなかった僕が馬鹿だったんだ。

かのちゃんにホントのお母さんがいるとしたら、それはかのちゃんを裸で捨てた人でなしだ。

そうでなくても、あの魔女に殺されて、私欲のために拾われただけの境遇なんだからね。

自分はそんな不幸な子供の体を借りたキツネなんだ、って思わなかったら、かのちゃんは生きていけなかったんだよ。

そして、ある日を境に、かのちゃんは自分を狐仙として行動するようになったんだ」

それは、年末の大掃除のために、かよのさんが神棚のある部屋から庭に出された、短い時間に起こった。

家人が気付いた時、さつきまで元気だった庭の植木が、全て枯れてしまっていたのだ。

魔女がかよのさんを問いただすと、彼女は笑って、裏庭の生垣の椿の木に魔女をいざなった。

つい今しがたまで蓄も付いていなかった椿の木は、真っ赤な花をいっぱい咲かせていた。

「こつちからあつちに移したの」

どうやったのかと問い質されて、幼いかよのさんは必死で説明をしたのだ。が、残念なことに誰にも理解は出来なかった。

「ここに、光があるでしょう。風があるでしょう。あつたかい空気があるでしょう。」

それは全部違うものなのに、おんなじとこにあるでしょう。

そのおんなじとこ、って場所が、パワーって言う事なの。

そのパワーって言うとこだけなら、あの水を使って時間をずらしたら動かせるんだよ。簡単だよ」

何が簡単なのかさっぱりわからないが、とにかくその時彼女は何かをつかみ、更に自分がそれを自在に操れることを不思議だとは思わなかった。

だって、自分はキツネの使いなのだ、人間ではないのだ。

戸部多津奈の伝説を人から聞いて、自分も水を使えば何かができるかもしれないと思ったのがきっかけだったと言う。

そして、その日から彼女の待遇は変わった。新しい着物とおいしい食事と入浴が約束された。

ひっきりなしに人が尋ねて来た。

体の弱い人を見ると、魔女が、うちに良い祈禱師が居ますなどと

言って連れて来るのだ。

そのひとに「パワー」を注いでやると、尋常でない喜びよつで帰って行く。

問題は、与える「パワー」をどこから持って来るかという事だった。

植物の持っている「パワー」は、動物のそれより量が少なく、庭木程度の物ではひとり分まかなうのがやっとだった。

すぐに庭は荒れ果てて、草木も生えぬ状態となった。

依頼人に植木を買ってくるように頼むのだが、トラックいっぱい積んで来ても足りないことがあった。

犬小屋で寝起きしていたウイズには、相棒がいた。

本物の飼い犬で、ジョンという名前の雑種犬だったそうだ。

この犬が突然、姿を消した。

その行方をたどって、はじめてウイズはかよのさんが何をやっているのかわかったのだと言う。

「犬を捧げても効かんのじゃなかったのかね」

キシシ教授が不満そうに言った。

「それは沼の話でしょ。かのちゃんがやったのは、多津奈のやつた『癒し』ですからね。

能力者が間に入ると入らないのとで、効果が違っつてことじゃないかな」

「でも捧げ物は要る」

「そうです」

「その生命力を吸い取る力が、彼女にはあるわけだ」

「はい」

「では、その気になれば人も殺せるな」

一瞬、辺りが真空になった。

みんなが声をなくして口を開けている中で、ハツちゃんがかやたら緩慢な動作で水の入ったコップを倒し、おあ、とおかしな声を上げた。

「そんなに吾輩を睨まんでくれ、吹雪くんよ。

今のは単に可能性を示唆しただけだ。

ただ怖いのは、この場合その気になるのは彼女ではなく、彼女に依頼を持って来るクライアントや引き受ける新田であれば充分だ、ということだ。

彼女は願を掛けられたら、叶えざるを得ない。それしか自分の価値を認めてないのだからな」

ウィズは黙ったまま、教授の顔を睨み続けた。

この時あたしの脳裏に浮かんだのは、例の不審な死を遂げたアケミさんの内縁の夫のことだった。

詳しい報道はされなかったが、彼の死因はなんだったんだろう。

さすがにこの空気の中で、ウィズに聞く気にはなれなかったけど。

## 24、ヨハネは神の子を口説く

料亭での食事が終わると、怜さんはサンプルを持って大学に戻って行った。

あたしとウイズは、教授とハツちゃんを車に乗せ、手ごろな旅館を探して入った。

もう車が1台しかないから、これからは全員が一緒に動かなければならない。

明日もう一度、入浴と称して教団に行くことは可能だけど、結局それじゃ同じことしかできないだろう。

ウイズとキシソ教授は、長い間そのことで話し合っていた。

「地下で何が起こってるかを見るなら、夜中に探りに行った方がいいんでしょけどね」

「毎晩やっていると限らんのじゃないか」

「じゃ、僕が周囲の様子を見ていて、警戒してるような感じがしたら言いますよ」

「吹雪君、大丈夫なのか。かよのくんが邪魔するんだろう」

「邪魔するようなら怪しいですよ」

その時、普段よけいな口を挟まないハツちゃんが、珍しく会話に入ってきて、こう言ったのだ。

「やつぱりこういう時は、潜入しておとり捜査つてものじゃないでしょうか、教授」

ハツちゃんのいう事は尤もではあった。

あたしは現在、吐き気と婚約者にアンタッチャブルという、わかりやすい苦しみを背負っている。

その苦しみを与えた元凶は、ウイズから遺産を奪ってやるうとた

くらむ新田なわけだから、どの道あたしが抜き差しならない所まで教団にのめり込むまで「呪い」を解かないに決まっている。

逆に言えば、あたしが新田に「吐き気を止めるために大金を払う」と言えば、大喜びで飛びついて来るはずだ。

「あたしが、『人柱』を依頼する、ということですか……」

口にするにも恐ろしい話に、語尾から声が細くなってしまう。

「吹雪さんに頼んで、という形でだよ」

ハツちゃんが涼しい顔で言う事に、さすがに誰も賛同の声を上げなかった。

「危険すぎる」

教授が珍しく慎重派に回った。

「こつちが犯罪者になってしまつのは避けねばならんだ。

向こうだって、あからさまに危ない橋は渡るまい。気が付いたら、こつちだけが殺人者になっていたでは目も当てられんではないかね」

「待つてよ。人柱なんて、ほんとにそんなことが行われてるの？」

それはただの想像でしょう？」

あたしは怖すぎる設定を振り払おうとして大きな声を出す。

ウイズが静かに口を開いた。

「かのちゃんに直接聞いてみるよ。」

どうせ人柱なんてハードなことをしている人間がいたとしても、ごく一部の信者だろうし、残りの大半はそんなことが行われていることだって知らないんだ。地道な聞き込みでどうにかなる話じゃない」

「おいおい。そんな無造作なことをやって、オニバサリのおっさんに警戒されたらどうするね」

教授が目を剥いた。

「大丈夫ですよ。彼女は新田に直接命令されたら言うことを聞くけど、僕たちから言わないでくれと頼まれたものを進んで新田に告げ口はしないでしよう。」

新田は何の能力もない凡人だ。かのちゃんが新田に余計なことを言わなければ、僕らが探りを入れたことはバレませんよ。」

その言葉に安心したわけじゃないが、他にとっかかりがない以上、反論の仕様がなかった。

ウイズがかよのさんの携帯に連絡を入れている間に、キシシ教授はあたしのところにやって来て、声を落として聞いた。

「大丈夫なのかね。あのかよのって娘は、吹雪君の幼馴染ときいたんだが」

「そうです」

「逃がすつもりじゃないだろうね」

「逃がす？」

「教団のやってることを暴いて、それが殺人だったとしたら、あの娘も無事では済まんだろう。それどころか新田に要領よく罪を押し付けられて主犯にされかねない。」

そういうことを予測して、彼はあの娘を逃がす気なんじゃないのかね」

あたしは絶句した。それは、あり得ない事ではないと思えたからだ。

「あたしも一緒にかよのさんに会っていい？」

電話を終わって振り向いたウイズに、いきなりそう言ったのは、用心のためだったろうか。それとも単なる嫉妬からだったのだろうか。

魔術師はいいよとうなずいた。

内心で舌打ちしたかどうかは、そのクールすぎる表情からは計ることが出来なかった。

夜の7時に、田神稲荷の鳥居の下で待つことになった。

その時刻は、新田が泊り客と一緒に食事をとった後、集団で話したり講和を行う時間なのだそう、その間なら新田の目を盗んでかよのさんが教団本部から抜け出すことができるということらしい。

キシシ教授とハツちゃんは、旅館に残ってもらうことにした。

本人たちは、どうせやることがないから一緒に行くと言ったのだが、もしもあたしたちが捕まったりした時を考えたら、一蓮托生じや困る。

ウィズとあたしは、神社の下の空き地に車を停めた。

山の中の自動車道は、うっそうとした木の陰に何かが立っているだけで、それだけで凄まじく怖かったが、それでもまばらに街灯があるだけだった。

神社の石の階段を上るにつれて、闇の濃さは容赦なくあたしたちの視界を奪って恐怖感だけを膨らませた。もともと、魔術師の目は暗闇に負けない「神の目」だから、あたしのように不自由はしていなかっただろうけど。

石段を登りながら、背筋がぞつとした。

下から鳥居を見上げると、暗がりの中でそこだけ白く浮かび上がっているのだ。

白い石が月明りで反射するためだと、理屈で頭を納得させようとしたが、気味悪さは拭い取れなかった。

一步先に行くウイズが、振り返ってあたしを氣遣う。  
手を差し出しかけて、引っ込める。

ああ、怖がっている場合じゃないんだ。

あたしはこの吐き気を治さなきゃいけないんだから、こんなことで氣おくれしたらダメ。

てっぺんまで登って、自分が鳥居の下に立ってみると、何も怖いことはない。

ほっとした途端、ポンと肩を叩かれて、あたしは悲鳴を上げた。

「シート！ あたしだよ」

人の口を無遠慮に押さえつけたのは、浴衣姿のかよのさんだった。

「こーちゃん、今日はだめになつたんだよ」

かよのさんは、あたしが大声で叫ぶのをやめなと思ったのか、いつまでも口を塞いだままウイズに言った。

「今晚は、ここに見張りの人が出て来るから、ここにいない方がいいよ。」

帰って、あしたまた来て。 美久も」

「見張りって何のために？ 今晚、何があるんだい」

「急に早くなつたから、今晚しかできないことをやるんだって」

「何かの儀式？ 特別なお祈りかな」

「かのは知らない」

「知らないって、神様はきみなんだらう？」

そのきみを除いて儀式をやるなんて、ありなの？」

ウイズに指摘されて、かよのさんは唇を尖らせた。 子供じみた

その表情は、何故か彼女を普段よりもきれいに見せた。

「だってホントに知らないもん。 かのは嘘ついてないよ。」

夜中にミズモリさんがやる儀式は、かのは関係ないって言われ

ることが多いんだもん」

その様子から、彼女は自分の処遇に不満を持っているらしいと判った。

「かのちゃん」

ウイズはゆっくりとかよのさんの肩に手を掛け、その瞳を覗き込んだ。

「きみは、狐のお使いだって自分のことを言っていたね」

「そうだよ」

「でも、今、あの新田が神様のようにみんなに慕われて、きみは彼の便利屋みたいな立場だ。」

言ってる意味わかるかな」

「……わかるよ」

「もしも、新田がきみ抜きで、沼の水を奇跡に使えるようになったら、きみは用無しになってしまうと思わないか」

かよのさんは、眉をピクリと上げてウイズの顔を睨んだ。

「それはできないよ。ミズモリさんは、水をつかうのはできないんだよ……」

そう言いながらも口ごもる様子が、自信の揺らぎを表していた。

「それが出来るようになるかもしれないんだ。」

それはきみにとって、困ったことなんだろう？」

「だって、かのはなんにも止める方法が判らないよ」

「止める方法を一緒に考えてあげるよ。今日はここで僕らに、その儀式を見せてくれればいい」

かよのさんが、何故かひどく緩慢なテンポで息を吸い込み、そのまま呼吸を止めるのが判った。

「怒られるよ。かのは見たらいけない物を見たらすぐ怒られる」

口の中で発されたその言葉は、彼女がすでに迷っていることを示

唆していた。

「前にも何かを見て、怒られたことがあるのかな」

「ある」

「怖い物を見たの？」

ウィズはゆっくりと、彼女の頭の中に画像を呼び込むための質問に移った。

かよのさんは視線を上げて、上気した顔でウィズを見上げた。

「口で言わなくていいよ、かのちゃん

力を抜いて、僕の目を通らせて」

魔術師が言葉を掛けると、かよのさんの怯えた瞳から、ポロリと涙のしずくが転がり落ちた。

うわー。

これ、どう見てもスケコマシのやる技だな！

## 25、人柱が完成するまで

泣き出したかよのさんを車の中で落ち着かせてから、再び外に出ると、山の景色は一変していた。

真の闇だった草むらや木立ちに、おぼろな光が射している。

月が昇ったのだ。

信じられない大きさの、とろりと甘ったるい満月だった。

神社の奥にある細い道を、足探りで登って行くと、右手に例の沼がある。

かよのさんは、そこを逆側の上って行く道を教えてくれた。

本当に細々とした、けもの道ほどの登り坂を、草をかき分けて歩いて行く。木々がうつそうと生い茂り、視界は真っ暗で相当に怖い。

神社と教団本部が近いことは知っていたが、こんなに近いとは思っていなかった。

車で来た時は、山肌をぐるりと一周したからだ。

「ここから地下へ入れるよ」

かよのさんが案内してくれた扉は、山肌に直接取り付けたようなアンバランスな木製のドアだった。古びて朽ちた木材を使っている割に、ドアノブだけは新品のスティック状の物だ。

「でも、普通の人は入れないんだろ？」

ウイズが念を押す。

「勝手に入ろうとした人はどうしろって言われてるんだ？」

「かのが、見えないように目隠しする。こーちゃんにもやっただみたいに」

「もし見られちゃったら？」

「お庭の木にあげていいって」

「前に、椿を咲かせたみたいに？」

「そう。そしたらあとで使えるもん」

こともなげに言うかよのさんに、あたしの背筋は凍りつく。

彼女は新田の言うがままに、敵と思しき人から「気」を吸い取って、教団の庭に「貯蓄」していたのだ！

彼女に殺人の自覚はないだろう。

例えあっても、人間としての教育を受けていない彼女に善悪の判断はつかないし、罪悪感などもあるとは思えなかった。

「入って。ここは今誰も通らないよ」

かよのさんに促され地下道に踏み込むと、冷氣と共に土の匂いが鼻を突いた。

地下と言っても、入り口付近はむき出しの土を木材で覆っただけの穴だ。正面にポツンと見える蛍光灯が、建物本来の壁に当たるところなのだろう、そこにも手作りらしい不細工なドアが取り付けられている。

そのドアの中からは、施設の建物の内部らしいきれいな廊下が始まっていた。

つまり、建設の時には地下室を作ったのに、その後上からの通路を塞いでしまったということらしい。その後で地下の沼に続く出入り口を掘って、外から利用できるように改装したのだ。

「かのちゃん、ここは結構人が通ってるけど大丈夫？」

ウィズが壁に手を触れて尋ねた。

「うん、時々通るかもだよ。」

でも、そのときはかのが『目隠し』するから」

「じゃ、誰か来そうな時は、事前に教えるよ」

ウイズとかよのさん、超人二人がタッグを組んでいるのだ。あ

たしは安心して後をついて行くことにした。

一つのドアの前で、かよのさんは立ち止った。

あたしとウイズは緊張した。この部屋には、人の気配がある。

グラスや食器が触れ合うような音がする。

人が会話する気配、時々笑い声。

「今、新田はここだね」

ドアに掌を当てて、ウイズが言った。

「モニタールームがあるな。入れる？」

「こつちだよ」

かよのさんは、一つ手前の通路を曲がって、そこにある小さなドアを指さした。

「モニタールームだよ」

「待って、ここはあとですぐ人が入って来るぞ」

「うん、入って来る。始まると写真を撮りに来るよ」

「新田が？」

「そうだよ。まだみんな中でお酒を飲んでるから」

宴会の間は大丈夫という事らしい。

おっかなびつくり入ったモニタールームは、人が一人やっと座れるくらいの小部屋だった。

多分、もともとは守衛室だったのではないだろうか。

モニターは8画面あり、そこに順番にいろいろな部屋が映し出される。

音声はなく、ひたすら画像だけだ。

ウイズが熱心に一つの画面を覗き込んだ。

8個のうちふたつが、10畳ほどの和室で食事する男性たちの様子を映し出していた。

男たちは、若いのを老けてるの、普段着の背広姿の、取り混ぜて6人いる。

「見たような顔がいるぞ、ほら」

ウイズの指さした先には、なるほど見覚えのある顔が映っていた。若手弁護士の大西だ。ウイズと一緒にあの屈辱のワイドショーに出ていた人！

「こつちの人は農水省の偉い人」

ウイズが別の男を指さした。あたしやかよのさんにはわからな  
いが、ウイズの記憶バンクにいる人間が、他にも二人いるらしかっ  
た。

新田は各席を回って、6人に愛想笑いをしつつ酒を注いでいる。

「有名人ばかりってこと？」

「かな。弱みを握って金をふんだくるわけだな」

「弱みって？」

「これから出て来るよ」

あたしの預言者のご託宣通り、ほどなく新田はふすまの外に出て、  
ひとりの女を連れて戻って来た。

派手な化粧と胸の開いた服を着た、場馴れしない様子の女。

過激な格好の割に、そう若くもなく美人でもないの、余計に場  
違いだ。

「新田が言ってるよ。」

『信者さんが罪業を落とすために奉仕しているので、協力してやってくれ』って」

ウイズが新田の映像の口パクにアテレコした。

彼は、言葉を聞き取る能力はないが、聞いた人の頭の中から話の内容を読むことができるのだ。

「罪業って何かしら」

「言い訳だろ。そんなものはないんだ」

ウイズの言い方は容赦がない。

女は、6人の間を慣れない手つきでお酌して回り、更に自分も飲みながら、男たちに体を摺り寄せた。

それだけではない。

女は段々大胆になって、男たちの手を取ると、自分の胸を触らせたり、股間に誘導したりした。

「『彼女は罪業を払わにやなんのです。』」

不本意でしょうが、ご協力をお願いしますよ」

完全に小ばかにした口調で、ウイズが新田の声を代弁する。

照れ笑いを浮べる者、しめたとばかりに女の胸に手を突っ込んで脂下がる者、男たちの反応はそれぞれだったが、とにかく悪い気はしない様子で女の体を触った。

そこで、突然電気が切れたのだ。

「始まった！ミスモリさんが来る！！」

かよのさんが飛び上がる。

部屋を出る前にちらりとモニターを見ると、真っ暗になった部屋で、6人の男たちはまだはつきりと映っていた。赤外線カメラもついているようだ。

モニタールームを出て、廊下をさらに進み、右に折れる。歩きながら、ウイズがあたしに囁いた。

「彼女の業を落とすと言う名目で、あそこでこれから乱交が行われる。」

それは彼女が妊娠するまで繰り返される。

そしてあの6人に手紙が送られるんだ。

『妊娠しました。恨みは抱いてないけど、墮胎費用を出せなくて困っています、助けて下さい』って言う手紙だ。彼女らは教団に住所を教えて貰ってその手紙を出して、墮胎費用を請求する」

「出す人いるの」

「教団の方で、証拠写真を取っていると言われたらね。」

一人8万から10万くらいの額だしね。

実はね、6か月前まで、あの役をやっていたのはナギサさんだったんだ」

「あ」

あたしの脳裏に、大きなおなかを抱えてご入浴をするナギサさんの姿が思い起こされた。

そうだ、「小遣い稼ぎ」って言ったつげ。

「そうやって60万を稼いで、10万で墮胎をするの?」

「墮胎はしない。ここで産むんだ」

ウイズは低い声で吐き捨てた。その顔に嫌悪感と憎しみが色濃く宿っている。

「ここで産むんだ。教団が100万円で買ってくれる。」

そして教団は、その子を500万で売る。

取って置きのお願いをする人のための、人柱として」

## 26、憎しみの裏側で

ドアの開く音は、静まり返った地下の廊下に凄まじく響き渡った。あわててモニタールームを離れ、廊下の角へと身を隠す。

新田はにやにやしながら宴会場から出て来ると、あたしたちと入れ替わりにモニタールームへ入って行った。

ほっとしたのも一瞬のこと。

今度は背後でドアが開く音がした。

あたしは咄嗟に一番近いドアに張り付き、それでは体を隠しきれないと知って慌てた。

扉のノブを回したら簡単に開いた。中は真つ暗だったので、その闇の中へ飛び込む。

ついでに他の二人の腕をつかんで引きずり込んだ。

ウィズは何故かひどく抵抗したが、この際強引に引き込ませてもらった。

ドアの隙間から覗くと、廊下を3つの人影が通過するのが見えた。灯りは先頭としんがりの二人が掲げている雪洞風のほんぼりライトが二つ。あたしは悲鳴を飲み込んだ。

3人はそろって不気味な格好をしていたのだ。

先頭と最後のふたりを見て、一瞬、手足だけで体がないのかと思っ

った。よく見ると忍者のように真つ黒い服を着て、目出し帽なのか頭巾に覆面なのかわからないけど、とにかく全身が不自然に闇に隠している。そのくせ手首足首から先は素手素足が出ているから、暗がりですこだけ光るように目立つのだ。

真ん中の1人だけが、普通のポロシャツにズボンという服装だった。

体型からして、あまり若くない男性と思われた。

腕に白い包みを抱えて、そして顔には異様に大きな白い布を一枚、鉢巻でくくりつけて面隠しにしている。

「今の……何？」

3人が通り過ぎてから、震える声を落として聞いた。

ウイズに質問したつもりだったんだけど、答えたのはかよのさんだった。

「ああして沼に行くんだよ。」

黒いのがお使い当番の人。真ん中が御祈願をする人」

建物を出る扉が開くと同時に、弱弱い泣き声が聞こえて来た。

新生児の声は、祈願をする男の抱いている白い包みから流れ出して来る。

（これから、生贄を捧げに行くということ！？）

どうしよう。赤ちゃんが殺されてしまう。

すぐ止めに入った方がいいんじゃないかな。いや、警察に連絡？

迷って魔術師の顔を見ようとしたが、彼はこちらを向いていなかった。

あたしに背を向けて、部屋の中央を睨んでいたのだ。

その時初めて、そこに人が座っていることに気が付いた。そこから密かにすすり泣く声が聞こえる事にも。

（誰かいたんだ！）

ウイズが部屋に入るのを拒んだのは、無人でないことが判ったからだった。

その人は部屋の中央に布団を敷いて、その端っこに座ったまま泣いていた。

泣きながら膝のあたりを撫でまわし、ぶつぶつと独り言を言っている。

「死んでる。……死んでる。……死んでる。」

やだよ、やだよ、死んだら困るんだよ。

生き返れ、生き返れ、頼むから生き返れ……」

正気を失ったような口調に、異常を感じて体がすくむ。

そんなあたしと対称的に、ウイズの言葉は冷静だった。

「ナギサさん、あきらめて。」

その子はもう死んでいるよ」

泣いていた顔がこちらを向き、闇の中で白目の部分がわずかに光る。

そう言われれば、この感じはあの、入浴場で出会った魔女かも知れないとやっとなづいた。

「あんた、コロかい？」

「そうだよ」

ウイズは靴を履いたまま、畳に膝をついて布団の方へ体を寄せた。

「ナギサさん、死産だったんだね。」

そんなことをしても今から生き返ることはないよ。もう何日

も前に心臓が止まって、だから体の外に出て来たんだ」

「そんなのダメだよ。だったらどうすりゃいいのさ」

ナギサさんがさめざめと泣き始めた。

「あいつらに金返さないと殺されるんだよ。」

やっとなづに逃げて来たのに、このままじゃ見つかったらうじやないか」

血の匂いが鼻を突いた。

ナギサさんの膝のあたりに置かれたものがどんな状態の物なのか、暗くて見えないのをいいことに、あたしは想像しないようにした。

でも、ウイズには見える。 多分はつきりと。

魔術師の背中に、震えるほどの強い怒りが込められているのが判った。

自業自得だ。

あんたは人の命をなんだと思ってるんだ。

そんな風に怒鳴りつけたかったはずだ。

でも、彼はそうしなかった。 大きく息をついた後、冷静な声で「お告げ」を口にしたのだ。

「ナギサさん、ここにホクロのある、太った女の人を知ってるね。いつも遠近両用の眼鏡を掛けて、ヒマラヤンの大きな猫を飼ってる人」

「知ってるよ、まだ生きてやがるんならだけどね」

「その人が助けてくれるよ。」

全部正直に話して頭を下げれば、今回の借金は肩代わりしてくれるし……」

「やだよ!」

ナギサさんの叫びが魔術師の声を遮る。

「やだ、やだ、やだ、あたしの宿敵ってやつなんだ。」

あんな女に頭下げるくらいなら、死んだ方がまだだよ」

「なら死ねば」

魔術師はあっさり吐き捨てた。

「こんなところで病院にも行けないで、独りぼっちで子供産んで売って、子宮もプライドもボロボロになる方が頭下げるよりましだ

って言うんなら、勝手に死ねばいいんだ！」

言い放つウイズの声と同時に、部屋の中で何かが割れる音がした。抑えきれない彼の怒りが、室内の物を破壊したらしかった。

部屋を駆け出すウイズを追いかけて走る。

後ろをかよのさんが走って来る。

その時あたしはやっと気づいた。

あたしの優しい魔術師は、ホントはずっと彼女らのことを心配していたのだ。

憎しみもあり、恨みもある一方で、彼にとって魔女たちは家族であり、思い出でもあるのだろう。

新田の講話を褒めるわけじゃないけど、悪いことしか起こらない人生なんて考えにくい。

長い年月の間には、お互い笑ったり楽しんだり、癒されたりした瞬間も、時にはあったはずなのだ。驚異の記憶バンクを誇るウイズが、その瞬間を全て忘れているわけではない。

素直になれない気持ちの裏側で、彼はいつも彼女らのことを気にかけていた。

夫を殺したかったアケミさんのことも、そして今回亡くなった魔窟かあさんの女王のことも。

沼のほとりには、さっきまでとは違う、寒々とした深夜の風が吹いていた。

ざわざわ囁く草の音に混じって、赤ん坊の泣き声が頼りなげに聞こえてくる。

雑草の中をにじり寄ると、沼の入り口からは、黒子たちが持っていた雪洞仕様の灯りが2つとも、黒々とした水のほとりに置かれている。

3人の人影は、沼の方を向いて一心に手を合わせ拝んでいた。祈りの声などは聞こえない。それぞれが勝手に手を合わせているだけなのだ。

何故、こんな大事な儀式に新田がいないのだろう。

本来なら、あの男がお経だか祝詞だかを上げてやる立場なんじゃないか。

犯罪の場にだけいないという事実が、新田の狡猾さを示しているように思えた。

沼に近くなると、またウイズは動けなくなった。

そうだ、最初の時も、思念の強烈さに当てられて、このへんではやがんでしまったんだ。

「ウイズ、ここで教授にメールして。それで警察にも連絡してもらってよ。」

あたし、かよのさんで行ってなんとか止めて来る」

「美久ちゃん、危なすぎるよ」

「だって、赤ちゃん殺すの黙って見てられないわ」

ウイズはしぶしぶうなずいて、携帯を取り出す。あたしとかよ

のさんは、足音を忍ばせてなるべく沼に近付こうとした。

その時。

前触れもなく、白い面隠しの男が立ち上がった。

その腕が高々と上がり、白い包みを掲げている。赤ちゃんの声がますます切羽詰って甲高くなった。

「やめて、ダメよッ」

思わず叫んで駆け寄った。

## 27、孤仙降臨

あたしが水の中に倒されるまでの時間は、おそらく数十秒のことだっただろう。

でもあたしの記憶は、その間のひとつひとつをコマ送りのように鮮明に焼き付けた。

白い面垂れを着けた男。

高々と上がった両手。

泣き叫ぶ赤ちゃん。

夢の中のように遠くで、自分の叫び声がしていた。

面垂れ男に掴み掛るあたしの腕を、黒子の1人が驚掴みにする。

「施主さま、はやくッ。投じて下さい！」

面垂れ男に生贄の投下を促した黒子の声は、若い女だった。

あたしは止めようと必死で、黒子の手を振り払う。

ほどいたその手をまた掴まれる。

二人目の黒子が後ろから組み付いて来る。こっちは男だ。

「かよのさん、手伝って。赤ちゃんを！」

悲鳴に近い声で叫ぶ。かよのさんが何をしているか、見ている暇はない。

やみくもに動いて黒子を振り払い、よろけた勢いを利用して面垂れ男にすがりつく。

その時、かよのさんが不意に現れて、面垂れ男の腕から赤ちゃんを奪い取った。

「あっ」

瞬間、彼女の手が面垂れ男の面布にひっかかり、ひもでくくられ

ていたそれはあっけなく外れてしまった。布の下から、赤ら顔の中年男の驚愕した表情が現われた。

慌てて隠してももう遅い。

あたしと中年男の視線がぶつかった。その途端、彼は咆哮を上げて掴み掛つて来た。

「施主さまッ」

「いけません！」

黒子たちが止めようとする。彼らはつまり監視と「見届け」のためについて来ているのだ。

「離せ、顔を見られたんだ。この女わしの顔を見た！」

一瞬で胸倉を掴まれ、次いで両手で首を絞められた。

目の前が真っ赤に染まる。生まれて初めて体験した、頭が爆発するほどの苦しさだった。

抵抗しようとして伸ばした腕が空を切る。

目から耳から鼻から、何かガメリメリと飛び出しそうになる。

がくんと膝が折れ、あたしの体は水しぶきを上げて沼に座り込んだ。

中年男が勢いづいて、更にとどめとばかりに覆いかぶさって来る。視界がゆがんで、どす黒くなった。

あたし死ぬんだ！ うそでしょう？

その途端、不思議な現象が起こった。目の前の物の動きが全てスローモーションのように緩慢になったのだ。

鬼の形相であたしの首を絞める男の口が、ゆっくり動いて何かを叫んでいた。

その後ろから女性の方の黒子が、緩慢な動きで彼を止めようとしていた。男性の方の黒子がその場を離脱して、教団本部の建物の

方へ走つて行くのも、その時目に入った。

異変は突然起こった。

黒子の女性が悲鳴を上げて飛び下がる。沼の水に半分浸かったあたしの体の上に、ジュツジュツと音を立てて何か小さなものがたくさん落ちて来た。

中年男が、あたしの首から手を離して、ゆっくりと白目を剥いた。独特の悪臭と共に、炎を上げているのは、もともと乏しい彼の頭髪だった。

夜目にもはつきりとした炎が、頭の真ん中から不気味な青色に燃え上がっている。

「美久ちゃん」

悲鳴と共に沼に頭を突っ込む中年男を押しつけて、ウイズがあたしを抱き起してくれた。

「ウイズ大丈夫なの？」

魔術師の呼吸が乱れている。彼は、怨念の強いこの沼には近付けなかつたはずだ。

それを思い出して聞いて見ようとしたのだが、あたしの声は全く声にならなかつた。

喉が詰まって咳が出て、それが止まると酸欠で意識がおぼろになり、とにかく口を開けて呼吸に専念した。

ウイズに肩を貸してそこまで連れて来たのは、かよのさんだった。彼女は赤ちゃんを奪うと、すぐにウイズの元に走つたのだ。この

人の頭の中では、あたしの命よりウイズの指示の方が大事ならしい。中年男が、沼に浸けた頭を起こして、震えながら顔を上げた。

彼の髪の毛は丁度河童のように、真ん中から丸いお皿の形に消失していた。

「うんぬぬぬぬぶ」

どうやら怒りが強すぎて言葉にならないらしい。中年男は呻きながらまた掴みかかって来た。

ウイズがあたしを庇いながら、抱き上げて後退しようとする。

あたしの耳には、魔術師の心音が悲鳴のように響いていた。彼の体は、沼の残留思念を浴びて相当な負担を訴えており、とても激しい動きが出来る状態ではないのだ。

ひとりで逃げるから降ろしてくれと言いたかったが、あたしも言葉を出す余裕がない。

ウイズはあたしを抱いたまま、尻餅をつきつき沼から這い上がった。

「のおおおおおッ」

中年男が吠えた。彼の右手には、沼のふちに建てられていた「供物を投じてはいけません」の立札が握られていた。

振りかぶって、あたしたちに振り下ろした。

咄嗟にかよのさんが、赤ちゃんを頭でガードし、片手で立札を止めようとして腕を思い切り殴られた。

「かのちゃん!!」

「かよのさんッ」

助けてあげようともがいても、体がうまく動かない。

中年男が2度、3度と続けざまに立札を叩きつける。かよのさんが短い悲鳴を上げて倒れた。

ああ、まだ赤ちゃんを体で庇ってる!

そのかよのさんの体の上に、男が半分折れた立札の杭を、力いっぱい振り下ろした。

あたしと黒子の女性の悲鳴が、交錯して夜空を駆け上がる。

「やめろ!!! 何をやってるんだ!!!」

突然大きな声がして、特大のライトが辺りの闇を薙ぎ払った。

息を切らした浴衣姿の男が、大型の懐中電灯を持って走り寄って来た。オニバサリこと新田一樹だ。

さつき走って行った男性の黒子が一緒に戻って来ている。この黒子が新田を呼んで来たのだろう。

黒子たちと新田が3人がかりで、中年男を取り押さえ、武器を取り上げた。

あたしとウイズは、かよのさんに駆け寄った。助け起こし、その腕から赤ちゃんを保護したが、肝心のかよのさんは動かない。

「かのちゃん、かのちゃん、しつかり！」  
ウイズが顔色を変えて名前を読んでいる。

新田は黒子たちと短い会話をしたあと、2言3言指示を出して二人を本部に帰らせた。

黒子たちはまだ何か大声でわめいている中年男を連行して、建物の方へ消えて行った。

「さて、と」

新田がひとつ息をついて、あたしたちに向き直る。

顔を見ると、たった今までの穏やかで威厳のある顔つきが一変して、もとの「下品で欲の深い俗物」の表情になっていた。

「何かたくらんでると思ったが、お前たちはやっぱり大人しく入浴しに来るタマじゃなかったな」

口元を嫌悪感でゆがめて、新田がウイズに言った。魔術師はしやがみこんでかよのさんを抱えたまま、口をきくのももったいないと言いたげに鼻にしわを寄せた。

「当然、警察に行くつもりだろうな？ ええ？ コロよ」

「だったらどうなんです」

魔術師が押し殺した声を出す。すると新田は厳かに言い放った。

「ごうするよ。 かよの、さつさと起きろ」

あたしは息を飲んだ。 ウィズの腕の中のかよのさんが、急に目を開けたのだ。

「かよの、今夜はその男が『贄』<sup>にえ</sup>だよ。

隣りのお嬢さんと一緒に、沼に送ってやるがいい」

かよのさんの体が、不自然なほどスムーズに立ち上がった。

頭から大量の血がこぼれて、肩口まで真っ赤だ。 右腕は折れているのか、だらんと下に下がっている。 血の気のない顔は、完全に無表情だ。

「かの……ちゃん」

ウィズが呆然とその顔を見つめて凝固している。

「ウィズ！」

彼女の腕が突然動いて、魔術師の顔面を狙った。 咄嗟にあたしは赤ちゃんを抱いたまま、体ごと彼女にぶつかって止めようとした。 かよのさんはびくともしなかった。 体は石のように固くなっていて、あたしの体当たりをまるで受け付けない。

その手が高速で動いて、あたしの額を容赦なく鷲掴みにした。

キン

頭の中で、耳障りな金属音が響いた。

瞬間、ものすごく気持ちのいい脱力感があたしの体を突き抜けた。 出て行った、という感覚が快感になって体を満たした。

いい物も悪い物も、一瞬で吸い込まれて無くなってしまったという感じだった。

全身の力が抜けて、バラバラになって地面に崩れ落ちる快感。

気が付くと、あたしは沼のふちに仰向けになっていた。

その上に温かい人の体温があつた。 ウィズの体だ。

彼はあたしと赤ちゃんを庇って、あたしの上に覆いかぶさっていたのだ。

その心音の大きさに、あたしは守られていた。

体には少しも力が入らなかったが、何故かひとかけらの恐怖も感じなかった。

上から覗き込むようにして、かよのさんがゆっくり近付いて来ていた。

その顔には何の表情も浮かんでいない。

「行け、かよの。 その二人を沼に送るんだ」

新田が叫んだ。

あたしの眼の前に、ウィズの胸板があつた。 呼吸のリズムと、心臓の音、そして温かい肌のぬくもりがあつた。 微かな彼の体臭も鼻先に届いていた。

それらは今まで、あたしに吐き気を与え続けていたものだった。

あたしにセツクスの不快感を思い出させ、ゴキブリの味を呼び起こして胃の腑をひっくり返す刺激だった。

でも、今は違う。 あたしはそれに守られている。

ウィズはあたしとセツクスできなくても少しも変わらないでいてくれた。

そう、彼はもうただの異性ではない。

あたしの家族で、あたしの守り神で、あたしの半身なのだ。

魔術師の体に腕を回そうとして、はっとしてその腕を目の前にかざした。

あたしの腕はひと回り細くなり、干からびて老人のようにしわしわになっていた。

## 28、魔術師の反撃

新田の持つハンドライトの光が、沼地の闇を切り裂いてあたしたち突き刺さっている。

光の中を、かよのさんが近付いて来る。

浴衣の白が、頭から滴る鮮血のため赤く染まり、白い顔は能面のように無表情だ。普段愛嬌にあふれてよく動く瞳が別人のようで、闇の中に白い眼球だけがくつきりと映えている。

明らかに新田が、彼女の中の何かのスイッチを押したのだ。

あたしの頭の中に、ウイズが「あやめちゃん」になった時の様子が再生された。そう、あの時のウイズに良く似ている。

かよのさんの中に誰か別の人間がいるのなら、それは神の使い、弧仙だろうか。それとも古き昔の陰陽師、戸部多津奈だろうか。

逃げ出したかったが、体に力は入らなかった。

あたしの手足は力を奪われてやせ細り、一回り縮んでしまっている。顔がどんなことになっているのか、自分で見えないのがせめてもの幸이었다。

ウイズがあたしの上で半身を起こし、あたしと赤ちゃんを庇うために、かよのさんに胸をさらして両手を広げた。

「かのちゃん！」

かよのさんの歩みは止まらない。

「かのちゃん！ 聞こえないの？」

白い手が不意に伸び、何の躊躇もなく掌がウイズの顔面を覆った。  
「やめ、ろッ……」

ウイズが手首をつかんで引きはがそうとする。バチンと大きな音がして、青白い火花が弾けた。

かよのさんの体が電流に反応して大きく揺れる。以前、やくざを撃退したあの「ピカチユウ」攻撃だ。ところがかよのさんは、すこしも怯まなかった。

「わ、あああああック」

ウイズが彼女の手を握ったまま歯を食いしばって呻く。

かよのさんは静かにウイズを侵食していた。魔術師の背中にドツと汗が噴き出し、その腕が小刻みに震え始めた。

「ウイズ！」

あたしの足元で、カサカサとかすかな音がし始めた。

視線を落として愕然とした。それは地面の草が枯れて縮れる音だったのだ。

座り込んだウイズのお尻のあたりから、青草が次々と茶色に変色して地面に枯れ落ち、露出した地表の部分が放射状に広がって行く。沼の後ろの丈高い草が、バサバサと音を立てて、ひとつまたひとつと倒れて消失した。

あたしは我知らず声を上げていた。

がくがくと震えるウイズの体が、草と同じようにだんだん痩せて細くなるのが判ったからだ。

あたしを庇って広げられた腕が、次第にしなびて、枯れ木のように細くなって。

「いやッ、ウイズ！」

後ろから取りすがろうとしたら、思いがけなく強い力で振り払われた。

あたしの腕の中で、力尽きて黙り込んでいた赤ちゃんが、再び泣き始める。

その格好のまま、ウィズは動かなくなった。

かよのさんがゆっくりとウィズの額から手を離すと、魔術師の体は糸の切れた人形のように無機質な印象で、地面に崩れ落ちた。

全身の質量が半分になった、骨と皮だけのウィズの体を、あたしは呆然と見下ろした。

これは夢だ。

絶対、あたし悪い夢を見てるんだ。

かよのさんの能面のような顔が、あたしの方に向けられた。

もう悲鳴なんか品切れた。あたしは黙って震えながら、なんとか後ろへ下がろうとしていた。お尻に足が生えてくれと願いながら、枯れた草の上を座ったまま這いずった。

かよのさんがこっちへ歩き出す。

倒れたウィズを、無造作にまたいで。

来るな！ 来るな！ 来るな！

がくがく震えるばかりの体に鞭打って、湿った地面を後退する。

その時、場違いな音楽が響き渡った。

あたしの足元に転がった、ウィズの携帯からだ。枯草の上で、鮮やかな赤色が点滅している。思わず取り上げたら、新田が顔色を変えて駆け出した。

「出すな。かよの、取り上げるッ」

新田が掴み掛って来る。あたしは携帯を開き、叫んだ。

「キシン教授！ 助けて！！ 殺されちゃう！」

腕をつかんで来る新田を振り払う。携帯がまた地面に落ちた。

その瞬間。

「おじいおじい……」

突然、新田が悶絶して草の上に倒れた。

同時にかよのさんも、黙ったままその場に倒れ込む。

「はな、離せえ！」

新田の声はそのままうめき声に変わった。その手が自分の足首を探っている。

新田の足首を握っているのは、ウイズの左手だった。もう片方の手で、かよのさんの足首を。

ウイズは地面に倒れたまま、あたしに近づくふたりの足を狙い澄まして掴んだのだ。

新田が籐たがの外れたような甲高い悲鳴を上げ、助けを求めるようにこちらに腕を伸ばす。

彼自身を取り落としたハンドライトに照らされて、新田の顔がはつきりと見えた。その顔からどんだん肉が落ち、その手から質量が減って行く。肌から艶が失われ、骨が突き出ししわが増える。

「たすけ、助けて……」

か細く高い声を残して、力なく固まって行く表情。カチカチになった体が傾き、棒のように地面に倒れて行く。

笑い声が響き渡った。

あまりにもあっけらかんと夜空にこだましたその声は、一瞬どこから聞こえているのかわからなかった。まさかそれが、地面に転がった瀕死の魔術師の口からこぼれているとはとても信じられなかったのだ。

あたしは息をするのを忘れて、声の主を見た。けたたましく笑いながら体を起こしたウイズは、先の枯渇した外見とは打って変わって、つややかな肌を持つ美貌の悪魔に戻っていた。

「わかった、やっとわかった！ 簡単な事だったんだ！」

笑い上戸の魔術師は、日頃と全然違う口調で歌うように言って、

かよのさんの足を離し、代わりに手を取った。

「かのちゃんがどうやってエネルギーを移動してるのか不思議だったんだ。」

昔、一回教えて貰ったことがあるよね。でもかのちゃんたら本気で仕掛けて来ないから、あの時はわからなかった。こういう事なんだね、やっとわかったよ!」

手を握られたかよのさんの顔に、初めて動揺が走った。彼女は表情こそ動かさなかったが、慌てたようにその手を振りほどこうとしたのだ。

ウイズはそれを許さなかった。笑い転げながらも、握った片手にもう一方の手を添え、目に力を込めてかよのさんを見つめた。

彼女の様子が変わった。歯を食いしばって苦悩の表情をしたのだ。

その噛みしめた口から、ぎりぎりと歯ぎしりの音が響いてくる。

「あはははは、かのちゃん頑張るねえ。」

でもだめ、全然ダメ。僕の方が強いよ!!」

カカカカカ、と妙な音を響かせて、沼のほとりの低木が数本枯れ木になって倒れた。見ると、かよのさんの足元にも、さつきウイズの下に出来ていたのと同じ「枯草の放射図面」が出来ている。

そうか、吸い取られたエネルギーを、接触した草木から補ってるんだ。さつきのウイズも最初そうやって凌いでいて、追いつかなくなつて体が枯渴した。今は立場が逆転している……。

その時、背後に人の気配を感じて振り返り、あたしは飛び上がった。

教団の建物の中から、たくさん灯りを手にした人が出て来て、こちらへ向かって歩いて来るのだ。

さつきの黒子が、人を呼んだのかも知れない。

「ウイズ、もうやめて。逃げた方がいいよ！」

声をかけたが、笑いながら「吸血鬼」まがいのことをやっている魔術師にはあたしの声が届かない。

かよのさんがついに低い声で呻き始めた。その顔が蒼白になり、ピキピキと尖って骨張って行く。

「神様の使いもたいしたことはないねえ？」

僕のほうが上だよ、降参してよ、かのちゃん！」

不自然に明るい声で、魔術師は情け容赦なくかよのさんに宣告した。

ふと、足元で何かが動いた。

新田が、カラカラになった手足で這いずって、ウイズの足元に寄って行くところだった。

壊れたおもちゃが何かの拍子で動くように、今にも止まりそうな動作だ。

「あはははは、まだ動けたの」

ウイズは思い切り軽い笑いで、新田の努力を吹き飛ばした。

次の瞬間、彼は新田の背中を片足で踏みつけた。そして、すごい勢いで「吸引」を始めたのだ。

新田の体が、メカッと音を立ててたわんだ。

「だめ、ウイズ！」

建物から出て来た人たちが、沼に向かって駆けて来る。口々に何か叫んでいる。

「やめて！ 殺してはダメよ！」

こんなたくさんの人の目の前で殺人なんかしたら、その方法が証明できようがで কিনなるうが言い逃れできないよ！

「ウイズ、お願い！」

あたしは何とかウイズを止めようと、肩をつかんだり耳元で叫んだりしたが、魔術師はこちらを一顧だにしない。全閉状態のウイ

ズはハイになりすぎてどこかキレてる状態なのだ。

何とかしないと。それも今すぐ！

そして、あたしは咄嗟に、自分でも信じられないことをやってしまった。

## 29、ついに神の使いになる

あたしは服を脱ぎ捨てた。

それは咄嗟に、本当に衝動的にした事だった。

叫んでも聞いてもらえないなら、視覚に訴えようと思ったのだ。

もともとウイズは耳よりも目を優先する男だ。まず目を奪えば、意識をこつちに向けてくれるかもしれない。で、そうになると、今あたしが持っているもので彼の注意を引く物なんて、一つしかないじゃないか。

あたしは力の入らない体を必死で立ち上がらせ、まずサマーカーデイガンを脱いで地面に置いた。その上に赤ちゃんをそつと寝かせる。

近付いて来る人の声に急ぎ立てられ、急いで声を張り上げた。

「ウイズ！ 見て！」

叫ぶと同時に、あたしは着ているTシャツを手早く脱いで、ウイズの顔に投げつけたのだ。

その下はブラー一枚だ。ウイズ以外に見えない角度を工夫しながら、焼きもち妬きの魔術師が、我に返って飛んで来て隠そうとするのを期待したのだけだ。

仰天したウイズの顔を見て、慌てたのはあたしの方だった。

恐る恐る、自分の胸を見下ろした。

なんだ、これ。どこのおばあちゃんの体なんだ？

バストトップが4センチも下がっている。

その下にあばら骨が蛇腹模様を描き、縮んでかさついて古い布団綿のようになつた生白い皮膚は、はっきり言ってみられたものじゃ

なかった。

「いやあ！」

自分で脱いだくせに、手で隠してしゃがみこんでしまう。それでも、あたしの動揺で慌てたウィズが血相を変えて走り寄って来てくれたから、成果はあった。あのまま新田を踏みつけているところを信者に囲まれたら、タダじゃ済まない所だった。

「ミスモリさまっ！」

「う、うわああ！」

とんでもない姿になった新田に駆け寄って、信者たちは悲鳴に近い声を上げた。続いてかよのさんに駆け寄って、大騒ぎで介抱を始める。

中の1人が顔をひきつらせて、ウィズの胸倉をつかんだ。

「あんた、今なにをした？」

ミスモリさまに、あんたがなにかしてあんな……」

「ちがうよ。それはかのがやった」

きっぱりした声で、かよのさんが止めてくれた。

「かのが今元に戻すから」

彼女は信者さんに支えて貰って起き上がり、よろける足を踏みしめて沼の方へ向かった。

次の瞬間、全員が凍りついた。

かよのさんは、沼の縁にかがみ込むと、濁った水に口をつけて飲み始めたのだ。

信者さんも驚いて、おろおろと顔を見合わせるだけで手を出しかねている。

「大丈夫、かのちゃんは子供のころからここの水を飲んでいるよ」  
ウィズが静かに言って、あたしを抱き寄せて胸の部分を体で隠しながら、丁寧な顔を撫でてくれた。

「戸部多津奈が、自分の後を継ぐ者を選ぶ時に、沼の水を飲ませたんだってさ。」

こんな汚れた水だから、たいていは下痢をしたりして酷い目に会うんだけど、中には軽く済む者もいて、そういう弟子から次の陰陽師を選んだそうだ。その伝説を聞いて、魔窟の魔女はかのちゃんに沼の水を飲ませた。鬼畜だろう？

彼女も初めは相当いろんな病気をやったようだけどね」

ウイズが頭を撫でてくれるそのたびに、体の中に熱い物がみなぎって来て、心臓がドキドキして来る。皮膚は顔から指先まで、何故か外皮の外側をゼリー状のもので保護されたような感覚になった。

水を飲み終わったかよのさんは、戻って来て新田のそばにしゃがみこんだ。

「みせんさま」

「お願いしますお願いします」

信者たちがすぎるような目で拝みながら周りを取り囲む。

「美久ちゃん大丈夫？ 痛いところない？」

「ないわ。ありがとう、いい気持ち」

改めて自分の手を見ると、もうすっかりもとに戻っている。出来れば鏡で顔も見えて安心したかったが、今は我慢だ。ウイズが穴が開くほどあたしの顔を見ているから、まずい所があれば直してくれるだろうことを信じるしかない。

それよりあたしには、やらなければならないことがあった。

かよのさんはかなり長い時間、新田の上にかがみ込んで再生の努力をしていた。

ただ、人垣ではつきりとは見えないが、周囲の人たちの様子から、その努力が実ったとは思えなかった。

「ウイズ、かよのさんと代わってあげて」

ウイズの胸板に口を当てて、直接心臓に向かって話しかける。

「あなたがやったことなんだから、あなたが新田をもとに戻すベ  
きよ」

「やだ」

ウイズは堅い声で唸った。

「仮にもあなたのお兄さんに当たる人でしょ？」

「それが何？ 名前だけだ」

低いが激しい声で言って、ウイズはあたしを抱く手を離れた。

「あの魔女がどんな家庭を持っていたのか僕は知りもしない。

第一あの男、財産を奪い取る相手としてしか、魔女のことも僕  
のことも考えてないじゃないか」

「それが一番腹が立つのね」

あたしは自分からウイズに抱きついて、その心臓に爆弾を投下し  
た。

「あなたが、生まれて初めてお母さんにもらったお小遣いにケチ  
をつけた男だものね」

面食らったような魔術師の顔を、あたしはまともに覗き込む。

「もう素直に認めちゃいなよ。」

ウイズはね、お母さんに遺産の準備をしてもらえたことが、ホ  
ントはすっごく、すっごく嬉しかったのよ!!」

「美久ちゃん……」

「当たり前じゃん、誰だって嬉しいよ。」

だって、そんなこととして貰えたの、初めてだったんでしょ？」

「だから……今さら何考えてるんだって怒ってんじゃないか！」

「うん。わかるよ。」

今じゃなくて、して欲しい時がいっぱいあったんだよね？」

あたしにはウイズの気持ちがよくわかった。

あたしだって、母と会いたくなくて「ウィザード」に通い詰めた年月があるのだ。

あのときの怒りが何だったか、実際に母と仲直りしてからやっとわかった。

一番守って欲しい時に守ってもらえなかった怒り。

そしてそれを今、相手に言ったらきつと受け入れてもらえるだろうと思うと、それを言わなければいけないことへの恐れと恥があふれ出して来てどうにも処理がしきれなくなるのだ。

「何もかも終わった今、何故私だけ恥を忍んで告白しなければならぬのか。自分を救ってくれなかったあの人を、今、優しい菩薩様にするために、私が恥をかかねばならないのか」と。

ウィズがいい返事をくれないので、あたしはちよつと意地悪く言った。

「でもほら、かよのさん困ってるよ。ウィズのこと庇ってくれたのに。」

ウィズはかよのさんより能力が上なんですよ？

そのウィズにも、あんな状態になったら戻せないってことなの？」

「戻せないわけじゃない」

案の定ウィズは、例の負けん気を起こして反論した。

「ウソ。あれはとても無理よ。ほら、かよのさんが諦めて泣きだしちゃった」

「戻せるよ、戻そうと思えば」

「かよのさんだって治す気でいたけどダメだったわ。」

ウィズもきつと、自分で思ってるだけよ。賭けてもいい、あれは無理だわ」

魔術師はあたしの体を突き放して、人差し指を鼻先に突きつけた。

「絶対治せる。何を賭ける？」

「何でも好きな物をあげるわよ！」

「僕もそれを賭ける」

言い置いてウイズは人垣を割って新田のそばに歩み寄った。

「かのちゃん、どいて」

ウイズが新田をもとの姿に戻すのに、10分以上はかかった。

あたしはウイズを助けるために、信者さんと協力して新田の体を青草が元気に茂っている辺りまで運び、ウイズがそのエネルギーを使い切ってしまうとまた別の所に運んで、仕舞いには木の枝などを取って来て作業の足しにした。なんだが、大型の焚火に薪をくべている感じだった。

その甲斐あって、新田は活力を取り戻した。

最初よりだいぶくたびれた感じになった感否めないが、とにかく年相応の外見まで回復させたウイズの力はやはり大したものだった。

そしてその行為は、二つの劇的な変化をもたらした。

「ひいつ」

目を開けた新田が、ウイズの顔を見るや怯えて声を限りに叫んだのだ。

「お、おゆるしくださいおゆるしください、わたしがまちがっておりますましたわたしが」

地面に這いつくばる新田を見下ろして、ウイズはあきれたようにため息をついた。

すると、二つ目の変化が起こった。

「多津奈さまだ」

「これこそ弧仙さま」

「お願いします、私の娘にも触ってやってください」  
信者たちが次々とその場にひざまづき、ウイズの足に取りすがって拝み始めたのだ。

「勘弁してよ」

ウイズが頭痛に顔をしかめる。彼はもともと、この「欲」の思念に苦しんでいたのに、それが一気に自分を目指して集まって来たのだからたまったもんじゃなかったらう。

「美久ちゃん、助けて」

「はいはい、よく頑張ったねー」

あたしは自分の作戦が功を奏したので、機嫌よく魔術師に肩を貸した。

おぼつかない足取りの者を支えて、全員で暗がり歩いて建物へ帰る。

キシシ教授とハツちゃんが到着したのは、そういう状況の中だった。

教授は地元の警察を説得して、パトカーに乗ってやって来たのだ。

教授は自慢げに胸を張り、敗残兵のようにとぼとぼ歩くあたしたちの列に踊り込んで叫んだ。

「犯罪者諸君、被害者の皆さん、警察にご協力ください。

そしてわが有能な同胞もしくは弟子たちよ、水の分析結果を聞きたくはないかね？」

### 30、鬼のエキスの正体は

空気が読めないキシシ教授と、読まないのが仕事の警察官。

彼らの最高タッグによって、あたしたちはまとめて教団本部内に拘束された。

赤ちゃん殺害が今回未遂であることも、あたしとウィズが信者や新田と同じ立場じゃない事も、この際鑑みてはもらえなかった。

まあどうせ事情聴取は避けられないし、新田もかよのさんもあたしもウィズも、そこらへんで立ち話出来る体力は残ってなかったから、わざわざ文句も言わなかったのだけだ。

「ここで何が行われているのか」

最初に沼のそばでそう聞かれた時、新田は

「赤ん坊が生まれたので、沼の神にお見せして祈りを捧げていた」と答えて、

「宗教じゃないとテレビで言ってたのを聞いたがね」などと突っ込まれていた。

その後警察は、事務所に新田を呼んで職務質問をはじめ、その間あたしとウィズは、泊まり込んでいた信者さんたちと一緒に、昼間講話の行われていたホールで待たされることになった。

「教授、僕らは個室ってわけに行かなかったんですかね」

ウィズが、嫌味なくらい整った顔に辟易した表情を浮かべてぼやいた。

彼の足元には、まだ数人の信者がひれ伏して手を合わせている。

「ちよつとずつ人数が増えるのがイヤなんですけど」

「わはは、こやつらの信心はアラジン信仰だからな」

「アラジン信仰？」

「そうだ」

教授は面白そうに、床に這いつくばって祈り続ける信者たちを見下ろしながら説明を始めた。

「本来、信仰というものは、神に対してその偉大さを認め、尊敬し、恐れを感じて服従の気持ちを抱くところから始まる。ところがわれわれ日本人の宗教観の傾向として、『あそこで祈ると願いが叶うそうだ』と言っては、そこへ祈りに行く、という感覚があるだろう？」

『寄進をしたらご利益がある』と言われて、比較的軽い気持ちで供え物を持ち込み、あまり効果がないと別の神社に移ったりする神を恐れ尊敬する部分が抜け落ちていくんだ。

つまるところ相手が妖怪で、そいつをエサで釣って使役しているのと大差ない意識なわけで、我輩はこれを『アラジン信仰』と名付けたのさ。ランプの精にお願いごとをする感覚、って意味だ。

ランプの精は有能だが、人間の方がご主人様なのだからな」

「それって、遠回しに人を妖怪なんかと一緒にしてますよね？」  
ウイズに軽く睨まれても、教授は涼しい顔で言い放った。

「きみの場合、本当に人間離れしとるからしょうがないだろうが」

魔術師は教授の失礼な台詞を鼻で吹き飛ばしてから、傍らのパイプチェアを引き寄せて自分一人座った。あたしとハツちゃんは慌てて教授と自分たちの椅子を調達して来て、全員でホールの隅っこに座る。瞬く間にウイズの前に信者が這い寄ってくる。

他の信者たちは、席に座って不安げに隣と話をしていたり、うたた寝を始めたり、興奮してしゃべりまくったり、それぞれバラバラの対応をしていた。多分、教団へののめり込みようや理解度がまちまちだからなのだろう。

「で？ その分析結果つてのを見せて下さい。

僕はもつと時間がかかる物と思ってたんですが、随分早かったですよね」と、ウイズ。

「うん、実際ちゃんと必要な物を培養して専門的な数字を出すとなると、あと1週間は結果待ちという事になるんだがね。

我輩は大学の研究室にお願いして、結果を待つ間に取りあえず2つのことをやってもらった。

1つは3種類の水を顕微鏡で見て、一般的な河川や沼地の水と比べること。

2つめは、鎮痛作用に関する簡単な動物実験だ。今回来たのは、この2つの結果というわけだ」

あたしとウイズは、旅館のファックスで届いたらしい書類を覗き込んだ。ハツちゃんも一緒に覗いて来たところを見ると、教授は彼にも読ませる暇を与えていなかったようだ。

「信者の諸君もさぞ知りたいだろうなあ？

あとで教えてやったら、さぞかし驚くと思うよ。その後は、よもやご入浴なんぞする気になる物はおるまいねえ！！」

教授は信者たちに向かって、イヤミったらしく言い放った。

「どういうことです、これ」

ハツちゃんが叫んで、説明を求めた。ウイズは文面よりも、そこにある残留思念を読むので、おぼろげに意味がわかったらしい。

「助けてくれ」

つぶやいて、しゃがみこんでしまった。

なに？ 水から何が出て来たの？

あたしも慌てて書類を覗き込んだが、さすがに何が書いてあるの

かさっぱりわからなかった。

「我輩も専門家じゃないからな。分析結果を全部理解できたわけじゃないが」

キシソ教授が、あたしたちに説明してくれたが、理解はなかなか困難だった。

「河川の水の綺麗さを数値化したものがこれなんだが、このBODの数字を見たんじゃ解らない。

これはつまり、基準値の微生物がこの水の中の有機体を分解すると、どれだけの酸素が必要かということの数値化したものだからな。

問題は水中のバクテリアの種類が異常に画一化しているということなんだ」

あたしたちは返事に詰まった。そんな説明の仕方ではわからない。なにしろ素人には、バクテリアと有機体と微生物が、同じものか違うものかさえ理解できてないのだ。

「バクテリアって、バイキンですか？」

あたしが超初歩的な質問をすると、教授は一瞬返事に詰まり、

「バイキンというのは学術的には死語であって、体に害をなす最近の総称に過ぎんから、せめて細菌とか、いや、そもそも細菌の定義というものもだな。

わかった。わかった。さっぱりわからんのだな？

もういい、バイキンということにしておこう。

この水はな、ある一種類の未知のバイキンが、他の全ての微生物

物、ええとそれも説明があるか。

ああ、とにかく何もかもを、吸収して食い尽くして、増えるだけ増えて飽和状態で安定した水なんだ」

「それって、鬼のエキスだから、強い細胞の菌だったってことなんでしょうか」

「未知の、ということとは、ここにしかないってこと？」

「他を全部駆逐しちまったんですか、すごいですね」

とりあえず感動した一同を、教授はうんざりしたように見た。

「呑気な声を出すな。ことはもつと深刻だぞ。」

我々は未知の病原体に体をさらしたかも知れんのだ。

保健所から検査に来るまで、ここで足止めって事もありうるんだぞ」

「だ、だって、今まで病気になった人なんていなかったでしょう？」

「今のところそうだが、問題はもう一つある」

教授は顕微鏡の丸い画が書いてある書類の下から、別の書類を取り出した。

「3本のボトルを比べたら、やはりここで配布している「ご入浴用の水」は、市販のペットボトル飲料水の水だったようだ。」

そして沼から汲んで来た水には、それでもそこそこ雑多な菌が含まれておった。

問題はご入浴場の水だ。これが一番菌の画一性が高い。

その水に体を浸すと、苦痛が取れて気持ちがよくなる、ということ、大学の実験室はな、このご入浴場の水の中にネズミを漬けて苦痛を与える実験をやった」

「うわ」

「初めて水に漬けたネズミは、水に漬けない時と同じように苦痛を感じた。

二匹目以降は、少しおとなしくなったが、まだ苦痛は感じていた。

そこで、ネズミの尻尾を切り取って、水に放つてみた。

そうすると、その後のネズミは、水の中でどんなに苦痛を与えても、不快を感じている様子がなくなったそう。

麻酔作用がある、と見ていいだろう」

「でも、どうして尻尾を漬けた後に効果があつたんですか」

「バイキンくんがな、これはつまり、自分の餌だ、と理解したんだ。

餌が逃げ出さないように、麻酔をして快感物質を流す。

そういう特技のあるバイキンくんなんじゃないか、というんだな」

「え、餌ですか、人間が」

ハツちゃんが呆然とした声を出す。

「そうとも、他の何者でもありえない。

生き餌として人間を与えられたバイキン君は、次に人間が入浴した時に、ターゲットの苦痛を除去して食事の準備をする。

それを入浴の効果と有難がって利用するのは人間側の勝手だがね。

まあ、短時間の入浴だ。温水じゃないから、長々と入る人はおらん。

その間にバイキンが溶かすことの出来る皮膚の厚さなんて、微々たるもんだろう。

老廃物だらけのジジババの皮膚にはなんともないかも知れんな

あ  
「

「いやだな。 バクテリアがヨダレ流してナイフとフォーク持つ  
てるところ、想像しちゃった」  
ウィズが顔をしかめた。

### 31、魔術師の本当の気持ち

教授は人の悪そうな笑顔を浮かべ、居並ぶ信者を見渡した。

「聞いたかね、子羊諸君！

皮膚からはともかく、諸君の体には、肛門や尿道口、傷口などの穴がある。

そこから、食欲旺盛なバクテリアが諸君の体に侵入している恐れもある。

一度、病院で検査を受けることをお勧めしますよ！」

信者たちは、一瞬、息を飲んで声を詰まらせた。

しかし次の瞬間、それぞれがすごい勢いでてんでに何か言い始めた。

「俺に文句を言われたって困る」

教授が鼻でせせら笑う。

「でも教授、ご入浴については解りましたけどね。

かのちゃんが水を介して、エネルギーを移すでしょう。あれは麻酔効果じゃ説明できません。沼とあの能力の関係ってなんなんですか」

ウイズの質問に、教授の方が目を剥いた。

「それを君が聞くのかね。 さっき聞いたところだと、きみはあのかよのくんと同じことができるそうじゃないか。 君が一番結論に近い所に居そうなんじゃないかね」

「僕は沼の水を使ってません」

「じゃあ、一体どうやるんだね」

「ラインを読むんですよ。 エネルギーの流れを、一つの軌跡のラインとして読み取って、そこに力を加えるんです」

「どうやったらラインが読めるのかね」

「考えながら触れていると見えてきます。例えば自然で言うと、野原に木や草が生えて葉が茂りますよね。すると虫が増える。

虫を食べる鳥が増える。実がなると小動物も増える。彼らの落として行った糞や死骸で、地面に養分が補われる。それを吸ってまた草木が茂る。これで一つの生態系が閉じます」

「ふむ」

「ここで仮に、動物の死骸を突然野原に持ち込んだら、その分だけ生態系は潤いを増します。」

つまり、その地面は、たくさんの動物によって栄えたのと同じ過去を与えられたことになる。

同時に未来も、より豊かな物へと変貌する。これは、その動物からエネルギーが移動して未来と過去が変化した、という一つのラインだ」

今度は教授が鼻白んで顔をしかめる番だった。

「理屈はそうだが、そのラインをどうやって読む？」

「僕はいつも、その運命のラインを手繰って人や物を探します。だから、最初から見えるんです」

魔術師はこともなげに言って、そのあとで申し訳なさそうに付け加えた。

「だからその、説明はうまくできません」

教授はぼりぼりと頭を掻きまわして当惑の表情をした。

「うとううん、だとしたら、その読み取ったラインに力を加えると言うのはどうやる？」

「成功した方の運命を先に入れて読み直すんです。これはバーチャルで充分なんですけど、二度目にもう一回読んでやる時に、本物のつもりで流してやるんです。僕は今までそこどころがさっぱりわからなかったんですけど、かのちゃんに吸引されまくったら

その要領が見えて来たんです、つまり頭に浮かぶものと動く物とが違いがないとここまで引き上げるのにコツがいるんですよ」

「待て待て待て！」

ついにたまりかねて教授がウイズの話を遮った。

「きみの頭の中は、一体どういうことになっているのかね？」

さっぱり見当がつかん。お手上げだ！」

「やっぱり教授でもわかんないんだ……」

あたしはほっとしてつぶやいた。

ウイズのやっтерることが判らないのは、あたしが頭悪いせいじゃないんだという事が改めてわかってほっとしたのだった。

「ただ、水とエネルギー移動の能力の関係についてはちょっと面白い報告が書きこまれておるぞ」

教授が気を取り直して、最後の書類を取り出して示した。

「今のところ原因は不明だが、餌を投じたあとの水面に、微弱だが脳波に似た波動が生じているのではないかと書いてある」

「脳波？」

「意志があるのかしら」

「意思じゃないだろう、脳波は」

ああ、もうわかんない！

「それについては、帰ってからまた調査を始めるがな。」

その時にちょっと、吹雪クンの脳波を測定させて貰えると助かるねえ」

教授の申し出に、ウイズが眉をひそめた。

「もしかして、……全開時ですか」

「まあそんなとこだ。」

もしかしたら、ESPウェーブのようなものが実在するのかな」と

「ESP波ですか？

SFじゃよく使いますけど、あるんですかねえそんなもの」  
ウィズがいぶかしげに言った。

結局、警察はあたしたちの訴えを受けて、全員の身元調査をしたあと、新田と数人のスタッフを警察署へと連行して行った。まだ逮捕状も出てないし、必要な調書を作ったら一旦帰されるだろうと言っ話だった。

あたしたちは、一般の信者さんと同様に、警察からの連絡があったら出向くように言われて解放された。

ただし、警察からは、である。

教授の話では、「バイキンくん」の正体が判らない以上、病原菌の疑いがないかどうか不明なわけで、このまま解散すべきでない、とのことだった。それで朝になったら、警察からの依頼で保健所の方から人を寄越してもらい、一応の検診を受けてから解散することになった。

もともとこの時間に残っている人は、教団の宿舎に泊まることになっっている人ばかりだったので、朝まで居ることに異論を唱える人はいなかった。信者のほとんどが、病原菌の話でひたすらショックを受けていて放心状態だったせいもあるのかも知れない。

あたしたち4人は、入浴者用の休憩室に布団を運んで雑魚寝をすることにした。

さすがに通報者という事で、信者さんたちと同じ宿舎に入るのはまずいと思われたのだ。

自販機で買ったお茶のボトルで一息ついた後、ふと気づくとウイ

ズの姿が見えなくなっていた。

トイレかと思つて暫く待つても帰つて来ない。

「大丈夫かね？ 彼はかよのくんを助けようと思つてるんじゃないかね」

教授がしきりにそのことを気にしていたが、あたしは違ふと思つた。それならかよのさんが警察に同行するところから、ウイズは何らかのアクションを起こしたはずだ。

こういう時、ウイズの取る行動パターンはだいたい読める。あたしは2人分のお茶のボトルを持って、屋上へ向かった。

巨大な金色のガマの穂みたいな屋根が、ライトアップされて不気味に輝いている。

屋上はそのオブジェの後ろ側にあり、半分つぶされたみたいな形の空間だった。

ひそやかに物干し台なんかを設置してある。金色の異空間に不似合いなその生活臭が、笑える半面物悲しかった。

巨大ガマの穂が作り出す影の暗がり、あたしの魔術師は座り込んでいた。

汚れたセメントの上に、躊躇なく腰を落としている。

風になぶられる髪の毛に、ライトのかけらが弱く反射している。

立てた膝の上に、顎を乗せるようにして丸くなって、目だけが光を弾いて時折きらりと光る。

あたしはいつもこの瞬間、泣き出してしまいそうな自分を持って余す。

どうして、この人のこんな悲しいところばかり、好きになつてしまつんだらう。

ウイズは自分の気持ちを持って余すと、いつも人から離れて自分の暗闇にうずくまるのだ。

背中に寂しさを貼り付けて、視線に人恋しさを溢れさせ、それでも人を求めて動こうとはしない。

子供時代、求めても受け入れられなかった寂しさのはけ口を、彼はもう探さないのだ。

そして何もかもを、自分の胸の中に閉じ込める。

後ろから近付いて、肩にゆっくりと腕を回した。

「ウイズ、寒くない？」

「寒くないよ」

「ウソつき」

あたしは彼の首筋に鼻先をこすりつけた。

あたしの魔術師は寒がっていた。体ではなく、心の中で。

彼は今、ホントにいろんなことを考えなければならぬはずなのだ。自分の暴走のこと、かよのさんの立場のこと、流産したナギサさんのこと、新田のこと。

そのことをあたしに伝えようとしてほしかった。自分だけで閉じ込めてしまわず、口に出してもらいたかった。

「ホントのこと、言って」

おぶさるようにくつついて、ウイズの耳元で囁く。そうしていてももう吐き気が襲ってこないのは、単にあたしの気分で暗示が解けたためなのか、それともかよのさんの操作がなくなったためなのか。

「美久ちゃんにお礼を言わなくちゃ」

ウイズが、少しも有難そうじゃない口調で言った。

「きみが止めてくれなかったら、僕は新田を殺してた。」

心の中ではこれ以上人を害したくないと思ってるはずなのに、どうしてブレーキかけられないんだろう。美久ちゃんがいなかったら、僕はどうなってしまうのかいつも怖くなるよ」

「ウイズは我慢のし過ぎなのよ」

「我慢してないよ、新田にだって小藤さんにだって、その都度好きに文句言わせてもらってるじゃないか」

あたしは魔術師の正面に回り込み、伏せた顔を上げさせて瞳を覗き込んだ。叱られた子犬みたいな情けない表情を見て、やっぱりこの人のこういところが好きなんだ、と再確認する。

「それって逆でしょ？ 文句を言うのが本音じゃないくせに。

いやだとか嫌いだとか口では言いながら、完全にシャットアウトしないのはどうして？

ホントは心配だったり、ホントは好きだったり、ホントはつながつていたかったりするのをみとめないのが、ウイズの我慢のし過ぎの原因よ」

魔術師は何か反論しかけて、口を開いたまま言葉を詰まらせた。

あたしはその口元に、小さくキスをして頭を撫でる。

「ホントは好きなのに認めたくないのは、かよのさんと同じね？ よそで言わなくていいから、あたしには本当のことを言っただね。何度も何度も頭を撫でて、耳元で囁き続けているうちに、ウイズのこわばった視線が柔らかくなつていくのが判った。

そのままあたしたちは、黙ってくつついて、山の中の暗がりから押し寄せてくる葉擦れの音に、しばらく体を預けていた。

「美久ちゃん」

ウイズがぼつりと、ほとんど声を出さずに囁いた。

「もしもきみが勝ったら、僕に何を要求するつもりだった？」

「お墓参り、一緒に行きたいなって」

「誰の」

「ウイズのお義母さん」

「あの魔女の？」

「そう言っただけ嫌がるだろうなって思って。でも、曲りなりにも

遺産を貰うんだったら、挨拶くらいは行きたいなと思ったの」

あたしの魔術師はしばらく答えに窮していたが、やがて観念したようにうつむいて、

「ありがとう」

とても小さな声でそう言った。

「でも賭けは僕の勝ちだった」

「そうね。 ウィズは何が欲しいの」

「『同じものを賭ける』と言ったよ」

あたしはウィズの顔を改めて見直した。それからゆっくりと彼の首に抱きついて、肩口に頬ずりをした。

「ウィズ、大好き」

少年のような傷つきやすい心と、柔軟な優しさを持ったあたしの世界一の魔術師。

その腕の中で温められる幸せを、あたしは久しぶりに満喫していた。

「ねえ」

ウィズがさつきよりももっと小さな声で、あたしに囁く。

「もう我慢しなくていい？」

ブレーキ、かけなくっていいかな」

あたしの耳が突然焼けるように熱くなった。

何のことを言ってるのか、すぐにわかってしまうのはなんでだろう。

呼吸が乱れて、目まいがしそうだ。

「いい？」

もう一度聞かれて、ロボットみたいにガチガチになりながら、あたしは小さくうなずいた。

### 32、神様の思い人

教団本部の人けのない廊下を、二人で手をつないで歩いた。

信者のほとんどが別棟の宿舎へ移っているので、館内は静まり返っている。おかげで自分の心臓の音が耳元で叫ぶように馬鹿でかく聞こえる。

半歩ほど前に行くウイズは、いつも以上に静かだ。

静かで、それなのに妙な存在感がある。色艶の圧力を感じる。

まるで夜の闇を人の形に切り取って、屋上から中に持ち込んだみたいだ。

彼があまりに物音を立てずに歩くので、あたしは自分が世界一ひどい騒音女になったような気がして顔を赤らめた。

この人の腕に抱かれることについて、あたしには何の不安もない。臆病になっているのは、むしろ彼の方かも知れない。

ここ数日で、あたしにもわかって来た。

あたしがそうであるように、ウイズにとってもセックスは、高い敷居と頑丈なドアの向こうにある行為なのだ。

いつもはどんな大事なことで一人決めてしまうウイズが、この件についてのみ、最初からあたしの許可を求めて口頭で確認する。あたしの返事なんか、聞かなくても彼にはわかるはずなのに、それなしでは1歩も前に出ようとしらないのだ。

あたしの手を引くウイズの掌に、今でも軽いためらいがある。

その重みがあたしに伝わり、心臓の音をさらに増幅する。

上の階から順繰りに回って、ウイズはとうとう見つけた。

その部屋だけは朝までの間に、人が訪れる運命を持っていなかった。

た、ということらしい。

ウイズがドアを開けた丁度その時。

嫌な予感がした。胸の奥から不快な泥のようなものがこみ上げて来る。

吐き気だ。

ドクン、と波打ってせり上がって来る。

(ウソ！ 治ったはずなのに……！)

口を押えるや、ウイズの手を振りほどいて駆け出した。洗面所を探して廊下を走る。

後ろでウイズが何かを叫んでる。

その声を聞いただけで、目に涙が溜まって来た。

ウイズごめん。あたしやっぱりダメかも。

でも大好きなのはホントだよ。わかってくれるよね？

「美久ちゃん!!」

ウイズがまた叫んだ。悲鳴に近い声だ。

次の瞬間、何かにぶつかったような衝撃を受けて、あたしは床に転がった。

右ひざをぶつけ、激痛に顔をゆがめる。転げ落ちる涙の隙間から、信じられないものが見えた。

浴衣を着たかよのさん。

その姿が、廊下の灯りの中で頼りなく揺らめいて光っている。

(幽霊……?)

何を馬鹿な。かよのさんは生きてるじゃないか。

でも、待って。さっき新田と一緒に警察に行ってから、1時間ちよっとしか経ってない。そんなに早く帰れるものなのかな。

それに、今まで忘れてたけど、彼女怪我をしていたのに、傷の治

療もした様子がなかった。大丈夫なのかなって、実はさつきもちょよっと思った。まさか死んじゃったりしてないよね？

恐る恐る立ち上がって近付こうとした途端、かよのさんの手が高速で一閃した。

あたしは頬を張り飛ばされ、よろけて再び座り込んでいた。そこへあろうことが、今度はつま先で思い切り蹴りを入れられた。両手で顔を庇ったので腕を蹴られ、仰向いたところを胸の上をドンと脚で踏まれて倒れる。

「やめろ！」

追いついて来たウイズがかよのさんを押しのけた。

あたしの前へ立ちはだかつて庇いながら、驚いたように相手の顔を見直した。

「かのちゃん、きみ、実体じゃないな？」

かよのさんは口をゆがめて、子供みたいな憎たらしい表情をした。

「だって警察の人、ミズモリさんとの話がいつまでたっても終わらなくてつまないんだよ」

どういう意味か解らないのでポカンとしているあたしに、ウイズが説明してくれた。

「かのちゃんは寝ている間に、夢ではなくて現実の中へ迷い出してるんだ。」

以前、夜中に電話をしてきたと言ってただろう。あれも、眠ってるかのちゃんがやったこと。

本当の体は今、警察署で眠り込んでるんだよ」

「でも体がないのなら、何故暴力をふるう事が出来るの？」

魔術師は苦笑した。

「それが説明出来たら、法廷でも有罪が証明できるんだろうけどねえ」

かよのさんの両目が極端に吊り上った。鬼の形相だ。

殺人のことに触れられて怒ったのかと思っただら、そうではなかった。かよのさんは、ゆがんだ口から鋭く叫んだのだ。

「こーちゃんは今、かのと話してるんだよ！ 美久は邪魔しないで。」

かのは、夢の中でなら何だって出来るんだからね」

彼女はあたしとウイズが内緒話をしているのが気に入らなかったのだ。子供と一緒にだ。

「かのちゃん、夢の中で美久ちゃんに電話をかけたのはきみだろ？」

その時美久ちゃんの昔のことを聞きだして、吐き気が出るように暗示をかけたのも君だ」

「うん、かのがやった」

ウイズに話しかけて貰えて、かよのさんは単純に嬉しそうだった。話の内容が自分に不利なことだとわかっているのかどうかさえも不明だ。

「それは新田……ミズモリさんにやれって言われたわけ？」

「違うよ。かのが自分でやった」

「どうして！」

「かのは何回もこーちゃんに電話したのに、こーちゃんいつも忙しいって言った。」

なのに、美久はいつもこーちゃんという、お話したり遊んだりしてる」

待たされてばかりだけだね。

「かのちゃん」

ウイズが、目立たないけど濃厚な感じのため息をついた。

見た目の表情は変わらなくても、相当怒ってるってわかる。

「美久ちゃんは僕の婚約者だ。わからないの？」

僕は近々結婚するんだ。他の女と遊べないし、そのつもりもないんだからね」

「かのは『人』じゃないもん！」

狐仙は神様だから、人間と同じことしなくっていいんだよ」

叫びながら、かよのさんはウイズに近寄って来た。

実体であるウイズの体の近くで見ると、彼女が本当はここにいないという事が良くわかった。

「こーちゃん、美久と結婚していいから、かのもとも遊んでよ！」

そうしたらかのは美久にいじわるしない。かのは神様になっ

たけど、こーちゃんのことホントに好きなんだよ」

「ああ知ってるよ！」

叩きつけるようにウイズが言った。ひやりとした、刃のような声だ。

「かのちゃんが僕を好きなことも、美久ちゃんを邪魔に思ってることも、とつくに全部読んでるさ」

「ぜん……ぶ？」

かよのさんの表情が急にこわばった。

「ああ、全部わかってた。だけど新田に美久ちゃんに暗示をかけるよう強制されてたんなら、どのみちやるしかなかっただろうから、怒るのも可哀想だと思って我慢してたんだ」

かよのさんはもうウイズの言葉を聞いてはいなかった。細い声で、

「全部って、ホントに全部知ってるの？」

そう聞き返した。

「知ってるよ」

「ウイズ！」

かよのさんが泣きそうな顔になったのを見て、あたしはハツとした。以前、その言い方はなんとかして！と言いそびれたことが

ある。

魔術師は「全部」と言ってるけど、24時間一人の人を覗き続けているわけじゃない。

たまたま覗いたその時に、脳の表層に浮かんでいた考えは洗いざらい読まれてしまうけど、それはウイズにとつての全部であつて、読まれる側から見たらたつたの一部だ。

けどこんな風に言われたら、誰だつて見られなくなつたあれこれを、全部知られていると思つてしまふじゃないか！

ウイズは普段おとなしい分、一旦怒り始めると容赦なかつた。

泣きそうなかよのさんの様子にはお構いなく、暗示を解かない事を糾弾した。

「昔のかのちゃんは優しかつたじゃないか。」

そりゃ、魔女の言いなりにもなつてたけど、人の役に立つことはいつも喜んでやつた。

自分から人を傷つけるなんて絶対しなかつたのに」

かよのさんが、視線を宙に浮かせてガタガタ震え始めた。

「やだ、いやだよ。こーちゃんが知ってるのはイヤ。」

かのはイヤ、見たらダメだよ……」

「だつたらすぐに美久ちゃんの暗示を解くんだ」

「イヤだあ！」

パニックを起こしたかよのさんは、ろくに相手の言葉を聞いてはいなかつた。

自分の叫び声しか聞こえないように、両手で耳を塞いでしまったのだ。

そうして足を思い切り振り回して、ウイズとあたしを拒絶した。

「見たんだね。こーちゃんは見たんだね。」

だからかのこと嫌いになっただね」

「何のことを言ってるんだ？ 暗示を解く気があるのかないのか

……」

「かのこと好きか嫌いか聞いてるんだよっ」

魔術師は彫像のように整った眉を上げて、無然とした表情でかよのさんを睨みつけた。

そうして、氷のような言葉を、薄い唇から吐き出した。

「僕は、今のかのちゃんは」

「ウイズだめ！」

あたしは遮ろうと思ってウイズに掴みかかったが、間に合わなかった。

「大嫌いだ」

フロアの白い壁に、悲しげな悲鳴が響いてこだました。

その悲痛な叫びと胸の中の重い余韻を残して、かよのさんの姿はフロアから消失したのだ。

後にはしつこい反響とわずかな耳鳴りだけが残った。

それは、異変の終わりじゃなかった。始まりだったのだ。

### 33、ジャックと豆の木

「おい、大丈夫か？」

「何かありました？」

階段を駆け上って来たのは、キシシ教授とハツちゃんだ。

さつきからかよのさんの出す大声を聞きつけ、部屋を出てあたしたちを探していたらしい。

かよのさんに叩かれて、痛みよりも精神的ショックで座り込んでしまっていたあたしを、教授とウィズが引き起こしてくれ、怪我がないか調べてくれた。

異変はその時起こった。

ドウン、という轟音と同時に、床が激しくバウンドした。

建物が不気味な音を立ててきしむ。

もう一度床に倒れた。今度はみんな一緒にだ。

壁際に飾られた花瓶や石のオブジェがひっくり返し、あちこちで物の壊れる音が響いた。

「なんだ、地震かっ」

「危ないぞ。もっとこっちへ来い」

這いずるようになってロビー中央のテーブルに頭を突っ込もうと全員でひしめき合う。

地面はまだ揺れている。でも、揺れよりももっと不安を煽ったものは、音だった。

外から聞こえる、地鳴りのような音。建物北側の窓から、それは聞こえて来ていた。

一番に気付いたのは、やはりウィズだった。

彼は肉眼とは違う目で、窓の外の暗がりで起こっていることを見てしまったのだ。

「……木が」

そう言ったとき、ポカンとした表情で黙り込んでしまった。あつけにとられたと言う感じだ。

教授が窓に駆け寄ってシャッターを開け、外の闇を見てウイズと同じ表情になる。

「ガボテン島って知ってるか。知らんだらうな」  
わけのわからないことを、口の中でポツンと言った。

窓の外には、山の上から見下ろす街灯りが盛大に広がっていた。その町明かりの端っこ、一番山寄りのあたりに、さっきまでなかった小ぶりの山がひとつ出現していた。いや、山にしては線が細すぎる。とにかく1本の太い角の様なシルエットがによつきりと生えていたのだ。

よく見ると、それは木の幹だった。

それも1本じゃない。広い範囲に生えていた木が、伸びて伸びて、伸びた先で一つに集まって身を寄せ合っているのだ。それが三角に影を作って、まるで小さな山のように見える。

その頂上に、クリスマスツリーのように可愛らしい灯りが一つ付いていた。

赤い小さな交番の灯だ。

この山のふもとにある交番の建物が、木の束で持ち上げられ押し上げられて上空に移動しているのだ。

「なにあれ……どうなってるの！」

「かのちゃんが中にいる」

ウイズが答えた。その瞬間に、交番の灯が消えた。

「電線が切れたんだ。まだ伸びるよ、どんどん」

唸るような振動は、普通の地震とはまるで違う。木がみしみしと伸びて太くなり、周りの土をさらって行く、そのために起こる揺れは、身震いする動物の背中に居るような感じだった。

「まさか、かよのさんがやってるの？」

「たぶんね」

教授が頭を掻き毟る。

「うううん。こんな事は不可能だ。いくらエネルギーを注いだからと言って、生物の生育にはそれなりに時間がかかるんだ。

こんなにマンガみたいに二ヨキ二ヨキ伸びまくるなんてのは、科学的にあり得ない」

「教授、それ言っちゃうときりがないですよ。」

彼らのやってることは初手から科学的には不可能なんですからハツちゃんが諦めの口調で教授を諭した。

魔術師は原因を知ることが苦手だ。それでもいろいろと情報は見えるのだろう。ウィズは落ちて来る埃から頭を庇いながら、キシシ教授に質問した。

「教授、教えて下さい。生贄を捧げて願いを掛けたのに、戻って来た死者を厚遇しなかった者はどうなります？」

「厚遇しないとは？」

「だって死んだ家族とかですから、つまりはゾンビなわけで、気持ち悪くて逃げ回った人もいるんじゃないですか？」

家に入れて丁寧に接待して、何でも言うことを聞いてやれば願いが叶うんでしょうけど、そうでなくて追い払ったりしたらどうなるんです？ 罰が当たったりするんですか？」

「そんなことは伝わっておらん」

教授はあきれ顔で言い放った。

「大体、人間を捧げること自体、我々が立てた仮説だったくらいだからな。願いをかけた話はいくらでもあるが、結局死人が歩いて来たという話は伝わっておらんのだ。」

捧げた子犬が戻って来て、家に入れてご飯をやったという伝説が一つあるだけだ」

「締め出したとか、虐待したとかいう話は」

「ない。あつたとしても誰に伝えるんだそんな話」

ウイズはしばらく黙っていた。その間に、木で出来た山の影はどンドン背が高くなる。

「すそ野がどンドン広くなります。ここも、下手すりゃ巻き込まれてまずいんじゃないですかね」

ハツちゃんが心配を始めた。その言葉を遮るように、ウイズがまた口を開いた。

「教授、もし願いが叶ったとして、叶った後、死んだ生き物はどこへ行きますか」

「どこって」

「もう満足ですという事になったら、死体から神様が抜けるんですか？」

「それも具体的に描写した話は伝わっとらんが、理屈としてはそうだ。死体が死体になって終わる」

「神様は消えてしまう？」

「さて、まあそんなところじゃないかと思うだけだね」

ウイズは額に深いしわを寄せ、暗がりには伸び続けるシルエットを睨みつけた。

「かのちゃんの頭の中では、自分はもう死体にならないといけな  
いんだ。」

でも、なれなかった」

「わかんないからもうちょっと説明して。 どういう意味なの？」

「あたしが質問すると、ウィズはやつと窓から視線を外した。」

「つまりね、かのちゃんを利用して、自分が金持ちになるのが新田の望みだっただろ。それは、魔女から引き継いだものだから、かのちゃんの存在理由自体が、新田の願望とイコールになっていた」  
「そうね、彼女は新田の言いなりになることで自分の存在意義を見つけてたわ」

「そうして新田はかのちゃんを売り込んで教団を立ち上げた。病気の人には彼女がパワーを与える。」

でもその他にも富や成功を祈る人、人の死を願う人、いろいろな欲望が持ち込まれた。もちろん宗教系だから、その全てが叶えられなくても人は集まるし、金儲けも出来るよ。」

「だけど大金じゃない。きちんとした神様仏様を祭っているわけじゃないんだから、口コミでいきなり大金を投じさせるには、それなりに実績がいるだろ。」

それで新田はもう一歩、やばいエリアに踏み込んで行ったのさ」

あたしたちが小さく息を飲む音は、1階で何か大きな棚の様な物が倒れた音にかき消された。

「人を殺してほしいと願う人には、かのちゃんが夢の中で対応した。でも、それ以外にも、エネルギーだけではどうにもならないことがある。それはどうすればいいのか。」

もう一つ問題になったのは、かのちゃんが利用するエネルギーの出どころだった。

「たくさんの信者を抱えるようになったら、庭の草木だけじゃなくても足りっこない」

「だから、子供を買い取って水にエネルギーを与えて、それを依頼主に買い取らせるわけ？」

そんなこととして、例えば金持ちになりたいとか願う人の依頼はどう叶えるのよ」

「いやいや、大丈夫だね。叶えられそうな奴だけ引き受ければいい」

教授が事もなげに言った。

「もしも叶えられそうにない願いを持ち込む者がいたら、そんな願掛けはただの伝説です、気長に信心なさいとか言って諫めればいいんだ。持ち込む方だつて半信半疑だ、そうなのかと大人しく諦める」

「で、ある程度信者の信頼も得て、水のパワーだけで基本的にかのちゃんが奇跡を起こさなくても一定の金額が入って来るようになったので、新田はかのちゃんがじゃまになったのさ。」

いつ彼女が不用意にいろんなことをしゃべってしまうかわからないからね。

で、新田はかのちゃんを教団から締め出し始めた。かのちゃんがそれに抗議したら、もうお前は必要ないとでも言ったんじゃないかな」

「じゃあ、かよのさんはもう自分の役目は終わったと思ってるのね。」

だから死体になるはずだと思ってたのに、ならなかった」

「そうだよ。そしてそこから先は、なんの伝説も残っていない。だから、かのちゃんは自分で神様らしい結末をつけることにしたんだ」

「それがあの馬鹿でかい木の山なの？」

「そう」

ウィズは悲しげに窓の外を見た。膨らみ続ける幹の裾野は、さつきよりもかなりこちらに近付いて来ている。

「かのちゃんは、天に帰ろうとしてるんだ」

全員が何か意味不明の声を出してウイズに注目した。

「ジャックと豆の木かね」

教授が間延びした声であきれて見せた。

「そうです。彼女ああいう子だから、思ったことを全部即日実行してしまうんです。」

例え自分の想像で考え付いたことでも、すぐにね」

「そうだとしたら大変じゃないかね。おとぎ話じゃないんだから、天まで届く植物なんて作れっこない、地球には重力がありその外には成層圏がある。この事実を曲げることは、いくら超能力者でもできんだろう」

ウイズは唇を噛んで、窓の外の異様な光景を睨みつけた。それからゆつくりとあたしの方に向き直った。

「美久ちゃん、彼女を止めるには、どうしたらいいと思う？」

「ええ？ それあたしに聞くの！？」

かよのさんのことが一番わかっているのはウイズのはずだ。

「だって、美久ちゃんはいつも僕が暴走するのを止めてくれるよ。」

あれは一体どうやって思いつくの？」

魔術師は、整った顔をとことん生真面目な表情で満たして、あたしの瞳を覗き込んだ。

### 33、ジャックと豆の木（後書き）

こんな時期なので、震災を思わせるような描写はできるだけ避け  
たかったのですが、地面が揺れると書かないわけに行かなかったの  
で、出来るだけ簡単に描写しました。地震ではないのですが、不快  
に感じられた方がいらっしゃったら申し訳ありません。

ガボテン島は白黒テレビ時代のアニメーションです。無人島に  
漂流して、樹上の丸太小屋のようなものに住む話だったと思います  
が……ああ歳がバレル。誰も知らないんじゃないかしら。

### 34、浴室のオルフェウス

「おい、危ないぞ。あの高さじゃもう重心が持たん」  
メリメリと音を立て始めた木の束の山を見て、キシン教授がうな  
った。

月夜の空に伸び続ける「ジャックの豆の木」は、情景としてはメルヘンだったけど、呑気に見とれていられる代物ではなかった。

「ウイズの暴走を止める方法って……」  
そんなことを聞かれても、ノウハウがあればこつちだって苦勞は  
しない。

第一ウイズの場合は、大抵がブレーキの故障というか、興奮しすぎで制御不能になるだけで、本人がそれを望んでるわけじゃないから、意識を別の所へ向けただけでも止まることがある。  
でもかよのさんの場合は違う。動機はどうあれ、彼女は自分の意志であの豆の木を伸ばしている筈なのだ。

「待つて。 動機……」

彼女の動機、つまりかよのさんを天に駆り立てた物。

それはやっぱり、ウイズに言われた「大嫌い」の一言だろう。

としたら、彼女の心の中は今、役目を終えた神様ではなく、拒絶されて絶望した女の子の悲しみでいっぱいのはずだ。いや、彼女は既に新田にも突き放され、実の親にも育ての親にも愛情を貰わなかったことで、子として人間として絶望している。

世界中に見捨てられた女の子が、あのメルヘンチックな豆の木を伸ばし続けているのだ。

あたしの頭の中に、真っ赤な炎がよみがえった。

あの日、燃え盛る炎の中で、小さなウイズが泣きながら言った言

葉。

「僕は僕のが嫌いだもの。」

僕はきつと、僕のことを殺してしまう!」

「ダメだ、曲がる。曲がって行く……」

伸びすぎた枝の先端がゆっくりと傾き、枝にからまって押し上げられていた交番の建物を横倒しにした。投球フォームに入るピッチャーの腕のように、豆の木の先端は交番を握ったまま弧を描いて傾いでいく。

あたしの悲鳴に混じって、ビシビシと幹がひび割れる音が夜空にこだました。

たわみ過ぎて耐えられなくなった幹の1本が折れると、そこからますます傾いて行き、さらに1本、また次の1本……。そして。

折れた豆の木と握られた交番が、地響きを立てて落下して行くのを、誰も止めることが出来なかった。

長い夜は明けかけていた。

けれども現実の闇はさつきよりもさらに濃く、深い霧の中にあたしたちを誘い込もうとしていた。

交番の建物が落下した場所は、山の中腹に階段状に作られた水田の中だった。

幹の大半も、人や人の居る家屋を押しつぶすことはなかった。資材倉庫の屋根を突き破ったり電柱をなぎ倒したりしたただけだ。夜明け前で人通りがなかったことも幸いしたのだろう。

交番の中にいた者だけが、病院に搬送された。

新田とかよのさん、警官二人と、急遽応援に来ていた県警の職員がひとり。

あんなに高い所から倒れ落ちたのに、全員が即死を免れたのは、単なる奇跡ではなく、やはりかよのさんに殺意がなかったからだろう。

それが証拠に、面識のなかった警官と職員は、軽い打撲と手足の骨折。

新田は頭を打っていて手術が必要だったが、命に関わる怪我は無し。

それなのにかよのさんだけが、全身打撲と頭がい骨骨折のために、生命の危険に瀕していたのだった。

集中治療室に入ることは出来ず、廊下で延々と待たされた。

スタッフルらしい白衣の青年を捕まえて聞いてみると、手術は無事に済んだのだが、血圧が下がったまま戻らない等、危険な状態が続いているという事だった。

「僕がひどいこと言ったから……」

廊下のソファに座って、魔術師は唇を噛んで、じっと足元の床を睨んでいる。

「ウイズはあたしの為に怒ってくれたんだもん、ちゃんとわかってるよ」

慰めようとしたが、あまり効果はなかったようだ。

しばらくしてウイズは、顔を上げると重い口調で言った。

「美久ちゃんに相談があるんだけど」

「相談」

珍しいこともあるものだ。何度言っても、彼は事前に相談する

ことが出来ないでいたのに。

「迎えに行っても、いいかな。かのちゃんを」

「迎えに？」

「連れて帰って来る。このままじゃ、絶対に帰って来ないんだ」

「あたしの時みたいに？」

「そうだよ。川を渡る前に捕まえる」

「できそう？」

ウイズはうなずかなかつた。怯えたような瞳で、一瞬だけあたしの目を見て、すぐにそれを伏せた。

「美久ちゃんの時よりずっと難しいよ。」

美久ちゃんはホントは死にたくなかったけど、夢の中では凄く抵抗しただろ。

かのちゃんは最初から自分が望んであの世へ行きたがってる。どれだけ嫌がるかわからないよ。

おまけに今回は、僕には最終兵器がないんだ」

「最終兵器？」

「美久ちゃんにプロポーズした、ああいう言葉がない。」

かのちゃんが僕と一緒に帰りたいと思うようないいことを、一つも提示してあげられないんだ」

「もし、連れて帰れなかったらどうなるの」

「わからない。でも、あんまり長い間ああいう夢の中に入っていると、まずいんだ。」

向こうが『渡る』時に引っ張られてしまったりする。

せめて30分くらいで帰って来ないと」

「あたしが時間を計って起こしたらどうかしら？」

「そうだね、でもきつと声は聞こえない……」

ウィズは突然、決心したように立ち上がった。

「美久ちゃん、入院患者さん用の浴室を、30分だけ貸してほしいって頼んでくれない？」

「浴室って」

「時間がないから早く。僕は薬を飲んで来る」

洗面所に駆け込むウィズを見て、いよいよ切羽詰った状況と判り、急いでなるべく偉そうな看護師さんを探して頼んでみた。

でも結局、あたしはたいして役に立たなかった。

浴室を貸してほしいと言うと、誰もが言下に拒絶したのだ。患者でもない人を、病棟に入れること自体よろしくないという事らしい。

ところが、薬を飲み終わったウィズが、取って置き of 憂い顔を作って中年の看護師に頼み込むと、あっという間に事は解決した。

彼女は態度を一変して、外科の婦長さんを誤魔化して頼んでくれたのだ。悔しいけどこの際、営業用のマダムキラー発動に目くじらは立てまい。

教授とハツちゃんに後を頼んで、あたしとウィズは浴場にやって来た。

入院患者さんが車椅子ごと入れるように作られているので、浴槽の外がやたらと広いアンバランスなお風呂場だった。

ウィズは浴槽にお湯を入れながら、景気よく服を脱いであたしをドン引きさせた。

まったくもう、目のやり場はどうしてくれる。

しかもまだくるぶしまでしか溜まってないお湯の中に座り込んで、あたしを手招くではないか。

「美久ちゃんも脱いで、ここに座って」

「でええええ？」

「早く。僕を支えてくれないと困るんだよ」

「ふ、ふ、服着たままじゃだめ？」

そりゃあたしたち、恋人同士ですから多少はいろいろエッチなこともやってる仲でござんす。

でもこんな明るいところですっぱんぼんってのは、目のやり場っていうより気のやり場に困るって言うか。

「美久ちゃん」

ウイズは険しい顔であたしの手を引つ張った。

「僕がもしその気になったら、君が服を着ていようがいまいが、全部見ることが出来るって、わかってるね？」

知ってるけど、そんなこと考えたこともなかったですよ！！

「わかってるなら早く脱いで！」

あ。ちょっと怒ってる。

わかったよ時間がないのね、非常事態なのね。はいはいはい怒らないでよほんとにもう。

半分やけくそでエヤツとばかりに裸になり、ウイズと向い合せて浅い湯の中に腰を下ろした。

湯船の縁にしっかり背中をつけるように言われ、縋って体を半分倒す格好になる。

そのあたしの腕の中に、ウイズはゆっくりと倒れ込んだ。

対面で子供をだっこするみたいに、胸の上に魔術師の頭が乗っかり、あるうことか胸の谷間に鼻先を突っ込む感じになる。

「ちよつと、ウイズ……」

「ミギワの気持ちかわかるな」

余計なことと言わんでいい。

ウィズは半眼になってだるそうに顔を上げ、ゆっくり説明した。だいぶ薬が効いて来たらしい。

「このお湯の量がタイマーになるから、こうしてじっと支えていてくれる？」

お湯が溜まって口元に来るまでには帰れるように頑張るけど、もしも間に合わなかったら、何とかして叩き起こして。

音より感覚や匂いの方が夢の中に届きやすいから、お湯は熱めだけどぬるくしないで我慢して」

「い、いいけどどうして裸なの」

「感覚を伝え合うためだよ。」

美久ちゃんの、肌の匂いを頼りに帰って来るから」

「ここここ、この男。」

今ものすつごくいやらしいことを言ったんだけど自覚は……ないんだろっな。

「も、もしお湯がウィズの口の上まで来るよりも先に『引っ張られ』ちゃったらどうするの？」

「そうだね。その時も起こして貰おうか。」

前にやったみたいに、僕の目を片方置いて行くから」

ウィズは緩やかに首を伸ばして、あたしの右目に温かいキスをくれた。

ざざざあとお湯の流れ出る音。

立ち込める湯気の中で、ウィズは目を閉じた。

とびきり深い瞳の黒が、ゆっくりと瞼の奥に閉じ込められて見えなくなる。

そうしてあたしの魔術師は、オルフェウスのように黄泉へと旅立

って行ったのだった。

### 35、ご神体の首

魔術師が眠った直後、あたしはもちろん後悔した。それも強烈にだ。

他の女の為に死地に赴こうとするカレシを、止めるどころかホイホイ応援する女がどこにいる？

しかも相手の女はカレシにぞっこんと判っているのに。

嫉妬心がないわけじゃなかった。

1週間ほど前のあたしなら、引っぱたいてでもウイズを止めたかもしれない。あなたは誰に命を懸けるの、あたしを救い出してくれた行為は、あたしへの愛情からじゃなかったの！とか言って、怒りまくって泣いたかもしれない。

でも今は、あたしの中には以前と違うバイブルがある。

「美久ちゃんしか要らない」

そう言ってくれたウイズの言葉がある。

そう、だからこそ、この場面でウイズはあたしの腕の中にいるんじゃないか。

そんなことより今のあたしは、ウイズの後悔や痛みの方が気になっていた。

ウイズは以前にも、女の子を手痛く振って傷つけたと言っていた。いや、多分傷つけたと思って彼自身が傷ついたのだろう。そして、もう2度とやらないと心に誓ったはずなのに、今回かよのさんを、救いようのない言葉でふってしまったのだ。

ウイズはほつたらかされて育った子供だ。ひとから拘束されるのに慣れてない。

増してや脅迫めいた言動でがんじがらめにして来る女に、嫌悪感を抱くのは無理ないことかもしれない。

でも、かよのさんもウイズにとっては、家族に当たる人なのだ。決して失っていい人じゃないんだ。

あたし、決めたんだ。 ウイズの家族はあたしの家族。

例えウイズ本人が突っ撥ねても、いや、それならばなおのこと、あたしは彼らを拒否しない。

ただでさえ狭いウイズの交友関係を、あたしが狭めるようなことをしちやいけない。 ウイズが彼らを嫌っているのだから、本心じゃないことが判ったんだから。

熱いお湯がゆっくりと、座り込んだあたしたちのお尻あたりまでを浸している。

このお湯が口元に這い上がって来るまでに、ウイズはかよのさんを説得して連れ戻らなければならないのだ。

あたしは眠ったウイズを支えながら、ゆっくりと目を閉じた。

右目の奥に、もう小さな光が浮かんでいる。 ウイズがかよのさんの夢を、あたしに送って来てくれているのだ。

耳を澄ますとかすかに、太鼓の音が聞こえて来たので驚いた。

ウイズから借りたのは右目だけなのに、音がするってどうしてだろう。

いや、集中すると匂いもする。 イカを焼くようなお醤油系の匂いだ。

「お祭り？ あ、夜店が見える」

そうか、五感を共有してるからか。

現実のあたしたちは裸で密着しているので、触覚や嗅覚まで互いに通じ合っている。その感覚が影響して、右目の映像と一緒に音や匂いもキャッチしているという訳だ。

あたしは顔を伏せて、魔術師の髪の毛の中に鼻を突っ込んだ。

以前ウイズがあたしにやったように、ゆっくり深々と息を吸い込んでみる。こうすれば相手の考えが、頭に流れ込んでくるとウイズが言っていた。

ドンと映像が立ち上がった。

お祭りの屋台が、目の前にずらりと並んでいる。

笛と太鼓の祭囃子が聞こえて来た。

広い境内に、太鼓の音が響いている。

縁日の人ごみの中を小走りに進むウイズの右目を通して、あたしはあたりを見回した。

カタカタと下駄を鳴らして、浴衣を着た子供が数人、笑いながら走って行く。

ずらりと下がったアセチレンランプの下に並んだ屋台から届いて来る、いろいろな音や匂いが懐かしい。

風鈴の音色。イカ焼きやタコ焼きの焼ける香ばしい匂い。

笑い声、おもちゃのピストルの音。

金魚すくいの水にライトが反射して幻想的な色になっている。

最初のうちイライラと走っていた魔術師の足取りが、だんだんゆっくりになり、そのうち周囲と同じテンポのそぞろ歩きに変わって

行った。

屋台の見慣れぬ食べ物や、子供たちが手にしているおもちゃ、風船釣りのヨーヨーや綿あめ。それらの物に我知らず目を奪われる魔術師の様子に、あたしは胸が痛くなる。

あたしの魔術師は、小さい頃から人ごみが苦手で、お祭りの思い出が一つもないそうだ。

今年こそはと言いながら、彼の仕事が土日集中する類のもので、まだ一緒に行くことも出来ずにいる。

そうか、これがかよのさんの夢。

彼女は小さい頃から、神棚と神社を遊び場に成長したのだろう。

ここは景色から判断して、教団のある田神社ではなく、もっと町の中の平地にある神社のようだ。

もしかしたらウイズも一緒に暮らしていた、あの河畔の町の神社かも知れない。ウイズがそこから教会に通って暖を取っていた間に、かよのさんは神社に出入りしていたというのが面白い。

ウイズの視線が下がった。

小さな子供を次々と目で追っている。かよのさんが子供の格好をして居るかもしれないので探しているのだ。

夢の中で、夢を見る本人が現実の姿そのままでは限らない。浴衣を着て澄ましている子、走り回って親に叱られる子、食べ物で口をべたべたにしている子。

かよのさんらしい子供は見つからない。そうこうするうちに、神社のお社についてしまった。

笛と太鼓の音が、ひときわ大きくなる。

人ごみをかき分け、神社の正面に立って見てびっくりした。

普通はしめ縄や賽銭箱が設置してある入り口に、黒い格子がはまっていたのだ。しかも神社によくある木の格子じゃなくて、動物

を入れる檻の様な鉄格子だ。

奥には赤い提灯が並べて吊ってあり、中はかなり明るい。床の左端に小さな木の椅子と、同じく小ぶりの卓がひとつ設置されており、中央には、赤い布のかかった四角くて大きなものが置かれていた。

ドンドン、ドンドンと、今までとは違ったりリズムで太鼓が打ち鳴らされた。

社の正面に詰めかけた人々がオオオと声を上げる。

白装束の神主が現れて、社に向かつて一拝し、なにやら儀礼めいたしぐさをしたあとで、観衆に向けて一礼した。再びオオオと声が起こる。

神主は後ろを向いて格子の横から小さな通路を開き、檻の中に侵入した。赤い提灯の光で、白い装束が赤く染まる。太鼓の音が小刻みになる。

神主は赤い布の前で2回お辞儀をし、2回柏手を打つてもう1度お辞儀をしてから、おもむろに布を外した。

中は漆塗りの立派な箱だ。高さは神主の腿のあたりまでで、正面に立派な金飾りのついた扉がある。

神主は扉に手を掛け、重々しく開いた。

悲鳴が起こった。

箱の中には赤い浴衣を着た女の子が、正座をした恰好で入っていた。

でも顔は見えなかった。その子の肩は、箱の天井ぎりぎりの高さにあったのだ。

首から上が、箱に収まってない！！

まるでマジックのように、頭部が消失してしまっている。

「観衆が叫び声を上げて波のように揺れている中で、

「いた！かのちゃん！」

ウイズが小さくつぶやくのが聞こえた。

瞬間、ウイズの視界が途切れて暗くなり、次に明るくなった時、彼の体は箱の後ろ側にあった。

(ショートカットした……)

瞬間移動、ではない。もともとは夢の中だ。意識を飛ばせば一瞬で移動できるのだろう。

ウイズは以前、あたしの臨終の夢にもいきなり現れた。どうなってるのかと思っていたけど、本人にとってはこれだけのことだったのか。

箱の後ろに、直径10?くらいの穴が開いていて、そこから太い肌色のホースの様な物が伸びていた。穴と同じ太さの、消防車についているような長いホースに見えた。ただ表面が生き物の皮膚のようで重さもある、不気味な質感だ。

ウイズはそのホースを目でたどった。それは社の建物の奥まで伸びて、壁に空いた小窓から外へと続いている。その先がどうなっているのか、ここからではわからなかった。

「かのちゃん。かのちゃん!!」

ウイズは箱の正面に回り、首のない女の子の肩に手をかけて揺すった。

「かのちゃん、帰ろう！」

女の子は無反応だ。首がないのだから、聞こえてないんだろう。

ウイズは彼女の手を取って、箱の外に引き出そうとした。そのウイズの肩を、乱暴につかんだ者が居る。

神主が、怒りの形相をたたえてウイズを突き飛ばした。

「かしこくも尊き田能加実の仙孤大神に対し奉り恐れも知らぬ所

業に及ぶ輩を如何にせん」

怒鳴りつける神主の顔が變形した。口の部分がぐんと前に突き出して黒く変色する。

カラス天狗だ。

くわつとくちばしを開くと、とんでもなく甲高い鳴き声が耳に突き刺さった。

天狗は手にした錫杖を振り上げて、奇声を上げながら魔術師に打ち掛かって来た。

ウイズは現実の彼より素早かった。体を屈めて箱の陰に駆け込む。

錫杖が箱をかすめて打ち込まれ、勢いでふたが外れて穴の開いた裏板が飛んで行った。

うまい具合に首の部分が外れたのをいいことに、ウイズはかよのさんの体を箱の裏から引つ張り出してしまった。

「おいで。首を取り戻してあげるから」

強引に手を引いて走り出す動作が、べらぼうに早い。

カラス天狗が後ろから追いかけて来た。

広げた翼は、絵本で見たよりも格段に大きい。後方の視界が全部隠れるくらいだ。

ウイズは壁の前でショートカットをやり、神社の外に出た。

そこから先は山肌が立ちはだかっている。その斜面を例の肌色のホースが、一直線に延々と上へと伸びていた。

ホースの一番手前は、浴衣を着た女の子の首へとつながっている。そう、ホースは首そのものだった。

彼女の首は、長々と伸びて頭部ごとどこかへ持ち去られてしまっているらしかった。

### 35、ご神体の首（後書き）

映像的にはたいへんにグロイ状況ですが、夢の中なんでご容赦ください。

次回は首探しをやります。

### 36、崖っぷち

目を開けて、湯気の立ちこめた浴室を見回した。

魔術師は夢の中にどっぷり浸かっているけれど、あたしはその間、現実の方も見張ってないといけない。

蛇口からタボタボと浴槽へと注がれるお湯は、あたしたちのおへその上くらいまで上がって来ている。

まだ大丈夫だ。

ちよつと汗ばんで来たウイズの額を指先で拭いてあげてから、あたしはもう一度目をつぶった。

いきなりガツンと、顔面に衝撃を感じた。

額の前に伸ばしたウイズの手の向こうで、カラス天狗の血走った両眼が、射るようにこっちを睨んでいる。

天狗の振り下ろした錫杖を、ウイズが目前で掴んだのだ。手の甲が額に当たったのは力負けしたのか。

そこはがらんと開けた、何にもないちよつとした岩場だった。

景色からするとかなりの高台だ。さっきの斜面を、首のつながりをたどってショートカットで登って来た先なのだろう。

ウイズはそこで、小さなかよのさんの体を背中に庇いながら、カラス天狗を迎撃していた。と言っても、こちらに武器があるわけじゃないので、攻撃をかわしてその隙に逃げるくらいのことしかできないのだ。

「かのちゃんっ」

何か武器を出して貰おうとして話しかけても、頭部のないかよのさんには聞こえないと来てる。

ここはかよのさんの夢の中だから、彼女自身がウイズの持つ武器

を想像してくれない限り、丸腰で頑張るしかないのだ。

魔術師は打ち掛かって来る錫杖を受け止め、振り払われると後退して、ショートカットで移動し始めた。

それを空から来たカラス天狗が追いついてまた攻撃する。何度も同じことが繰り返された。

単調な動作の繰り返しをわざと続けて、ウイズは何かを狙っているようだった。

打ち掛かる。受け止める。

振り払う。逃げ出す。

同じリズムの攻防が何度続いた時だっただろう。突然、ウイズはそれを崩した。

振り払われた後、一旦逃げ出すと見せて急に振り向き、飛び立つ天狗の足を掴んだのだ。

相手はウイズを追うため、空を飛ばうとしていたところだった。

一瞬の目まいと同時に、視界が中空に駆け上がった。

小さなかよのさんを抱いたまま、ウイズは天狗に吊り上げられて空高く舞い上がっていた。

「よし見えた！」

ウイズが小さく叫んだ。

長く長く伸びた首のホースが遠ざかる、その先頭が見えたのだ。

それは岩場を越えて細い田舎道を走り、その先の水田が延々と広がる山道を辿っているところだった。

首を抱えて走る人影は、幼児のように小柄だった。

肌は土色。頭は全身の半分を占めている。

羽ばたきの音を聞きつけて仰向いた顔は、褒めばって目ばかり大きい。がりがりに痩せた短い手足、あばらがくつきり浮き出た胸、まん丸くせり出した下腹。

昔、絵本のどこかで見た、「餓鬼」というやつかもしれない。

ウイズは満足そうに天狗を掴んでいた手を離し、ショートカットに移った。

彼はこれが見たくて空を飛んだのだ。 目的地が判ればそこまで一瞬で移動できるのだから。

暗転ののち、次の視界は地面の上。

ウイズは手を伸ばして、餓鬼の細い腕を掴んでいた。 大きな目を恐怖に見開いて、餓鬼が首を振りながら後ずさる。 反対の腕に、しっかりと抱えた人間の頭部があった。

場違いな音楽が鳴り響いたので、あたしは慌てて目を開けた。

「黒のサンバ」の音楽は、あたしの携帯の電話着メロだ。 それは間違いないんだけど、あたしはここに来る時荷物をハツちゃんに預けたので、この浴室には携帯を持って来てない筈なのだ。 ということは、ウイズがわざわざあたしの携帯を持ち込んだと考えるしかないだろう。

ワゴンにはまった脱衣籠が、浴槽のすぐわきに置いてある。 着信音はその籠の中から聞こえていた。

手を伸ばせば何とか届く距離だ。

つまり、この姿勢で電話を取れと言いたい訳だろう。

送信者はハツちゃんだった。

「二人とも無事ですか？ のぼせてませんか」

それが持ち味の、淡々とした冷静な声で聞いて来る。

「今のところ大丈夫です。 何かあったんですか？」

「新田が意識を取り戻しましたよ。 かよのさんはまだ手術中です。」

残念ながら我々は家族でも何でもないので、細かいことはいちいち知らせて貰えないんですがね」

「それでどうしてわざわざ電話を？」

「電話は、如月さんに10分おきにかけるように頼まれたんです」

「ウイズが？ 何のためかしら」

「二人してのぼせたり、美久ちゃんまで眠っちゃったりしたら困るからと。保険を掛けとくって言うてました」

あたしは腕の中の魔術師の顔を見た。

熱いお湯の中でウイズの頬はバラ色に染まって、ちょっと呼吸も荒くなっている。

そうか、ウイズったら。

意地でも戻って来るつもりなのね。

現実の体の中に、あたしのこの腕の中に。

あたしは魔術師の頭をゆっくりと撫でた。こんなに無防備な彼に触れるのは、きっと世界中であたし一人だ。

「ハツちゃんさん」

「八角はっかくです。ちゃんと本名です」

あ、そういう名前だったんだ。体は丸いのに。

「八角さん、もしできたら新田に面会して、かよのさんが好きな物を聞いてみてくださいませんか」

「好きな物って？」

「この世に未練を持つならこれだろう、みたいなものです」

「ははあ、なるほど」

ハツちゃんはすぐに納得し、10分後にもう一度電話をするから、その時まで聞いておこうと約束してくれた。

あたしは急いで携帯をワゴンに戻した。急がないと、もう脇のあたりまでお湯が上がって来ている。

ウイズの顔が水没しないように、全身を揺すり上げて抱き起してから、大急ぎで目をつぶった。

「何が起こったの？」

夢の中の情景は激変していた。

すぐ目の前の地面に、ドーンと深い亀裂が出来ていたのだ。下は切り立った崖になっている。

ほのぼのした田舎の景色だったそこは、黒々とした崖のおかげで恐ろしい印象になり、墨で描かれた地獄絵を連想させた。

崖の縁近くで、かよのさんの胴体が暴れていた。

これまであんなに大人しかったのに、彼女は浴衣のすそを振り乱し、ウイズの手を振りほどこうと躍起になっって抵抗していた。

崖の対岸に行きたいらしい。

崖下を覗き込むと、ビルで言っって8階ぐらいの高さがある。その下をごうごうと音を立てて水が流れていた。

つまり、川だ。かなりの濁流だった。

川幅はそう広くはない。だからと言っって、ほいと跳び越せる広さでもなかった。

そうか、ここがあのお世とこの世の境目なのか。あたしの時も、こんな激しい流れじゃなかったけどやっぱり川だった。病院のかよのさん、いよいよ正念場に来ているらしい。

対岸、つまりあのお世側の岸边には、おびただしい人影があふれていた。

餓鬼の群れだ。

そっくり同じ顔、同じ体つきのがりがりに痩せた小鬼たちが、それぞれ小脇に首を抱えて対岸に集まっている。立っっているのも座

っているのも、隣と話をしているのもいる。

彼らに抱えられた人の頭は、こちらから全部見えるわけではないが、どうもこれがまたそっくりの女の子の顔をしているように思われた。そのそれぞれの頭から、だらんと長い首が伸び、崖を渡る吊り橋に集中していた。

細い素朴な縄で出来た、今にも落ちそうな吊り橋は、崖の上から垂れ下がるようにだらしなくU字型に架かっている。そこへ何十何百という首のロープが絡みついてもつれ合っているため、橋はまるで肌色の竜の姿のようだった。

そこからたった1本の首だけがこちら岸に渡っている。それがウイズの腕の中で暴れるかよのさんの胴体に繋がっているのだ。そして、残りの首の先は……。

あたしは思わずワツと声を上げた。

橋げたから川に向かって、浴衣を着た子供の胴体が、いくつもいくつもぶら下がっているではないか。

よく見ると、暗い崖下の濁流の中にも、何体もの胴体が落ちているようだ。崖の途中に引っかかっている胴体もある。

どうするの、これ！

対岸に渡ったら、かよのさんは死んでしまう。でも、ここにいたら彼女は首がないままだ。いつまで経っても「戻る」気にはならないに違いない。

ウイズが片腕で胴体を抑え込みながら、もう一方の手で首を引っ張ってみるのだが、当然ビクともしない。橋の上でしっかり絡まりあっていて動かないのだ。

そうこうするうちに、ついに胴体はウイズの手を振り切り、一目散に橋に向かって駆け出した。

「かのちゃん！」

ウイズが叫んで後を追う。

「かのちゃんダメだ、戻って！」

かよのさんの胴体が橋の上を走ると、絡まった首たちが一斉に動き始めた。

しゅるしゅるとほどけて、彼女が通りやすいよう、もつれをほどくように輪っかを作り、逃亡に協力したのだ。

かよのさんの胴体は嬉しそうに、首たちの輪っかを次々にくぐりながら対岸に向かって走って行く。

そして、ウイズが橋の上に乗った途端、橋は大きくたわんで彼の邪魔をしにかかった。

バランスを崩して橋げたの縄に捕まる魔術師に、首たちはカウボーイの投げ輪のように、次々と襲い掛かって来たのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1430r/>

---

魔術師と魔女の遺産

2011年11月6日03時22分発行